

紀要 53号

# 研 究 報 告 書

平成28年3月

尼崎市立教育総合センター



## はじめに

学習指導要領改訂に向けた内容が次々と示される中、これからのこどもたちには、厳しい挑戦の時代を乗り越え、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら未来を創り出し、課題を解決する力が求められています。少子高齢化、グローバル化や情報化といった予想が困難な変化の時代で生き抜く力を養うために、先を見通す力や自ら学び続ける力を育成する必要があります。

そのためには、教員自らが高い志やキャリア育成のために学び続ける力、新たな課題に柔軟に対応できる力、チームとして効果的に動ける力、組織をコーディネートする力が必要となってきます。また、それらが見える形で成果となり、実感できるようなしくみ作りが求められているといえます。

教職員の資質能力向上に関わる教育総合センターには、本市における教育的課題解決をねらいとした調査研究をすすめ、その成果を広める役割があります。昨年度は、「学びをつなぎ、人をつなぐこと」をテーマに研究を進めてまいりました。今年度はそれらを更に深め、「アクティブ・ラーニングの視点で学びをつなぎ、人をつなぐ研究をめざして」をテーマとして教育相談、教育の情報化ⅠとⅡ、算数教育研究、活用力向上、外国語活動研究、大学研究との連携による授業のユニバーサルデザイン化研究の7部会において研究を進めてまいりました。それぞれの研究において、未然防止が第一であるいじめを許さない集団作り、ICTの現存の機能をさらなる活用で強めていき、普及させていくこと、アクティブ・ラーニングの視点で授業の転換を図り、活用力を育むこと、教科化を迎える外国語活動の自ら学ぶ授業のあり方、合理的配慮で、だれもがわかる・できる・楽しい授業デザインなど喫緊の課題に即した内容となっています。さまざまなキーワードで縦軸だけでなく横軸にも転換できるような先の見通しを持った研究になるように進めてきました。

それぞれの研究を、各学校・園をはじめ多くの方にご高覧いただき、ご意見をいただければ幸いです。また、今後のみなさまの取り組みの一助になることを願っています。

最後になりましたが、今年度の研究を進めるにあたり、ご多忙にもかかわらず指導助言いただいた専任講師の先生方に深く感謝申し上げます。また、校長先生はじめ、時間を惜しまず熱心に取り組んでいただいた研究員のみなさま、ご協力をいただいたすべての方々に重ねて厚くお礼を申し上げます。

平成28年 3月

尼崎市立教育総合センター  
所 長 佐 藤 喜 代 子

# 目 次

|   |                                       |     |
|---|---------------------------------------|-----|
| 1 | 教育相談研究部会                              | 1   |
|   | 学校適応感を取り入れた指導のあり方                     |     |
|   | ーアセスを用いた見立てによる的確な支援を目指してー             |     |
| 2 | 教育の情報化研究部会Ⅰ                           | 17  |
|   | 学習支援ソフトの効果的な活用方法についての研究               |     |
| 3 | 教育の情報化研究部会Ⅱ                           | 35  |
|   | 校務の情報化推進についての研究                       |     |
|   | ー校務の情報化を進めるための学校へのアプローチ方法ー            |     |
| 4 | 外国語活動研究部会                             | 55  |
|   | コミュニケーションの楽しさをあじわうことができる授業のあり方を探る     |     |
| 5 | 活用力向上部会Ⅰ                              | 77  |
|   | 活用力を育む授業構想に関する研究                      |     |
|   | ーメディア・リテラシーに焦点をあててー                   |     |
| 6 | 算数教育研究部会                              | 95  |
|   | 「主体的・協働的な学習」の充実を踏まえた授業創りを探る           |     |
|   | ー「授業診断」を活用した「授業改善」を図るー                |     |
| 7 | 大学との連携 授業のユニバーサルデザイン化研究部会             | 117 |
|   | すべての子どもが「楽しく・わかる・できる」を目指して工夫する授業のデザイン |     |
|   | ーすべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業力プランー         |     |

## 「学校適応感を取り入れた指導のあり方」

ー アセスを用いた見立てによる的確な支援を目指して ー

指導主事 太 田 和 樹

研 究 員 水 本 美 穂 (大 島 小)

〃 上 野 由 香 子 (大 島 小)

〃 西 前 孝 嗣 (大 庄 北 中)

〃 田 中 大 輔 (大 庄 北 中)

〃 竹 田 匡 良 (日 新 中)

### 【内容の要約】

子どもに関わる問題は日々、複雑化・深刻化・潜在化を増している。経験の浅い若手教員、ベテラン教員を問わず、これまで培ってきた経験や勘だけでは、対応しきれない困難な状況に直面している。

そこで、未然防止、早期発見・早期対応を目指し、児童生徒理解に基づく生徒指導の充実を図るべく、本年度も勘や経験だけに頼らない客観的な尺度である学校環境適応感尺度「アセス」を利用した研究を進める。各学校現場でのより具体的な活用方法について、実践を通して探る。

キーワード： 学校環境適応感，アセス，対人的適応，向社会性スキル，友人サポート，統計学，集合から集団へ，教員の協働

|     |                    |    |
|-----|--------------------|----|
| 1   | はじめに               | 1  |
| 2   | 研究内容               |    |
| (1) | 研究のテーマ             | 1  |
| (2) | 研究テーマの設定           | 1  |
| (3) | 研究の実践事例概要          | 1  |
| 3   | アセスを用いた実践事例        |    |
| (1) | アセスを用いた学年での活用例     | 3  |
| (2) | アセスを用いた学校、学級での活用例  | 6  |
| (3) | アセスを用いた職員研修、個別の活用例 | 12 |
| 4   | おわりに               | 14 |



## 1 はじめに

社会的変化は激しく、自己肯定感の低下、人間関係の脆弱化、規範意識の低下、インターネットを介した問題の潜在化や拡大化など、子どもに関わる問題は日々、複雑化・深刻化を増している。

「平成26年度 全国学力・学習状況調査結果報告」（尼崎市教育委員会）によると、「自分にはよいところがあると思いますか」に対して児童27.4%、生徒39.3%に否定的な回答が見られ、「学校生活で、友達関係など何か悩みを抱えたら、誰に相談することが多いですか」に対して、児童24.0%、生徒28.6%が「誰にも相談しない」と回答している。自己肯定感の低下や人間関係の脆弱化、また問題の潜在化が本市でも見られる。

また、「学校に行くのは楽しいと思いますか」に対して児童18.6%、生徒21.1%が否定的な回答をし、また「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」に対しても児童30.0%、生徒32.2%が否定的な回答をしている。学校への不安や不適応、教員への不信感など、より適切な支援や指導のあり方がますます必要となっている。

教員においても、児童生徒指導上の複雑多岐にわたる諸問題への対応、予測困難な問題の発生、事後処理への膨大な時間の浪費など、経験の浅い若手教員、ベテラン教員を問わず、これまで培ってきた経験や勘だけでは、個々の教員だけでは対応しきれない困難な状況に直面している。

そこで、未然防止、早期発見・早期対応を目指し、児童生徒理解に基づく生徒指導の充実を図るべく、本年度も昨年度に引き継ぎ、客観的指標である学校環境適応感尺度「アセス」を利用した研究を進める。

## 2 研究の内容

### (1) 研究のテーマ

「学校適応感を取り入れた指導の在り方」

— アセスを用いた見立てによる的確な支援を目指して —

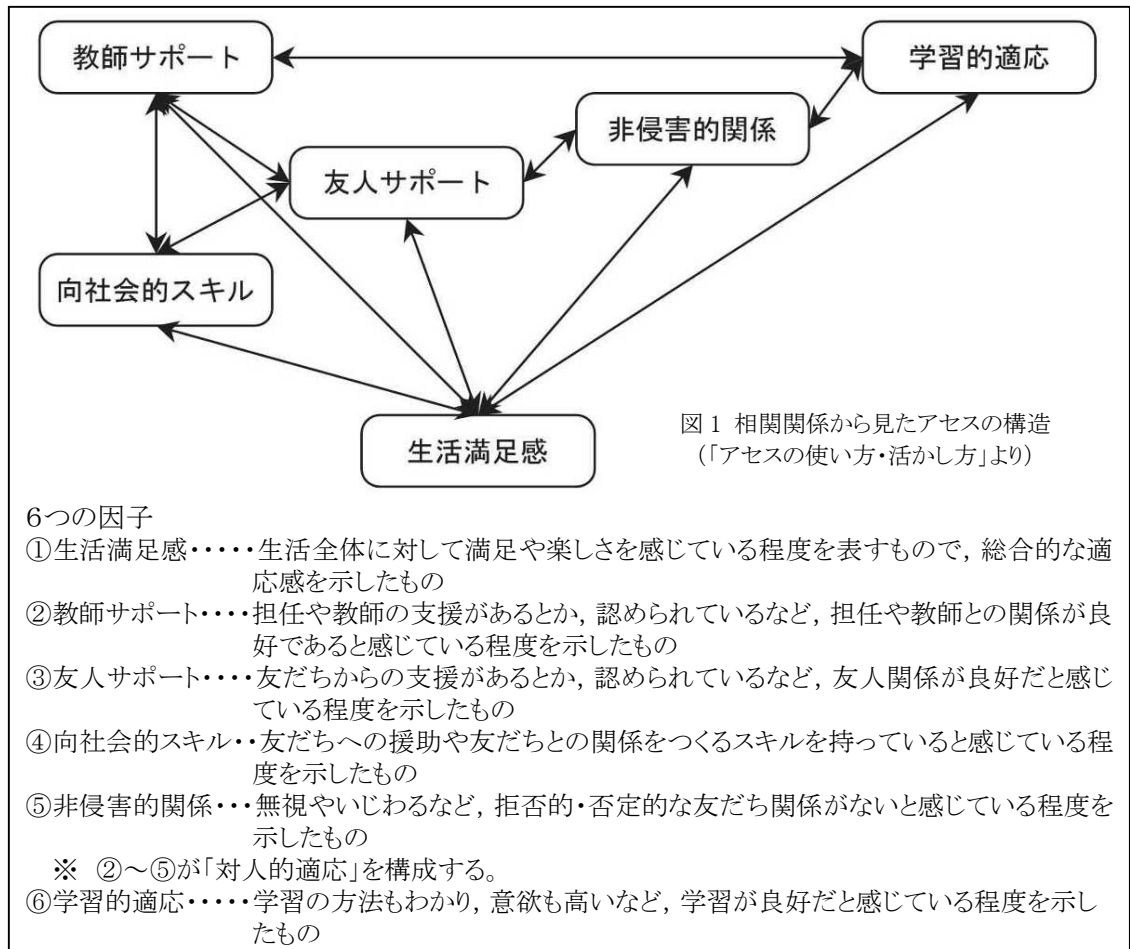
### (2) 研究テーマの設定理由

昨年度より、児童・生徒の学校環境適応感について、アンケートを用いた統計的手法によって分析するツール「アセス」について研究を進めてきた。昨年度は、その利用法や具体的な見立てについて実践事例を踏まえながら小中各教職員に紹介する程度に終わっている。今年度は、より具体的に各学校現場での活用方法についてさらに研究を深める。そのためには、学校や学級において児童生徒の実態が違う中でも、アセスを用いて客観的な見立てをし、児童生徒への支援につなげていくことが大切であると考え、本研究テーマを設定する。その際、広島大学の栗原教授が言われる「寄せ集めの集合から『個が育つ集団を創る』」ことを第一目標にし、さらに教員の共通理解と連携を意識した研究を進める。

### (3) 研究の実践事例概要

実践事例として、昨年度より活用している学校は、アセスの6因子の相関関係や行動観察による見立てにより、学年での課題を検討し、「道徳授業」を通して支援を行う。また、学年から学校全体に幅を広げ、学年の進級後もデータを引き継ぐなどの工夫をこらし、長期間にわたり個々の支援へ役立てるよう研究を進める。本年度より開始す

る学校では使い方や見立ての方法、支援について、職員研修を通して深めていく。



#### グラフ等の基本的な見方

##### ①「個人特性票」「学級平均票」(レーダーチャート掲載)

- ・数値は各因子の得点で、平均的な適応状態は50、偏差値とほぼ同じような数値です。
- ・適応感が高いと数値は大きくなります。40を下回ると相当適応状態が悪く、特に30を下回ると本人がSOSを感じている度合いはきわめて高く、本当に早急な支援が必要です。
- ・得点の3ポイントの低下がみられた場合、その領域において何かしらの否定的な変化が起きた可能性が大きく、逆に3ポイントの上昇が見られた場合、何らかの肯定的な要因があると考えられます。
- ・「学級平均票」の数値はクラス平均であり、得点は50近辺に近寄ってくる傾向があります。

##### ②「学級内分布票」

- ・各因子の適応の状態を棒グラフで表したものです。
- ・左から順に、50以上の割合を青、40以上50未満の割合を緑、30以上40未満の割合をオレンジ、30未満の割合を赤で示しています。
- ・理論上(全国的な平均をみると)、青の領域(青の割合)は約50%、青・緑の領域(青と緑の割合)は約84%、オレンジ・赤の領域(オレンジと赤の割合)は約16%程度になります。
- ・青の領域が40%を下回ったり、青・緑の領域が60%を下回ったり、逆にオレンジ・赤の領域が全体の理論値の2倍を超えて40%になったりすると、一人ひとりというよりも、学級全体がその因子について適応状態が悪いと考えられます。
- ・33人学級では1人が約3%に相当するので、細かくは気にする必要はありません。

(「アセスの使い方・活かし方」より)

※ 学級内分布票の分析は、実際のカラー表示及び引用文献に従い、本紙は白黒ではあますが、色表記で記載します。



### 3 アセスを用いた実践事例

#### (1) アセスを用いた学年での活用例

本年度の1年生は全体的に、入学当初より小学校からの幼さが残り、お互いを傷つけあったり、相手の気持ちを考えないような行動があったり、自己中心的な発言が多くみられた。それに加え、言う側、言われる側が決まっており、それを止めさせようとする雰囲気もあまりない。そこで、アセスの結果をもとに学年の弱い部分、伸ばしたい部分を絞り込み、中間層の意識を道徳の授業を通して向上させ、正しい意見を持ち行動できる集団の形成を目指した。そして、非侵害的関係に対する正しい判断ができるようになることで、否定的な意見・行動に対する抑止力を育成したいと考えた。それらを達成することにより、安心して所属することのできる学年集団の形成を図った。

##### 1. 研究テーマ

「アセスの見立てによる道徳授業を通しての支援のあり方について」

##### 2. 実践研究の目的

入学後すぐ、1回目のアセスを実施した。学級平均票より、特に「教師サポート」、「向社会的スキル」で、3学級の因子得点が50未満となった。また、学級内分布票において全国平均（青 50%）に比べ、青の領域の%がかなり低く、非常に悪い状態であり、対人的適応に課題が見られた（図 2-1、2-6）。

1学期教育相談前（5月末）に2回目のアセスを実施した。「友人サポート」、「非侵害的関係」の得点がさらに少し下がり、対人的適応の課題は増した。新たな友人関係を作りたいという期待感や新クラスでの緊張感もなくなった結果、新しい友人関係に戸惑いながら過ごしていく中で、お互いに傷つけあうような言動が増えたことが原因と思われる。また、なかなか友人関係のトラブルを自ら修復できないことが「向社会的スキル」の得点を低くし、そのため「友人サポート」や「非侵害的関係」の得点低下につながったと考えた（図 2-1、2-6）。そこで、学年間での共通理解・情報共有をより強化し、「道徳授業」を通して各得点の向上を図るとともに、お互いに良好な交友関係を築き、充実した中学校生活を送ることができる学年を自ら形成する力を持つ生徒の育成を目指すことにする。

また、「道徳授業」の展開にも工夫をし、担任による道徳授業ではなく、学年の生徒につけてほしい力を学年で考察し、教師一人ひとりが道徳の内容項目の中の1つを担当し、全クラス持ち回りで道徳の授業を行う。そうすることにより、同じ教師が同じ話を各クラスに伝えることができる

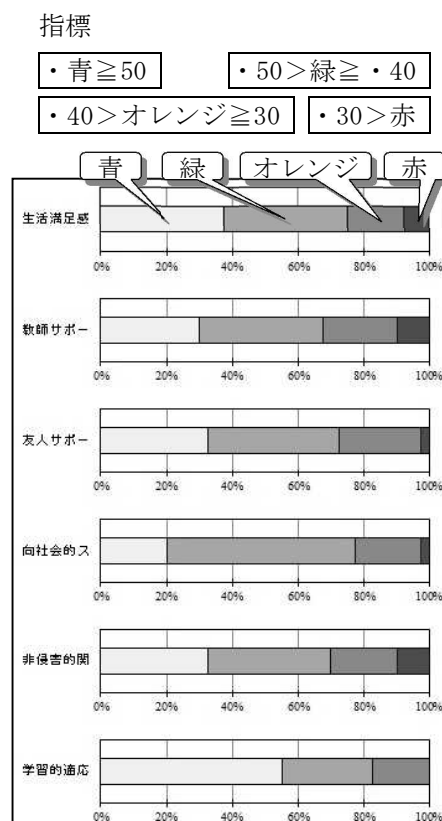


図 2-1 学級内分布票(A 学級 1 回目)

とともに、教師間の研修にもつながると考える。

### 3. 実践研究の内容

アセスの結果をもとに、学年会で育てたい生徒像を目指し、現状の生徒に必要な支援について考えた。全体として取り組むことにして、道徳に着目し、道徳の内容項目の4観点より、現状の学年に必要と考える2つの観点(観点2:主として他の人との関わりに関すること、観点4:主として集団や社会とのかかわりに関すること)で重点的に授業を行った。

また、道徳授業も従来の「担任による道徳授業」ではなく、それぞれの教師が必要と思われる2観点の中の内容項目を1つ担当(表1)し、各クラスで授業を行う「担当制の道徳授業」を展開した。理由として、同じ教師が同じ道徳授業を行うため、生徒への伝わり方が統一され、お互いの授業を見学することで、教員の研修にもつながると考えたためである。

「道徳授業」の展開として、グループ学習を取り入れ学級内の生徒の活発な意見交換の場を設定することにより、他者の意見を聞き自分の意見と比較することで、認め合い・尊重し合える集団の形成および、否定的な意見・行動に対して正しい判断のもと、それらを許さない規範意識の向上を目指した。そして、安心して学校生活を送ることができる学級をつくり、「友人サポート」力の強化、「向社会的スキル」の得点向上へとつなげたいと考えた。

### 4. 実践研究の分析

道徳授業の振り返りに独自のアンケートを取った。「道徳授業に積極的に参加することができましたか。」という問いに、学年の64%が積極的に参加することができたと答えている(図2-2)。また、「1学期に比べ学校生活は良くなりましたか。」という問いに、51%の生徒が「はい。」と答えている(図2-3)。

アセスを入学後すぐ(1回目)、1学期教育相談前(2回目)、2学期教育相談前(3回目)、2学期末「道徳授業」実施後(4回目)の計4回実施し、その結果を比較・分析した。

1回目の結果より、標準的な青の領域50%と比較すると、対人的適応関連のどの因子もそれより低く、良くない状態である。「向社会的スキル」に関して言えば、オレンジ・赤の領域の生徒は全国平均(約16%)と比較してもやや多い程度であるが、青の領域は20%とかなり低くなっている。これは、緑の領域が多く、つまり、やや自分のスキルに懐疑的な生徒が多い特徴が読み取れる。

| 観点    | 内 容 項 目     |
|-------|-------------|
| 2-(1) | 礼儀          |
| 2-(2) | 人間愛・思いやり    |
| 2-(3) | 友情・信頼       |
| 2-(4) | 男女理解・異性観    |
| 2-(5) | 寛容・謙虚・個性尊重  |
| 2-(6) | 感謝          |
| 4-(1) | 法やきまり・権利と義務 |
| 4-(2) | 公德心・社会連帯    |
| 4-(3) | 正義・公正・公平    |

表1 2観点の内容項目

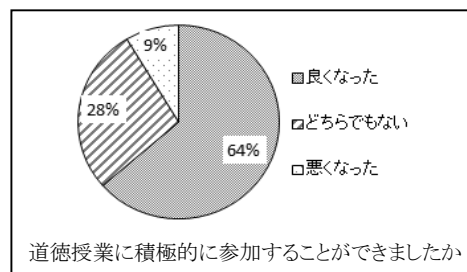


図2-2 学年のグラフ

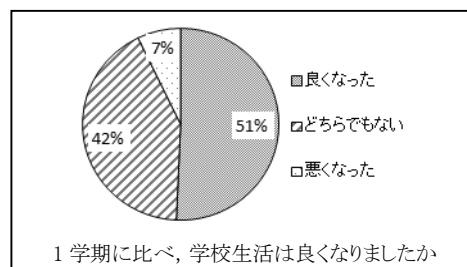


図2-3 学年のグラフ

入学時の幼い言動によるトラブルからも分かるように、対人的適応に関するスキルに未熟さが見られる。2回目の結果より、「向社会的スキル」のオレンジ・赤の領域の生徒は40%と増えた。

これは、自分のスキルに懐疑的な生徒がさらに自信を無くしたと考えられる。実際、異なる小学校からの新しい友人関係への戸惑いやトラブルが増え、自らその関係を修復できないなど見られた。(図2-4)。

4回目の結果は、「道徳授業」実施後、振り返りを行った後の結果である。「向社会的スキル」の青・緑の領域が増え、オレンジ・赤の領域が20%と半分まで減少した。学級平均票では「向社会的スキル」「友人サポート」「非侵害的関係」の得点で、それぞれ4ポイントずつ改善した。

道徳の振り返りの中で、「友人とも仲良く、楽しい学校生活を送りたい。」や「道徳で習ったことを生かして、友人と仲良く過ごしたい。」などの意見が多かったことより、道徳授業を通して、現状の交友関係について考える良き機会となったと思われる。また、道徳授業の中で、グループ学習を取り入れ、活発な意見交換を促した結果、「自分の意見を言えたり、いろいろな友人の意見が聞けたことで、より友人との距離が近くなった気がした。」との意見も出た。このことより、お互いの考えを聞くなかで、相互理解につながったと考える。

しかし、「向社会的スキル」でオレンジ・赤の領域は20%と大して減少しておらず、元々スキルに自信のない生徒は結局授業では変わらなかったという課題が見えてくる。また、「非侵害的関係」では全国平均では約16%前後のオレンジ・赤の領域が約30%と全国平均の倍近く、「友人サポート」はオレンジ・赤の領域は全国平均を下回った。また、全国平均では50%になるはずの青の領域は40%であり、依然として緑の領域が多く、「めちゃくちゃ困っているわけではないが、そんなにいいわけでもない」と回答している生徒が多いと考えられる。つまり、改善は見られるが、

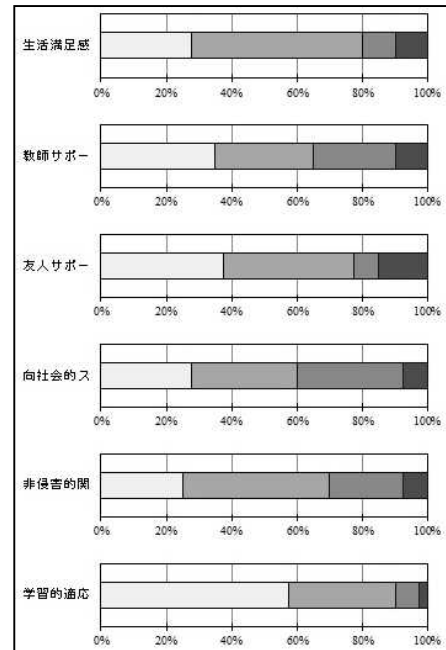


図2-4 学級内分布票(A学級2回目)

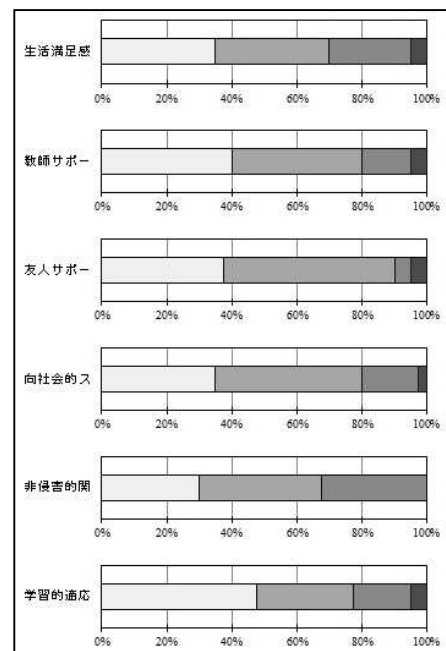


図2-5 学級内分布票(A学級4回目)

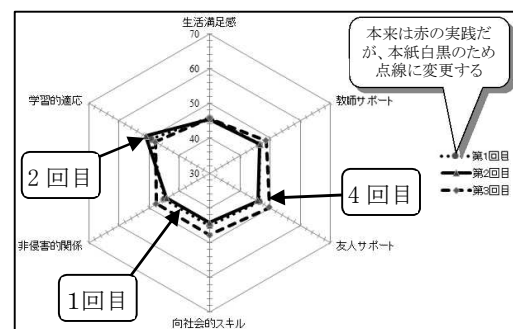


図2-6 学級平均票(A学級1,2,4回目)

やはり友人関係で困っている生徒は多く、そういう生徒の悩みに道徳授業だけでは対応しきれていないことが分かった。そのため、新たに道徳授業以外の支援を考える必要がある。

## 5. 実践の概要

「道徳授業」により、対人的適応のスキルを学ぶことで、中間層の意識向上のきっかけになった。しかし、自分のスキルに懐疑的な生徒、また元々スキルに自信のない生徒には、様々な場面でのスキル活用による成功体験など、自信をつけさせる必要がある。そこで、生徒同士の主体的な交流の場を道徳以外にも広げ、教科や生活の中でも積極的に取り入れることが大切である。また、学級によっては、「向社会的スキル」の得点上昇にばらつきが見られたり、「非侵害的関係」および、「友人サポート」の得点に変化が見られない学級があった。このことより、学年による取り組み以外に、学級内分票、個人特性票のデータを参考にし、各学級や個人の状況に応じた個別の的確な支援をさらに行う必要がある。

さらに、入学時のアセスの結果から、小学校時の交友関係の形成の仕方や、地域的な特性による課題等が見られ、小学校時代からの早期の対応が必要である。小中連携による一貫した生徒指導体制の充実に向けて、アセスを児童生徒理解の一つの共通指標とした活用など、支援体制を整えていく必要がある。

今回は「道徳授業」を活用するような手立てを考えた。しかしながら、その手立てが全校に活用できるかは疑問が残るところである。今回の研究をする中で、やはり大切なことは個々の生徒を良く理解し、目の前で支援を必要としている生徒にあった手立てを行うことであると、改めて知ることとなった。

## (2) アセスを用いた学校、学級での活用例

### 1. 研究テーマ

「アセスの見立てによる学校、学級における支援のあり方について」

### 2. 5つの心のアンケート結果（1回目）とアセス結果（1回目）による見立て

本校では4～6年の児童に向けてアセスを実施した。児童の実態としては学年ごとの差はあるものの、総じて自己肯定感が低い。また友人関係のトラブルも多い。これらの原因として考えられるのは①コミュニケーション能力の低さ②自尊感情が低いいため、自分や友達の良さを感じにくい③自己表現の未熟さの3つが考えられる。これは、本校で行っている5つの心のアンケート（学期ごと、年3回実施）の調査でも見られる（表2-1）。

| 5つの「こころ」のアンケート1回目 |                   |      |    | 4年 106 |     |                  |    | 5年 104 |     |                    |    | 6年 101 |    |        |    | 全体 311 |    |     |      | ※単位のない数値<br>は人数を表す |  |
|-------------------|-------------------|------|----|--------|-----|------------------|----|--------|-----|--------------------|----|--------|----|--------|----|--------|----|-----|------|--------------------|--|
|                   |                   | そう思う |    |        |     | どちらかといえば<br>そう思う |    |        |     | どちらかといえば<br>そう思わない |    |        |    | そう思わない |    |        |    | 思う  | 思わない |                    |  |
|                   |                   | 4年   | 5年 | 6年     | 全体  | 4年               | 5年 | 6年     | 全体  | 4年                 | 5年 | 6年     | 全体 | 4年     | 5年 | 6年     | 全体 |     |      |                    |  |
| 1                 | 学校が好きだ            | 49   | 36 | 48     | 133 | 44               | 41 | 31     | 116 | 10                 | 18 | 9      | 37 | 0      | 9  | 13     | 22 | 80% | 19%  |                    |  |
| 2                 | 感謝の気持ちを伝えることができる  | 40   | 21 | 56     | 117 | 53               | 63 | 28     | 144 | 12                 | 15 | 8      | 35 | 0      | 5  | 9      | 14 | 84% | 16%  |                    |  |
| 3                 | クラスは頑張ったことを認めてくれる | 47   | 14 | 10     | 71  | 38               | 54 | 30     | 122 | 17                 | 26 | 14     | 57 | 3      | 10 | 47     | 60 | 62% | 38%  |                    |  |
| 4                 | 先生や友達が話を聞いてくれる    | 58   | 65 | 46     | 169 | 36               | 32 | 30     | 98  | 11                 | 4  | 10     | 25 | 0      | 3  | 15     | 18 | 86% | 14%  |                    |  |
| 5                 | 自分にはよいところがある      | 76   | 21 | 28     | 125 | 17               | 42 | 31     | 90  | 11                 | 30 | 5      | 46 | 0      | 11 | 37     | 48 | 69% | 30%  |                    |  |

表 2-1 5つの心のアンケート集計票(4～6年1回目)

特に5項目のうち、「3、クラスは頑張ったことを認めてくれる」「5、自分には良いところがある」の2項目は6割程度と他の項目と比べても低い。また、学年間で考えると年齢が上がるにつれて自己肯定感は低くなる傾向が見られる。

上記のアンケートを実施した4～6年生に、アセスも同じように実施した。「生活満足感」「友人サポート」「非侵害的関係」において、学年が上がるほど学級平均票の因子得点は下がっていき、高学年においては約半数の学級で50未満の得点が見られた。この結果からも学年が上がるにつれて自己肯定感が低くなる傾向が見られる(図3-1～3-6)。また、E学級の学級内分布票を見ると、全国平均が約16%のオレンジ・赤の領域が「友人サポート」で20%、「非侵害的関係」で30%を越えている(図3-7)。高学年において多くの児童が友達関係についての何らかの悩みを抱えていることが分かる。

### 3. 全校の取り組み

#### (1) 全校掲示「〇〇が好き」

そのため学校全体の取り組みとして、人権週間を活用した「私のここが好き」「クラスのここが好き」「学校のここが好き」の掲示など自尊感情を高めるための活動を行っている。



写真1 全校掲示「〇〇が好き」(写真中の氏名は消去)

#### (2) 学期ごと(年3回)に5つの心のアンケートの実施

学期ごとにアンケートを実施することにより、児童の心の動きや配慮すべき点に早期発見出来るようになった。早期発見により、よりクラスの状況に応じた対応や指導、教材を用いて学習することができるようになった。

#### (3) クラスごとの実践

クラスでの実践事例(後述)のように、各クラスや学年でも自己肯定感が上がるようにと様々な取り組みを行っている。

#### 4. 実践後の5つの心のアンケート結果（2回目）とアセス結果（2回目）による見立て

| 5つの「ころ」のアンケート2回目 |                   | 4年 102 |    |    |     | 5年 99            |    |    |     | 6年 102             |    |    |    | 全体 303 |    |    |    | ※単位のない数値<br>は人数を表す |      |
|------------------|-------------------|--------|----|----|-----|------------------|----|----|-----|--------------------|----|----|----|--------|----|----|----|--------------------|------|
|                  |                   | そう思う   |    |    |     | どちらかといえば<br>そう思う |    |    |     | どちらかといえば<br>そう思わない |    |    |    | そう思わない |    |    |    | 思う                 | 思わない |
|                  |                   | 4年     | 5年 | 6年 | 全体  | 4年               | 5年 | 6年 | 全体  | 4年                 | 5年 | 6年 | 全体 | 4年     | 5年 | 6年 | 全体 |                    |      |
| 1                | 学校が好きだ            | 43     | 38 | 20 | 101 | 39               | 37 | 43 | 119 | 12                 | 15 | 28 | 55 | 8      | 9  | 11 | 28 | 73%                | 27%  |
| 2                | 感謝の気持ちを伝えることができる  | 51     | 50 | 45 | 146 | 41               | 40 | 36 | 117 | 8                  | 7  | 13 | 28 | 2      | 2  | 8  | 12 | 87%                | 13%  |
| 3                | クラスは頑張ったことを認めてくれる | 36     | 19 | 4  | 59  | 39               | 62 | 40 | 141 | 23                 | 18 | 36 | 77 | 4      | 0  | 22 | 26 | 66%                | 34%  |
| 4                | 先生や友達が話を聞いてくれる    | 54     | 67 | 43 | 164 | 37               | 24 | 40 | 101 | 9                  | 5  | 13 | 27 | 2      | 3  | 6  | 11 | 87%                | 13%  |
| 5                | 自分にはよいところがある      | 49     | 39 | 17 | 105 | 29               | 35 | 42 | 106 | 22                 | 22 | 27 | 71 | 2      | 3  | 16 | 21 | 70%                | 30%  |

表 2-2 5つの心のアンケート集計票(4～6年 2回目)

1回目の心のアンケートで低い傾向の見られた2項目のうち、全体としては「3，クラスは頑張ったことを認めてくれる」は62%→66%，「5，自分にはよいところがある」は69%→70%と、わずかではあるが上昇傾向が見られた。

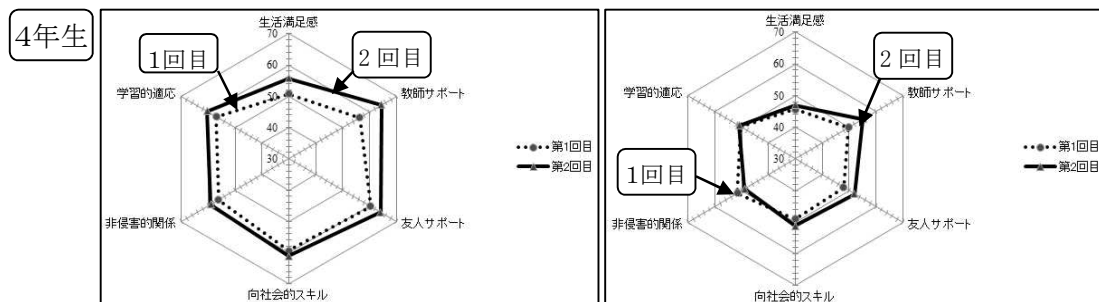


図 3-1 学級平均票(B学級1, 2回目)

図 3-2 学級平均票(C学級1, 2回目)

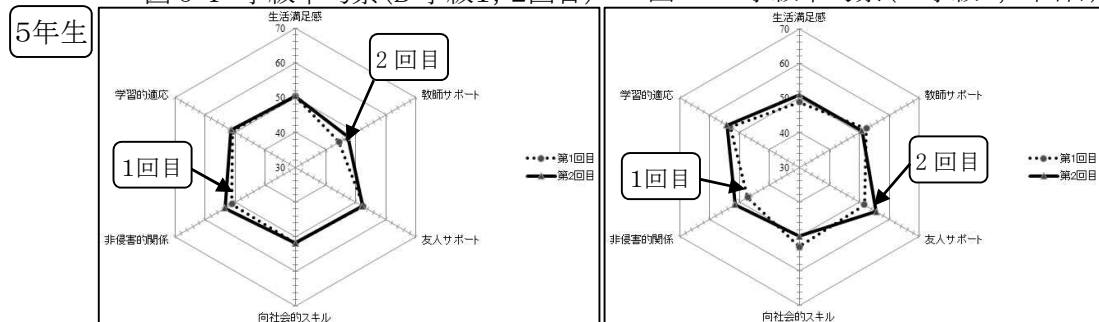


図 3-3 学級平均票(D学級1, 2回目)

図 3-4 学級平均票(E学級1, 2回目)

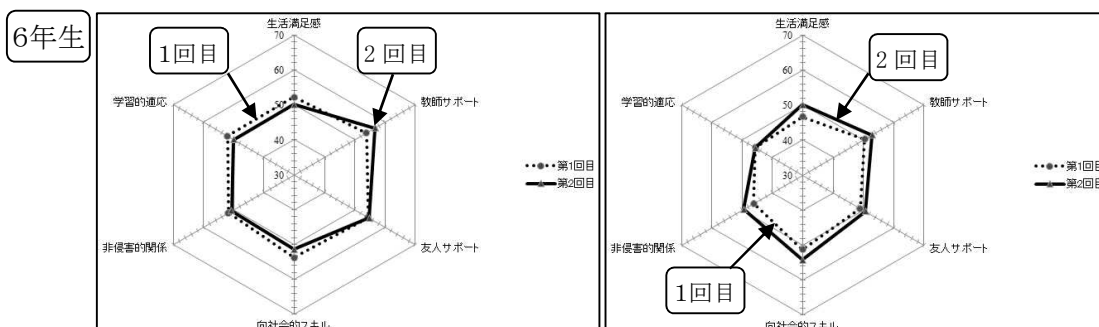


図 3-5 学級平均票(F学級1, 2回目)

図 3-6 学級平均票(G学級1, 2回目)

心のアンケートの5項目の内、低さの見られた2項目に近い観点としてアセスの中の「友人サポート」により焦点を当てて考えてみる。アセスの結果より、全校の取り組みにより、4年生では学級平均票の「友人サポート」の得点で最大4ポイントの上昇が見られるなど、多くの学級で上昇が見られた(図3-1, 3-2)。ただ、高学年になるに従って、得点の上昇が見られた学級と見られない学級は半々となった。また、学級によって「向社会的スキル」「非侵害的関係」の得点において、その増減は異なった(図3-3~3-6)。高学年になるにしたがって、友人関係をはじめ、対人的適応のスキルは複雑化し、学級や個別の適切な支援がさらに必要であるといえる。クラスに居場所があることが、自尊感情・自己肯定感に繋がるといえ、クラスや個人の状況変化をアセスも一つの指標として活用しながら客観的に把握し、そこから詳細な分析による的確な支援を、その都度実行することが大切であると実感した。

#### 5. クラスの見立て (E学級)

36名の学級(男子17名, 女子19名)である。クラス全体としてある程度まとまってはいるが、自己中心的な言動をとる児童も数名いる。大半の児童は「もっとこうしたい」という思いがあるが、それを全体でつたえることはできない状況のクラスであった。

1学期に実施した1回目のアセスの結果は、全体的に概ねどの要因に対しても適応感をもっていた。しかし、「友人サポート」や「向社会的スキル」が低いわけではないにも関わらず、「非侵害的関係」において友達からの疎外感をもっていたり、クラスメイトからよく思われていないと感じたりしている児童が多く見られた。いくつかのグループがあり、グループ外の友達との関係に課題があるのかもしれないと考え、「友人サポート」を増やし、

「非侵害的関係」の不安感やストレスの軽減を図ることにした。そのために「児童同士の横のつながり」がもてるようにと3つの手立てを考えた。まず1つ目に道徳の時間における「心」についての学習である。2つ目は「一人ひとり違った意見をもっている」ことについて道徳のジレンマ教材を用いて気づかせる学習である。3つ目として「友達の意見を受け入れる」ということについて、国語の対話を通して意識させる学習である。以上の3つの取り組みを実施し、変化を見ることにした。

#### 6. 見立てによるクラスへの手立てと児童の反応

- (1) 道徳の時間に「心」について取り上げた。「素直な心」とはどんな心かについて一人ひとり考えさせた。その道徳の時間以降は、クラスでの友達間のトラブルやクラスの状態においても「素直な心」を軸にクラス全体で考えさせるようにした。また、2学期の後半には「自分がどんな大人になりたいか」からそうなるために必要なこととして「素直な心」を取り上げ、話を進めていった。少しずつではあるが児童の意識の中に「素直な心」が浸透してきたように感じた。その授業の終わりに児童が書いた感想

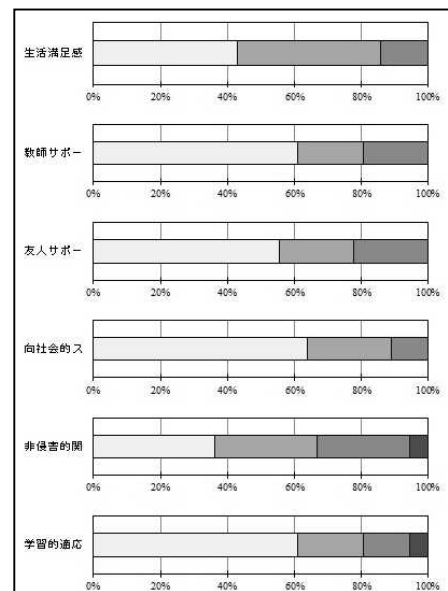


図 3-7 学級内分布票(E学級1回目)

は以下のとおりである。(参考文献: 松下幸之助著『素直な心になるために』)

- ・わたしは私心にとらわれていると思いました。
- ・今日やったことを思い出して前向きになりたい。
- ・足りていない心がたくさんあるから、それを埋めていきたいと思います。
- ・あせらず、ちょっとずつ進んでいき、立派な大人になるように努力する。
- ・これを考えたことで1歩成長できました。一步一步成長できるよう頑張りたい。
- ・生活の中で素直な心をもつと、何でもできそうな気がします。
- ・見た目だけ大人になるのではなく、心も大人になりたい。

(2) 道徳のジレンマ教材を用いて「一人ひとり違った意見をもっている」ことについて学習を行った。ジレンマ教材での学習後、児童の感想は以下のとおりである。

- ・迷ったけどみんなの意見で自分の意見が変わって楽しかったし、頭をいっぱい使った。いい勉強になった。
- ・自分の意見を言うことはいいなと思いました。これからも自分の意見を言いたいです。
- ・こういうみんなで話し合うことが、いいのかなと思いました。
- ・みんなで話し合って、みんなそれぞれ考えがあることが分かりました。
- ・いろんな意見があってそれぞれ思いがあるんだなあと思いました。
- ・人それぞれ考えることで、人は成長していくんだなあと思いました。
- ・なやむことも大事ということがよくわかりました。やはり道徳は心の授業だなあとしました。

この学習を通して、人それぞれ意見が違っていることに気付かせ、友達の意見を大事にすることの意識づけを図った。

(3) 「友達の意見を受け入れる」ということについては、国語の授業で取り組んだ対話を通して意識させた。ここで取り組んだ対話とは、①テーマに沿った自分の考えと理由を相手に伝える。②自分と意見が違っていても受け止める。③相手の意見を尊重した上で、そのことについての質問をする。④自分の考えと比べながら似ている点や異なる点について話し合う。であった。クラスには自分の意見の主張ばかりする児童が多い実態があったので、相手の意見を受け止める＝他者の受け入れにつながってほしい。また、一人ひとり考えは違っていて、それにはその人なりの理由があり、友達の意見が自分と似ていたり、違っていたりするのを自分の意見と比べながら聞くことの楽しさにも気付いてほしいと考えた。対話の授業のふり返しとして、次のような児童の反応が返ってきた。

- ・「そうかもしれない」と言ってしまうぐらい説明が上手かった。
- ・みんなそれぞれ理由などがちがって面白いなと思いました。
- ・相手と同じ考えだったけど、理由がちょっとちがっていろんな事が学べました。
- ・また、いろいろな人の意見を聞きたいです。
- ・相手の考えた事を聞くと少し納得する部分がありました。

7. 実践後のアセスの結果とその見立て



2 学期後半に実施したアセスの 2 回目の結果と 1 回目の結果を照らし合わせてみると、学級平均票の因子得点で「友人サポート」が 4 ポイント上がり、「向社会的スキル」が 3 ポイント下がり、「非侵害的関係」は 5 ポイント上がった(図 3-4)。

「友人サポート」の得点が 4 ポイント上がったというのは、児童が今までよりも友達を意識し、クラスメイトとして助け合うことの大切さを感じるようになったと捉える。「向社会的スキル」の得点は 3 ポイント下がる結果となったが、これまで「自分には友達と上手くやっていく能力がある」と自負していたものが、友達との関わりを考えていく上で「自分には自分が思っているよりも友達と関係を築くのが下手なのではないか」と気づいた結果も含まれていると考える。「非侵害的関係」においては、5 ポイント上がり、以前よりも拒否的・否定的な友達関係がないと感じられるようになってきている傾向を読み取ることができる。

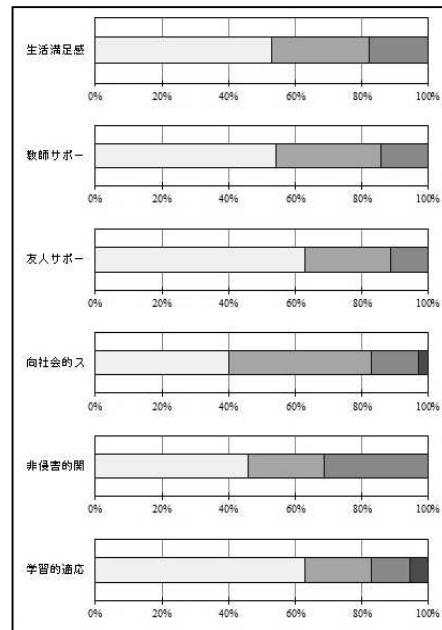


図 3-8 学級内分布票(E 学級 2 回目)

こうした結果から、少しずつではあるがクラスの中での友達同士の横のつながりはできつつあるのではないだろうか。また、道徳の授業を通して、心の持ちようや友達の存在や友達の意見の大切さを感じ、自分自身やその考えも友達から大事にされているのだと感じられるようになりつつあると考えられる。

#### 8. アセスの結果から見てきた成果と課題

1 回目と 2 回目の結果から、1 回目よりも全体的な得点は上がったものの、まだまだそれぞれの得点を上げる余地は十分にあるといえる。今後はこれまでの手立てを行いつつも更なる別のアプローチ、例えば他教科におけるグループ学習の工夫などを考え、「横のつながり」を太いものにし、児童一人ひとりがクラスの一員としての意識を高くもちながら活動できるよう指導していきたい。また、「向社会的スキル」を身に付けられるよう、その方法についての取り組みを考えていかななくてはならない。

道徳の授業を活用し、それが結果につながったことで、改めて道徳の時間の大切さが見えてきた。そこで得たものを日々の日常生活にも活かしていったほしいと考える。

#### 9. 校内研修とアセスの感想

今回、アンケートと共にアセスを実施するにあたって 4～6 年生の担任に校内研修を行った。2 回目を実施した際にはアセスを使ってみてどのように感じたか感想を書いてもらった。

○個々の思いを知ることができ、2 回目を行うことで変化に気づくことができた。

○アセスが一番よい方法かは分からないが、今後このような分析が必要になると感じた。しかしアセスを実施することに抵抗を感じる先生が多いことに対してなにか手立ては取れないか。

- 普段、感覚で行っていることをデータとして分析することにより1つの指標にできた。
- アセスで細かく分析することで、駄目なところではなく良いところに目を向けられるようになった。
- 自分のクラスを客観的に分析することができた。
- アセスの結果が全てではないが、客観的にみるよい機会になった。しかし手立てを考えるにはもう少しアセスについて知る必要があると感じた。
- アセスの中の質問内容が4年生にしては少し難しいと感じた。理解できていないまま検査をしてもよいのか悩んだ。



写真2  
校内研修

#### 10. まとめ

感想にもあるようにアセスには、小学4年から中学3年まで広い年齢層に実施できる反面、4年生にとっては少し理解しにくい設問がある。実施する際には教師の言動に左右されないように質問に対して説明せずに取り組ませたが、全ての児童が質問に対して正しく理解して回答しているか課題が残った。またアセスに対しても、教師の知識によって活かせるかどうか変わってくる。

今後は実施から分析、支援まで、職員研修を積み重ね、教員の共通理解をさらに深めながら取り組みたい。アセスでは、本校が実施している心のアンケートと比べるとより深い児童の心の動きが分析できる。またデータとして6因子による分析を行えるため、客観的にクラスや児童を見ることができ、多様な手立てに繋げることができる。各調査の良い面、悪い面を比較検討し、児童の内面を知るためにはどうすればよいかを常に考え、活用していきたい。

### (3) アセスを用いた職員研修、個別の活用例

#### 1. 研修の内容

本校では6月にひとつの学年で、試験的にアセスのアンケートを行い、その分析結果をもとに教育相談を行った。学年教師の中で、その分析結果が非常に参考になったという声上がり、さらに活用を行ってほしいという意見が出たため、アセスの職員研修を研究員の先生方に協力してもらい、全教員に対して10月に行った。研修では、アセスの特徴や使い方、学級内分布票や個人特性票など、それぞれの票の特徴や各票から読み取ることができる各学級・児童生徒の特性について、いくつかのパターンにそって説明を入れながら、見立てや支援の共通理解を図った。

#### 2. 研修後の感想

- ・子どもを理解するうえで固定観念が先行し、客観的な判断ができない場合が多々あると思います。その部分を数値として客観的に判断できることはすばらしい事と思います。
- ・良い取り組みだと思う。教師側からすると、クラスの様子がデータ化されるのでわ

かりやすいが、生徒にとっては同じアンケートを何度も解答するため面倒に感じるのでは・・・。

- ・自分の思い込みで指導していることもあると思います。子ども達の心の奥底がアンケートにより統計してもらえたら、客観視ができて効果が上がると思います。
- ・生徒の心の中の部分を客観的に見ることができるのは今までにはほぼありませんでしたので、ぜひ分布を（見本でも）見たいと思います。今日学んだアセスという新しいものと共に、従来からの古いものも大切にしたいですね。
- ・現代の生徒に適応しやすい手立てが出来るといいな気がしました。データだけがすべてではないと思いますが、効果があると思います。
- ・客観的な生徒理解につながり非常に良いと思う。また、生徒の解答の矛盾点が表示されるのは大変便利。適当に答えているという点も、何かしらの問題の現れと判断できるかもしれない。
- ・是非、導入してみたいと思いました。学校をあげて全学年で取り組み、特に3学年通して客観的に指導を振り返る機会を定期的に設けるのは、生徒にとっても教師にとっても大切だと思います。

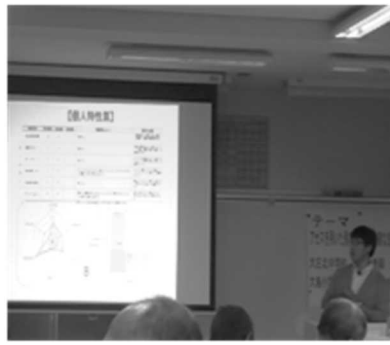


写真 3  
校内研修

### 3. 見立てによる個人への関わり

ある男子生徒Aは、以前は担任ともほとんど会話せず、友達も女子が多い生徒である。担任もどのように接していけばよいか悩んでいた。そこで、Aくんの学校生活の様子を踏まえ、6月のアセスの実施結果（図4）から彼を見立て、手立てを考えた。また、広島大学の栗原教授にも学校生活の様子、見立てや手立て、アセスの結果等を伝え、主に次のような3つの助言をいただいた。

- ・学力は高く、問題行動はなく、友だち（女友だち）とは仲良くやっている。もしAくんが女性なら何も問題ない。
- ・Aくんがそういう自分を受容できていないから、「向社会的スキル」が低くなっているような気がする。
- ・Aくんがそういう自分は理解されていないと感じているから被侵害得点が高くなっているかもしれない。教師・学校がAくんを受容できていない可能性もある。

1回目のアセスの結果および栗原教授の助言を基に、次の通り、声かけをまめにするようし、クラス内にも彼を受容するような環境作りを心がけた。

- ・声かけは、学校や日常生活、興味のある話題など、ささいな世間話を主として、なるべくコミュニケーションを取るよう心掛け、毎日1回は話しかけた。

・クラスに対しては、男子に「女子みたい」などと、からかわれたりする雰囲気もあり、同性婚や「男らしさ、女らしさとは」など、ジェンダーフリーの話をした。

その結果、2学期になってからはAくんから担任に話をする事が増えた。12月現在では1日に1回は自ら話をしてくるようになり、まですになった。現在も男子生徒と関わる事よりも女子生徒との関わりが多いように思われる。しかし、それでよいと考える。アセスの2回目の調査結果(図4)より、学校生活において目に見える変化ではないが、担任との関わりの中でAくんは自分自身の受容ができ、よき心の変化があった可能性があると考えられる。

アセスを用いる事で、彼への関わり方の見立てを行い、はたらきかけをすることで変化を確認することができた。今後も次の通り、継続的にAくんと担任、学年、学校で関わって行きたいと思う。

- ・男子、女子という枠にとらわれることなく、一人の中学生としてAくんが話をしやすい現担任を中心に教育相談を行い、他の生徒に対してもジェンダーフリーについての話を、各授業を通して教えていきたい。
- ・友人サポートの得点が、前回よりも下がっていた。「向社会的スキル」の高まりにより、自らも積極的に友達と関わろうとし始め、これまで意識しなかった友人関係にも視野が広がり、良好な関係がまだ気づけていないと感じたからかもしれない。今後は、グループ活動等の工夫を行い、できるだけ多くの生徒との交流機会を設定する。

#### 4. まとめ(考察)

学校生活の上では変化が見られなくても、アセスでは心の変化を表し、その見立てから具体的な支援に繋げることができる。また、担任とも会話が出来るようになってきたという事実の成果と課題を客観的に分析することもできる。アセスを活用し、個人での対応のあり方を考察することで、一人一人への的確な支援が可能であると考えられる。また、今回の職員研修において、アセスに賛同した教員も多く、来年はアセスを取り入れた学級経営や教育相談等、学校全体での取り組みにしていきたい。

| 適応次元    | 第1回目 | 第2回目 |
|---------|------|------|
| 生活満足感   | 53   | 64   |
| 教師サポート  | 36   | 40   |
| 友人サポート  | 54   | 43   |
| 向社会的スキル | 26   | 40   |
| 非侵害的關係  | 42   | 61   |
| 学習的適応   | 38   | 57   |

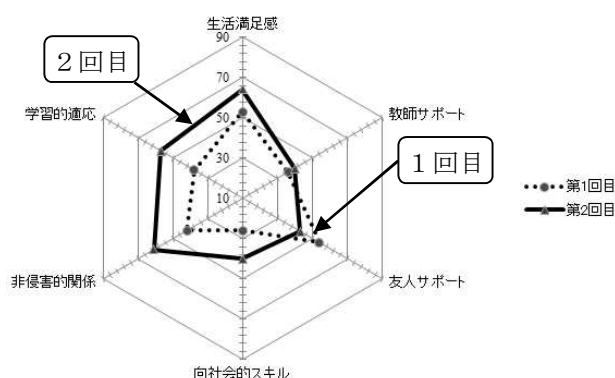


図4 個人特性票(生徒 A 1,2 回目)

#### 4 おわりに

前年度の研究を引き継ぎ、本年度はアセスを使ってより具体的な手立てを試みた。

広島大学の栗原教授が言われる「集合を集団へと変える」ことを第一の目標とし、教員の共通理科と連携を意識しながら研究を行い、教員の意識向上や学校・学年・学級経営における指導力向上に一定の成果は得られた。ただ、学校や学年単位の共通の取り組みに加え、児童生徒一人一人への理解に基づいた、各学級さらには個別の支援も必要であると実感した。アセスの活用も含め、教員の共通理解や連携による児童生徒への個別の支援体制の充実が今後の課題である。

アセスはあくまでも児童生徒を客観的に理解するためのツールであり、職員研修でのアンケートにもあったように、それだけですべてが理解でき、支援できるものではない。アセスをいかに利用し、一人一人の児童生徒をさまざまな角度から見て、支援することで、個が育つ集団が創られると考えられる。そして、教員の共通理解と連携のもと分析する力を高め、いかに具体的で、的確に支援をしていくか、丁寧な支援が大切である。

#### <参考文献及び引用文献>

「アセス（学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト）の使い方・活かし方」栗原慎二・井上 弥（編著者）2013 ほんの森出版株式会社

「いじめ防止6時間のプログラム いじめ加害者を出さない指導」栗原慎二（編著者）2013 ほんの森出版株式会社

「平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について」文部科学省初等中等教育局児童生徒課 平成27年9月16日

「平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじめ」に関する調査結果について」文部科学省初等中等教育局児童生徒課 平成26年10月16日

「平成26年度全国学力・学習状況調査結果報告」尼崎市教育委員会 平成26年12月

「兵庫教育4月号 2015 NO.770」兵庫県教育委員会兵庫県立教育研修所 平成27年4月1日

「学校生活に関するアンケート」活用のための《アセス》ハンドブック～6つの因子から測定する学校環境への子どもの適応感～」加古川市教育委員会青少年育成課教育相談センター 平成27年4月1日

「素直な心になるために」松下幸之助著



## 学習支援ソフトの効果的な活用方法についての研究

指導員 東 江 潤  
研究員 友 寄 新 悟（日新中）  
" 境 裕 輔（立花中）  
" 和 田 健（園田東中）  
" 永 田 実 咲（啓明中）

### 【内容の要約】

教員、もしくは生徒が ICT を活用した学習活動を効果的に取り入れることにより、生徒の学習に対する関心・意欲を高めさせることが求められている。それにより、教員の ICT 活用指導力の向上は、政府の「e-Japan 戦略」のもと重要な政策課題としても位置付けられ、「概ね全ての教員がコンピュータ等を使って指導できるようにする」ための様々な取り組みが実施されている。尼崎市においても、現在に至るまでにこれに向けて多様な方法で実践・研究が積み上げられてきた。その様な中、平成 26 年 9 月より、PC 室の機器更新を機に市内全中学校に学習支援ソフトが導入され、運用が開始された。

本研究では、その学習支援ソフトの学校での活用実態を調査して、効果的な活用方法について検証し、その成果をいかに学校現場に普及させていくかについて探った。

キーワード： 教育の情報化，中学校，学習支援ソフト（e ライブラリ）  
e ラーニング，コンピュータ，インターネット，

|     |               |    |
|-----|---------------|----|
| 1   | はじめに          | 17 |
| 2   | 研究の内容         |    |
| (1) | 研究のテーマ        | 17 |
| (2) | 研究テーマの設定理由    | 17 |
| 3   | 実践事例          | 19 |
| (1) | 実践事例 1（A 中学校） | 19 |
| (2) | 実践事例 2（B 中学校） | 23 |
| (3) | 実践事例 3（C 中学校） | 27 |
| (4) | 実践事例 4（D 中学校） | 29 |
| 4   | 研究のまとめ        | 32 |
| 5   | おわりに          | 32 |





## 1 はじめに

文部科学省は、平成 19 年 2 月に「教員の ICT 活用指導力」を策定・公表し、全国の教職員の実態を把握するために、毎年度末「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」を実施している。その調査の中に、教員の ICT 活用指導力について、「C-4 児童（生徒）が学習用ソフトやインターネットなどを活用して、繰り返し学習したり練習したりして、知識の定着や技能の習熟を図れるように指導する」能力を問うようなチェック項目がある。これは、児童生徒が学習用ソフトやインターネットなどを活用して、繰り返し学習したり練習したりして、知識の定着を図ったり、身に付けたい技能の習熟を図ることができるよう、教員が指導する能力を自己評価するチェック項目であり、平成 26 年度の結果では、全体の 63.2%の教職員が「概ねその能力を有している」と回答している。【平成 26 年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果（概要）平成 27 年 3 月より】

本市においては平成 26 年 9 月に、生徒がコンピュータを用いて、国語・社会・数学・理科・英語のドリル教材を繰り返し学習したり練習したりして、知識の定着や技能の習熟を図ることができる学習支援ソフト（※以下、e ライブラリという）を、市内全中学校に導入した。それにより、市内の中学校教職員が ICT を活用した指導を、今までよりも多くの場面でしやすくなる環境が整った。本研究部会では、e ライブラリの多岐にわたる機能の効果的な活用場面の検証と、市内の生徒の学習活動や学習時間、学習意欲に対する効果を探るため、研究を進めた。

## 2 研究の内容

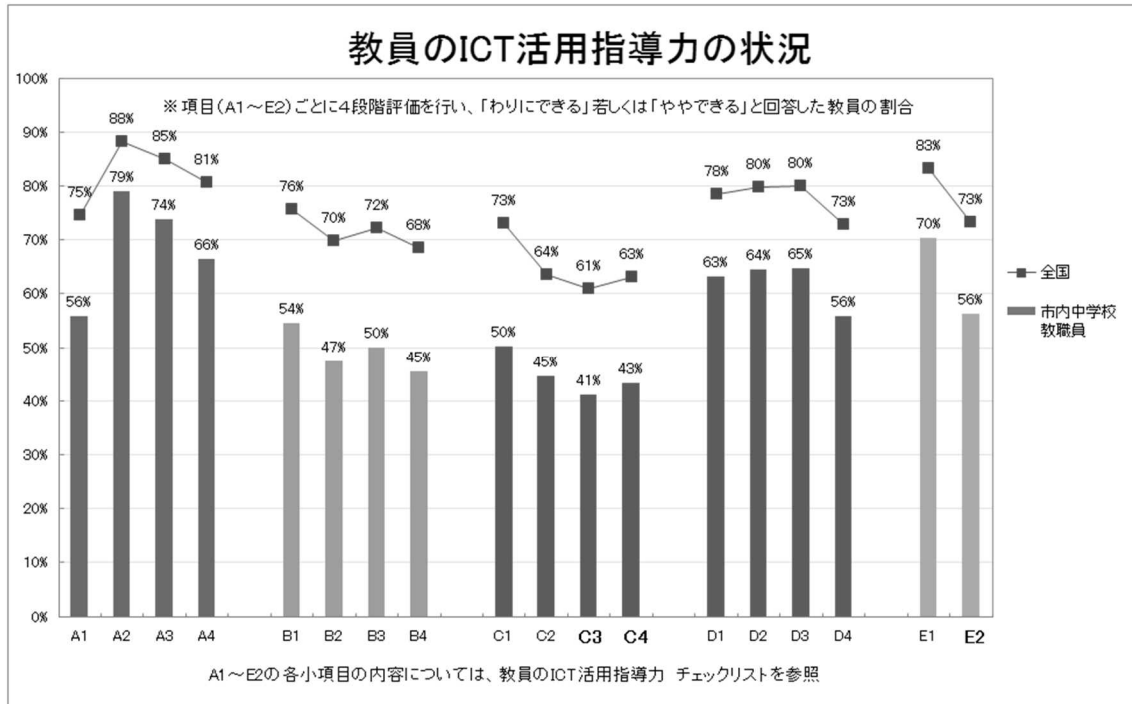
### （1）研究のテーマ

e ライブラリの効果的な活用方法についての研究

### （2）研究テーマの設定理由

平成 26 年度に実施した「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」における、本市の中学校教職員の回答結果を次に示す。（グラフ 1）

グラフからは、全国と比較するとすべてのチェック項目において、市内の教職員の ICT 活用指導力の自己評価が低いことが分かる。これは、市内の教職員の自己評価に対する厳しさや、忙しい勤務状況の中での ICT 活用時間の確保、また、市内中学校の提示装置等の設備整備の遅れ、そして、ICT の利活用に向けての研修やコーディネートなどの支援体制の問題も原因として考えられる。こういった解決すべき問題は多いが、e ライブラリの導入・運用が、ICT 活用指導力の補助として大きく貢献できる部分があるのではないかと考え、今回、本研究部会では教員の ICT 活用指導力チェックリストの生徒の ICT 機器活用能力と、校務での活用能力の項目である C-3、C-4、E-2（図 1）の 3 点に着目し、その指導に e ライブラリの活用が果たす効果について探ることとした。



【グラフ 1】

#### 教員のICT活用指導力チェックリスト

|                                                                        |
|------------------------------------------------------------------------|
| A1 教育効果をあげるには、どの場面にどのようにしてコンピュータやインターネットなどを利用すればよいかを計画する。              |
| A2 授業で使う教材や資料などを集めるために、インターネットやCD-ROMなどを活用する。                          |
| A3 授業に必要なプリントや提示資料を作成するために、ワープロソフトやプレゼンテーションソフトなどを活用する。                |
| A4 評価を充実させるために、コンピュータやデジタルカメラなどを活用して児童・生徒の作品・学習状況・成績などを管理し集計する。        |
| B1 学習に対する児童・生徒の興味・関心を高めるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。           |
| B2 児童・生徒一人一人に課題を明確につかませるために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。           |
| B3 わかりやすく説明したり、児童・生徒の思考や理解を深めたりするために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などを効果的に提示する。  |
| B4 学習内容をまとめる際に児童・生徒の知識の定着を図るために、コンピュータや提示装置などを活用して資料などをわかりやすくに提示する。    |
| C1 児童・生徒がコンピュータやインターネットなどを活用して、情報を収集したり選択したりできるように指導する。                |
| C2 児童・生徒が自分の考えをワープロソフトで文章にまとめたり、調べたことを表計算ソフトで表や図などにまとめたりすることを指導する。     |
| C3 児童・生徒がコンピュータやプレゼンテーションソフトなどを活用して、わかりやすく発表したり表現したりできるように指導する。        |
| C4 児童・生徒が学習用ソフトやインターネットなどを活用して、繰り返し学習したり練習したりして、知識の定着や技能の習熟を図るように指導する。 |
| D1 児童・生徒が発信する情報や情報社会での行動に責任を持ち、相手のことを考えた情報のやりとりができるように指導する。            |
| D2 児童・生徒が情報社会の一員としてルールやマナーを守って、情報を集めたり発信したりできるように指導する。                 |
| D3 児童・生徒がインターネットなどを利用する際に、情報の正しさや安全性などを理解し、健康面に気をつけて活用できるように指導する。      |
| D4 児童・生徒がパスワードや自他の情報の大切さなど、情報セキュリティの基本的な知識を身につけることができるように指導する。         |
| E1 校務分掌や学級経営に必要な情報をインターネットなどで集めて、ワープロソフトや表計算ソフトなどを活用して文書や資料などを作成する。    |
| E2 教員間、保護者・地域の連携協力を密にするため、インターネットや校内ネットワークなどを活用して、必要な情報の交換・共有化を図る。     |

【図 1】

- ① 学校 PC 室や家庭用のコンピュータを用いて約 6 万問のドリル学習する機能
- ② 生徒が絵図や表、グラフなどを作成・提示する機能
- ③ 在籍する生徒の保護者等に一斉にメール配信する機能

上に示す e ライブラリの主な 3 つの機能が、図 1 に示される教員の ICT 活用指導力が問われる場面に貢献できると考え、それぞれの機能を用いた e ライブラリの活用を学校現場で実践し、その効果を探ることとした。その上で、e ライブラリの活用を推進することを目的として本研究テーマを設定した。

### 3 実践事例

- C-4 生徒が学習用ソフトを活用して、繰り返し学習したりして、知識の定着を図ることができるよう、教員が指導する場面での実践研究…………… 実践事例 1 (A 中学校)
- C-3 生徒がソフトでつくった絵図等を提示して、他の生徒にわかりやすく説明したり、表現できるよう、教員が指導する場面での実践研究…………… 実践事例 2 (B 中学校)
- E-2 メール機能を利用した情報交換によって、保護者・地域住民との連携を円滑に行うことを目的とした実践研究…………… 実践事例 3 (C 中学校)
- e ライブラリの促進・拡充方法についての実践研究 実践事例 4 (D 中学校)

#### (1) 実践事例 1 (A 中学校)

##### 1. 実践の概要

「e ライブラリを活用した放課後補充学習の充実について」  
 ～学校 PC 室や家庭用のコンピュータを用いてドリル学習をする機能の活用～

##### (1) 実践の目的

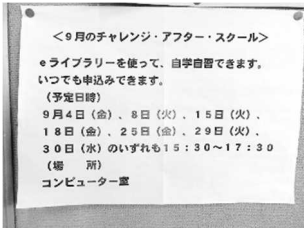
A 中学校では、年度の初めに技術の授業等で、情報教育の一環として e ライブラリのドリル学習機能を活用した自学自習のスタイルを全校生徒に紹介し、操作方法について指導を行う。そして、学校の PC 教室を放課後学習の場として提供することで、生徒が e ライブラリを活用しやすい状況を設ける。この放課後学習で e ライブラリを活用し学習している生徒を対象にアンケート調査を行い、また、放課後学習に参加していない生徒との比較分析をすることでその効果を明らかにし、e ライブラリを家庭学習習慣の定着にも役立てるために、どのように活用すれば効果的かを探ることを目的とした。

##### (2) 実践の内容

A 中学校では、「チャレンジ・アフター・スクール」という名目で、学力向上の一環とした希望制の放課後学習活動を行っている。これは、週に 1～2 回程度の頻度で、参加生徒がそれぞれ自分で課題を持参して学習に取り組む活動である。例えば、定期テスト対策としての学習や、長期休業日前の学習を補充する役割も担っている。ここでの学習課題は、それぞれが用意した参考書や宿題などに取り組んでおり、放課後学習支援補助員が、自学自習をする生徒にアドバイスやサポートも行っている。

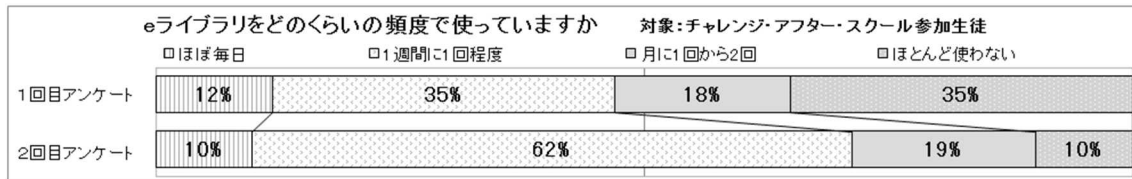
本研究では、この「チャレンジ・アフター・スクール」を PC 教室で行い、参加生徒一人につき一台の PC を割り当てて学習できるような体制を整えた。また、学校全体に、「チャレンジ・アフター・スクールでは e ライブラリを活用した自学自習をすることも可能である」と呼びかけ、生徒の参加を募るようにした。この呼びかけによって参

加し、eライブラリを使用して学習するようになった生徒に、eライブラリのドリル機能を用いることで、自分の苦手な単元や、学習したい分野を選択して繰り返し学習することができるという活用方法について指導した。また、解説教材機能を用いると学習のポイントを復習・確認することができるので、課題やドリルを解く上で分からない所を調べながら自学自習ができるという活用方法についても指導した。

| 実践                                                                                                                                                                                                                                                   | 留意点                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. eライブラリ活用アンケートの実施。(7月)</p> <p>2. eライブラリ活用の喚起</p> <p>①学校掲示による呼びかけ<br/>(PC室での活用の参加募集)</p> <p>②教育相談・個人懇談で全保護者への呼びかけ(PC室での活用への参加推奨や、家庭での活用の推奨)</p> <p>③「チャレンジ・アフター・スクール」参加生徒への、eライブラリ活用方法の指導(図3)</p> <p>3. 再度アンケートの実施。(12月)</p> <p>4. アンケートのまとめ</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートの質問内容である項目を研究部員の在籍している4校で統一して考え、実施時期なども統一する。(7月)</li> <li>・生徒が答えやすく、集計負担の少ない質問様式にする。</li> <li>・チャレンジ・アフター・スクールに参加していない生徒へのアンケートも行い、比較対象として分析する。</li> <li>・全教室に掲示することによって全生徒に周知できるようにする(図2)。</li> <li>・全ての保護者に向けて説明し周知できるようにする。</li> </ul> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>【図2】</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>【図3】</p> </div> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新たにチャレンジ・アフター・スクールに参加した生徒にも実施して分析する。</li> <li>・項目ごとにまとめ、生徒のeライブラリ活用に対する効果などを捉える。</li> <li>・今後の使用率向上のために必要なことを分析・考察する。</li> </ul> |

## 2. 実践の考察

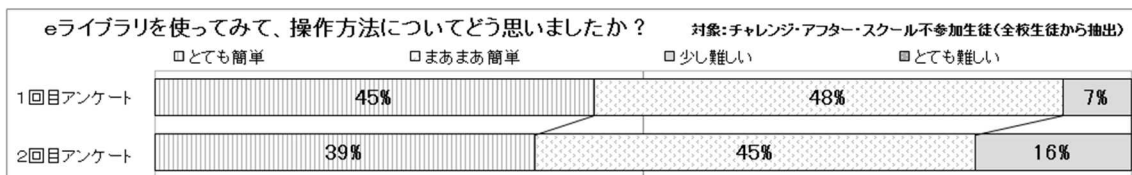
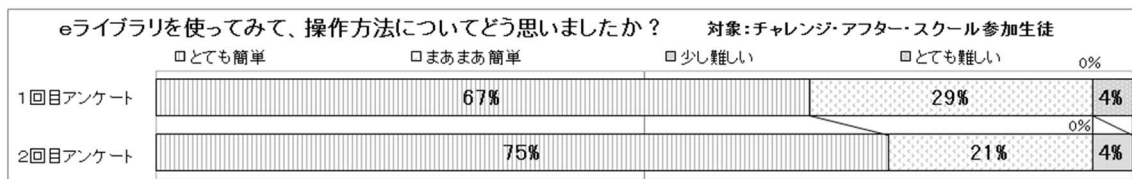
今年度、「チャレンジ・アフター・スクール」に参加してeライブラリを活用した生徒は、7月に27名であったのに対し、eライブラリ活用の喚起の実践を行った後の12月には57名に増加した。これにより、学校掲示による全校への呼びかけの実践(PC室での活用の参加募集)や、教育相談・個人懇談で全保護者へ呼びかける実践が、一定の効果を示したことが分かる。そして、以下に「チャレンジ・アフター・スクール」不参加生徒(全校生徒から抽出した40人)と、参加した生徒(1回目アンケートでは27人、2回目アンケートでは57人)の比較を行ったアンケート結果を示す(グラフ2)。



【グラフ 2】

結果が示すとおり e ライブラリの使用頻度には、「チャレンジ・アフター・スクール」に参加しているかどうかで差があった。「チャレンジ・アフター・スクール」不参加生徒は、e ライブラリの活用は家庭機能でのみとなってしまう、ほとんど使わない生徒が多数を占めた。ただ、その中でも教育相談や個人懇談の保護者への呼びかけ実践により、1週間に1回程度活用するようになった生徒も若干名いることがわかる。また、A中学校では e ライブラリのドリル機能活用回数(PC 室と家庭の活用の合計回数)が月平均 918 回となっており、尼崎市全体の平均 330 回を大きく上回っていた。市内の中学校で、放課後学習を毎回 PC 室で行う体制をとって e ライブラリを活用する環境を提供している学校は、A中学校のみであることから、この取り組みにより活用頻度が上がる事が分かった。

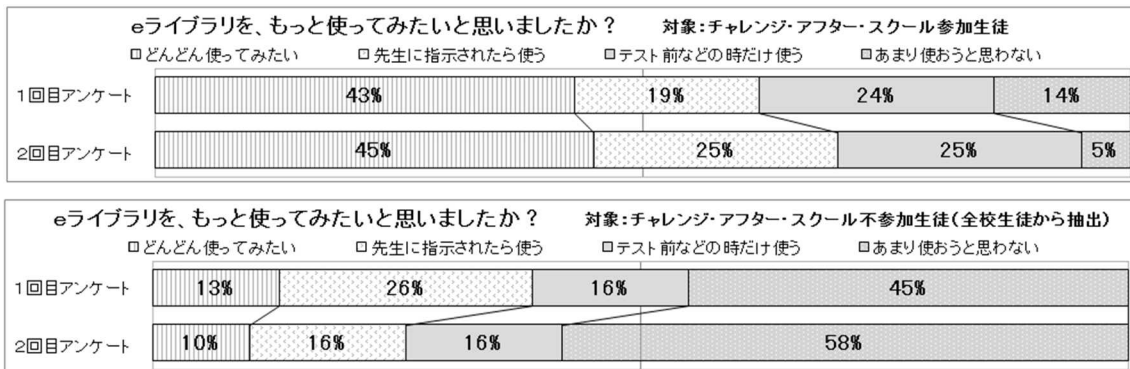
続いて、e ライブラリの操作方法についてのアンケート結果を以下に示す(グラフ 3)。



【グラフ 3】

操作方法に関しては、チャレンジ・アフター・スクールに参加して使用する習慣がついている生徒も、そうでない生徒も、約 90% 近くの生徒が難しいとは感じていない。よって、e ライブラリの活用が進まない理由が「操作方法の習得によるもの」とは考えにくい事が分かった。また、2 回目のアンケートとの比較をすると、チャレンジ・アフター・スクールに参加した際に e ライブラリをよく活用している生徒にとっては、操作方法に対する慣れも出てきて、使用すればするほど、より一層「難しくない」と感じるようになっていく事が分かる。逆に、チャレンジ・アフター・スクールに参加せず、普段から e ライブラリを活用する機会の少ない生徒にとっては、操作方法を「簡単だ」と感じる生徒の割合が減っており、使用頻度が操作方法に対する理解度に関係する事が分かった。

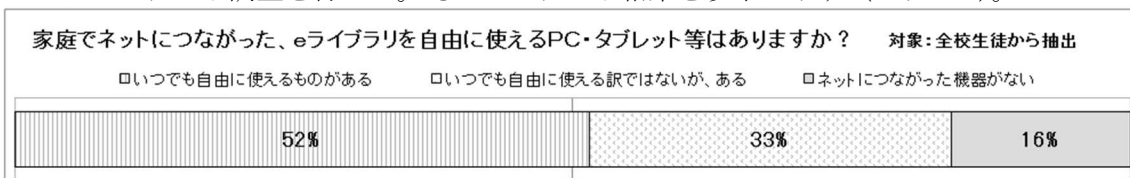
更に、e ライブラリ活用への意欲についても調査を行った（グラフ 4）。



【グラフ 4】

このグラフから、使用する意欲にも差が見られた。チャレンジ・アフター・スクールに参加して e ライブラリを定期的に活用している生徒は、どんどん使ってみたいと考えている割合が高く、一方、不参加の生徒は、テスト前など、限定的に活用しようと考えているものの、積極的に自ら進んで e ライブラリに取り組もうとは考えていない割合が高いことがうかがえる。

次に、どんどん使ってみたいと考えている生徒が、実際に家庭でも e ライブラリドリル機能を活用しているのかどうかを調べるために、A 中学校全校生徒の家庭用ドリル活用回数を集計した。その結果、A 中学校全体の PC 室でのドリル活用は月平均 815 回であったのに比べて、A 中学校全体の家庭でのドリル活用は月平均 103 回と、大きく差があることが分かった。この結果から、生徒はどんどん使ってみたいという意欲があるのに、家庭ではあまり活用していない事が分かる。そこで、家庭で活用が進まない原因として考えられる、「e ライブラリを活用するためのネット環境を有さない家庭の割合」を調べるため、チャレンジ・アフター・スクール参加・不参加両方の生徒にアンケート調査を行った。そのアンケート結果を以下に示す（グラフ 5）。



【グラフ 5】

この結果から e ライブラリを自由に使える生徒が約 50%，いつでも自由に使える訳ではないが、環境はあるという生徒が約 30%，合わせて約 80%の生徒が e ライブラリを家庭で使える環境を有している事が分かる。よって、家庭でのネット環境が、家庭ドリル機能の推進が進まない最大の原因であるとは考えにくい。そこで、ある程度家庭で使用できる環境があるのにも関わらず、家庭での活用が進まない現在の状況を考察してみた。

e ライブラリはたとえ、生徒に「どんどん使ってみたい」という意欲があっても、「家庭でも使えるから自由に使いなさい。」と教師側が呼びかけるだけでは使用率は高くない。例えば、テスト前に宿題として指示したり（ネット環境がない家庭の生徒にはプリント機能で補完する必要がある）、活用を進めている生徒の頑張りを認めてやる等のきっかけが必要なのではないだろうか。実際にチャレンジ・アフター・スクール

に定期的に参加し、PC 室で e ライブラリを使用する事が習慣化した生徒は、「どんどん使ってみたい」と意欲は高まっているので、その意欲を上手に家庭学習への活用に向けてやるきっかけを教師側が工夫してやれば、家庭での使用率は高まるのではないだろうか。

成績に伸び悩みのある生徒でも、PC を使った学習は楽しいと感じている。ドリルに解答したらすぐに採点されるシステムにより、間違いに気づきやすく、正解したときの達成感も感じやすい。楽しみながら学習する事で集中力も生まれ、時間の経過も早く感じ、そして、しっかりと学習に取り組めた、という達成感を感じるようになる事で e ライブラリをもっと使ってみたい、と思えるのではないか。最後に、実際に A 中学校において、家庭での使用率が高い生徒の意見を以下に紹介する。

- ・最初技術の時間にやってみて、家でも時間があつたからやってみた。理科が好きでやっていくうちに楽しくなり、時間を忘れて取り組むことができた。書かなくていいので手軽。わかりやすいし、使いやすい。テスト前に使用することが多かったので成績も上がった。やって損はないし、機会があればまた使いたい。  
(2 年生男子 使用回数 78 回、使用時間 150 分)
- ・家で勉強をしていないときに、学校からのプリントを見た親から勧められた。使ってみるとわかりやすくおもしろいと感じた。使ったときは成績が上がった。その後、塾に行くようになったのであまり使っていないが、時間があればまた使ってみたい。(2 年生男子 使用時間 109 分)

### 3. 今後の課題

PC 室で PC を一人一台割り当てて行う形式の放課後学習が、e ライブラリの活用に効果的であったことが今回の実践で分かった。しかし、今回 A 中学校で定期的にチャレンジ・アフター・スクールに参加した生徒は計 57 人で、学校全生徒数の 10% 程度にすぎない。今後この割合を増加させるためには、更なる呼びかけの工夫が必要である。また、e ライブラリを使用し始めた最初の内は、PC を用いた学習形態に物珍しさもあって活用が進むだろうが、飽きて活用が持続しないという事のないように、生徒の自主性だけに任せない働きかけも必要である。また、クラブ活動や習い事等のために、放課後学習へ参加しにくい状況の生徒が、e ライブラリを活用し始めるきっかけを創出し、家庭学習へのステップを図るように工夫していくことも大きな課題である。

## (2) 実践事例 2 (B 中学校)

### 1. 実践の概要

「e-ライブラリの授業への活用とその効果について」

～生徒が絵図や表、グラフなどを作成・提示する機能の活用～

#### (1) 実践の目的

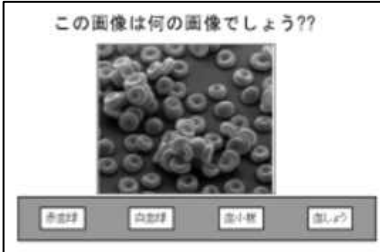
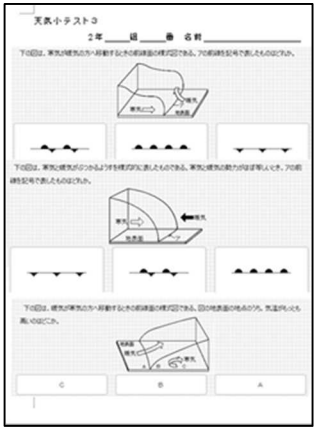
B 中学校には、本年度、特色ある教育活動事業として先生用・生徒用合わせて 11 台のインターネット設備の整ったタブレットが導入され、主に理科の授業で活用している。このタブレットは、班活動を通して、生徒の「思考する力を伸ばす」「表現力を育成する」という事を大きな目的として活用している。班で思考錯誤して、言語活動を行うことは、授業の 1 時間の中で大きな意味を持ち、思考力・表現力の育成につながる

る。そこで、タブレットを用いての発表や、言語活動の指導に e ライブラリを活用し、その実践の効果を探ることを目的とした。

また、反復することで覚えられる重要語句の定着や、練習問題を数多く解くことによる知識理解を深めるため、プリント作成機能やドリル機能を使って効果を探った。

## (2) 実践の内容

### e ライブラリ」ソフトの授業での活用の実践

| 実践                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | 留意点                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 生徒が e ライブラリステープラ機能（プレゼン機能）を用いて、作成した知識問題（図 4）をお互いに出題し合ったり、絵図などを提示して他の生徒に説明するように指導する。</p> <p>2. e-ライブラリのドリル機能やプリント機能を用いて紙ベースの小テストを作成し、授業で活用する。（図 5）</p> <p>3. 授業中にグループでタブレットを活用し、e ライブラリのドリル機能を利用する時間を設けて取り組ませる。（図 6）</p> <div data-bbox="252 1256 707 1509">  </div> <p style="text-align: center;">【図 6】</p> | <p>・単元の終わりに総復習を兼ねて行う。問題作りの作業そのものが復習も兼ねるように促す。</p> <div data-bbox="981 551 1362 801">  </div> <p style="text-align: center;">【図 4】</p> <p>・授業の流れを、「前時の復習小テスト」→「本時の授業」→「本時の授業の確認小テスト」として徹底し、知識の定着を促す。</p> <div data-bbox="1045 860 1362 1285">  </div> <p style="text-align: center;">【図 5】</p> <p>・学習する内容や難易度を指定し、紙を使うことなく数多くの問題に取り組ませて、学習内容を復習させ知識の定着を図る。</p> |

## 2. 実践の考察

e ライブラリステープラ機能（プレゼン機能）には、

① 選択問題を作成して正誤の判定を行う

② 重要語句を隠した状態で提示し、説明と同時にクリックして表示させる

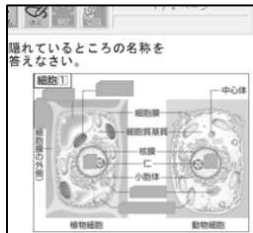
といったものがある。これらの機能を活用して、お互いが苦手とする単元の知識問題を作成し（図 7）、共有し合う活動には興味をもって取り組んでいた（グラフ 6）。また、他の生徒に説明するための提示資料を作成させる場面では、教科書やノートの絵図を上手に活用して（図 8）、グループで話し合いながら協働する姿勢が多くみられた（図 9）。また、全体の前に出での発表の場面では、その機会を繰り返し与えることで発表の技術が上達していき、成長が見られた（図 10）。定期テストへの対策として一生懸命取り



組む生徒も見られ、単元ごとの復習には良い方法であると考える。

1年生と2年生で比較したとき、2年生の方が問題作成する時間が短く、そして問題の内容が深いものが多かった。この理由として、タブレットは今年度からの導入であるが、2年生は1年間情報教育を受けていて操作に慣れているということや、定期テストに出やすい問題などを予想する能力が高いことが要因として考えられる。

また、ステープラの問題作成機能を使うに当たって、操作に慣れない時期は問題作成に時間がかかるため、あらかじめ教師側で発表様式のテンプレートを作っておくなど、時間短縮の工夫を考える必要があると感じた。



【図 7】



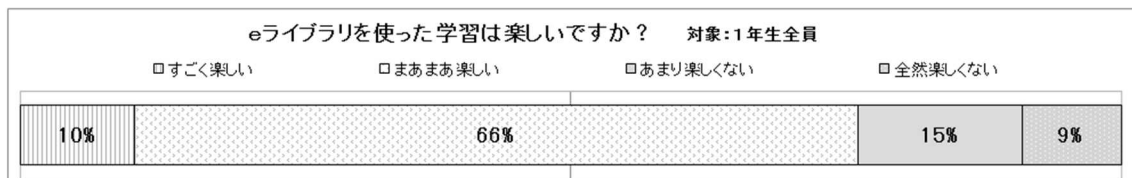
【図 8】



【図 9】



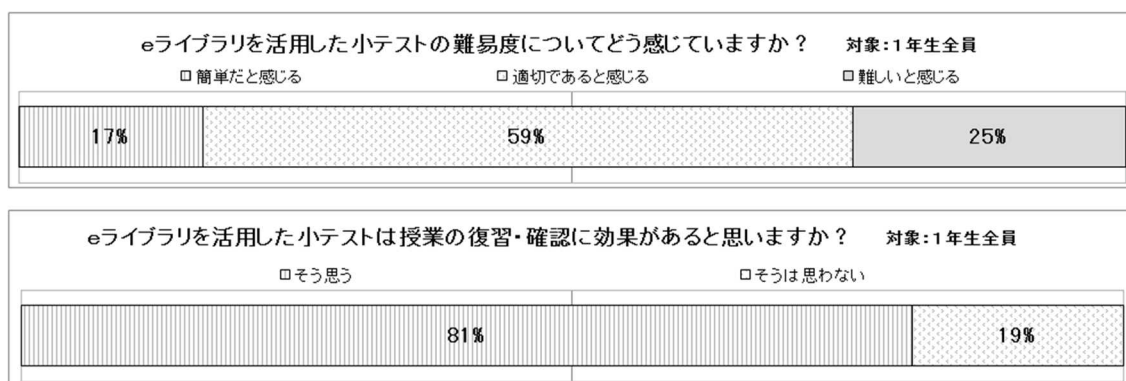
【図 10】



【グラフ 6】

次に、e ライブラリのプリント機能を活用して紙に印刷された小テストを作成し、毎授業の始めと終わりに行った。この実践では、前授業の確認と、本授業の理解度を確認するために行ったが、さまざまなレベルの生徒の理解度を確認するために、e ライブラリに用意されている「基本」「標準」「挑戦」の 3 つのレベルの問題のうち、最も難易度の高い「挑戦」レベルの問題から選択して小テストを作成した。毎時間、2 種類の小テストを作成する負担面についてだが、e ライブラリでは各教科の問題が小学 1 年生から中学 3 年生までの全学習単元（※国語は著作権の関係で文章に関する問題が限定される）で用意されており、全 60000 問の中から選択することができるため、教師が様々な単元に応じた小テストを作成するのに、負担が少なくて済むことを感じた。小テストを全て手書きで作成することに比べて、問題の選択が e ライブラリの中で容易にできることや、必要な問題図がデータとしてあらかじめ用意されていることから、小テストの作成にかかる時間も短縮できたと感じた。

次に、e ライブラリを活用した小テストを毎時間実施することに対し、生徒がどのように感じているかをアンケート調査した（グラフ 7）。



【グラフ 7】

結果から、小テストの実施について肯定的にとらえている生徒が多いことが分かった。小テストの問題数は 3～4 問程度であり、テストの難易度に対しても適切であると感じている生徒が過半数を超えており、「挑戦」レベルの問題に対しても前向きに取り組んでいることが分かる。また、毎時間小テストを実施することに対しても、復習・確認に効果があると感じている生徒が 8 割を超えていることから、知識の定着への指導の場面では、e ライブラリの小テストへの活用が効果的であることが分かった。

また、プリントではなく、生徒がタブレット上で直接ドリル機能を利用することで復習や確認を行う取り組みでは、4 人で 1 台のタブレットを使用してリレー形式で問題を解いて、次の人に回していき、他の班と問題を解く時間を競い合うという活用方法を実践した。この方法では、全員が参加し、且つ楽しみながら復習することができた。勉強することに意欲を持ってもらうことと、楽しく勉強するという部分では効果的であったと感じる。もし、使用できるタブレットの台数が、学級に 11 台でなく 1 人に 1 台割り当てられる程に増えたならば、このようなリレー形式での利用ではなく、教師側が指定したドリル問題に取り組んで、かかった時間、正答数、間違えた内容や傾向をデータとして蓄積して、プリントでの小テストのように活用することもでき、教師が小テストを作成したり採点する負担もなく、効果的に生徒の知識の定着に活用できるのではないかと考える。

### 3. 今後の課題

授業における e ライブラリの活用については、生徒による発表や話し合いなどの言語活動に効果が見られたが、それは特色ある教育活動として 11 台のタブレットを貸与されている B 中学校ならではの取り組みであり、各教室の提示装置の配備やネット環境、タブレットの整備が必要条件であると感じた。また、話し合い活動の際は、班に 1 台のタブレットを割り当てた事が逆に効果的であった。

そして、授業中に e ライブラリを活用して小テストを行う実践は、生徒も前向きに取り組んでいたことが分かったが、もし、1 人に 1 台タブレットが割り当てることができたならば、ドリル機能を活用して、今より教師の負担を減らしながら、生徒の反復学習や復習・確認の徹底を図れると考える。

現在、タブレットが導入されていない学校においても、テスト前に PC 室を利用して生徒に小テストを作成させたり、集中的にドリル機能を使わせるなど知識の定着に活用することは一定可能であると考えられる。また、教師が e ライブラリのドリル問題を紙に印刷した小テストを作成したり、プリント機能で問題を編集して課題を作成し

たりすることができる。ただ、教師の思ったようにレイアウトを変えたり、問題を改変したりすることに少し手間がかかるので活用する教師が多くない。この活用を簡単にするような操作方法を校内研修等によって、教員間で共有するような取り組みも必要であると感じた。

### (3) 実践事例3 (C中学校)

#### 1. 実践の概要

「e ライブラリ家庭メール機能の活用の促進・拡充とその効果について」  
 ～保護者との連携協力を密にするため、情報の交換・共有化を図る機能の活用～

#### (1) 実践の目的

C中学校では、今年度より e ライブラリ連絡メール機能を活用したメール連絡システムを実施する。このシステムの利用率を上げるための実践や、この機能の有効性や課題をアンケート調査等によって探ることで、家庭との連絡をより一層効率的に行い、家庭との連携協力をさらに密にしていくことを目的とする。

#### (2) 実践の内容

| 実践                                                                                                                                              | 留意点                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1. 全校生徒への、e ライブラリメール機能登録方法の案内配布 (4月)</p> <p>2. 定期的なメール配信</p> <p>3. 家庭訪問や保護者懇談の際に機能の紹介と案内 (7月)</p> <p>4. 学校 HP に案内を掲載することによる登録の呼びかけ (11月)</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>学校の取り組みとして、全校生徒に配布する。</li> <li>保護者が簡単に登録できるように、QR コードを付けるなど、できるだけ分かりやすい案内にする (図 11)。</li> <li>保護者の手に確実に届くよう、揃って来校することの多い行事 (入学式等) に案内を配布する。</li> <li>1 か月あたり平均 10 通程の連絡メールを継続して配信する</li> <li>個人情報につながる内容はメール配信しない</li> <li>登録に必要な学校独自の ID コードは HP には掲載せず生徒経由で渡す。</li> </ul> |



【図 11】

#### 2. 実践の概要

C中学校のメール配信機能保護者登録者数の月別推移を以下に示す。(表 1)

|      | 平成26年度 | 平成27年度 |      |      |      |      |      |      |  |
|------|--------|--------|------|------|------|------|------|------|--|
| 集計月  | 3月末    | 4月末    | 5月末  | 6月末  | 7月末  | 8月末  | 9月末  | 10月末 |  |
| 登録人数 | 0人     | 275人   | 383人 | 392人 | 401人 | 405人 | 408人 | 410人 |  |

※ C中学校の全校生徒数は約550名

【表 1】 メール機能保護者登録数の月別推移(平成 27 年 3 月から 10 月まで)

結果から、4 月の案内配布をした段階で約半数の保護者が登録したことが分かる。そして、5 月の家庭訪問や懇談等での案内の実践によって、10 月には約 75%の保護者に

よる登録を達成したことが分かった。C中学校では4月から5月にかけて修学旅行等の校外活動を実施している。この校外学習での生徒の様子や、校外学習からの帰校時間の連絡を、メール配信機能を用いて行うと案内したことが5月以降の登録の伸びにつながったと考えられる。

そして、メールの配信は、運用を始めた4月から定期的に、1ヵ月あたり平均して10通程度継続して行った(図12)。内容は、個人情報に十分配慮して、学校行事の参加のお願いや、定期テスト等の行事予定のお知らせを配信した。こういったメール配信を学校ホームページの配信や学校通信などと併用して継続して行った。こういったきめ細やかなメール配信は、学校行事への保護者の参加を促すことに結びつき、保護者の学校に対する関心や連携に一定の効果があったと考えられる。また、学校への問い合わせが大きく減ったことも、このメール機能の有用性を示していると考えられる。

### メール送信の 月別推移

|     |     |
|-----|-----|
| 4月  | 13通 |
| 5月  | 25通 |
| 6月  | 4通  |
| 7月  | 11通 |
| 8月  | 9通  |
| 9月  | 14通 |
| 10月 | 10通 |
| 11月 | 6通  |
| 12月 | 2通  |

|        |                                                                                                                                                              |
|--------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メールの種類 | 閲覧確認なし                                                                                                                                                       |
| 送信先    | 学年/グループ(1学年)全138人                                                                                                                                            |
| 送信日時   | 2015/11/09 08:09                                                                                                                                             |
| タイトル   | 本日よりトライやるウィーク                                                                                                                                                |
| 本文     | おはようございます。<br>お子様はもう出発したでしょうか。本日より2年生はトライやる・ウィークです。生徒達は楽しみにしていました。初めての体験できっと慣れて帰宅することでしょう。家でトライやる・ウィークのことを話題にしていいただけると助かります。では、よろしくお願いいたします。生徒達の充実した体験を願います。 |
| 詳細を見る  |                                                                                                                                                              |
| 送信数    | 138人                                                                                                                                                         |

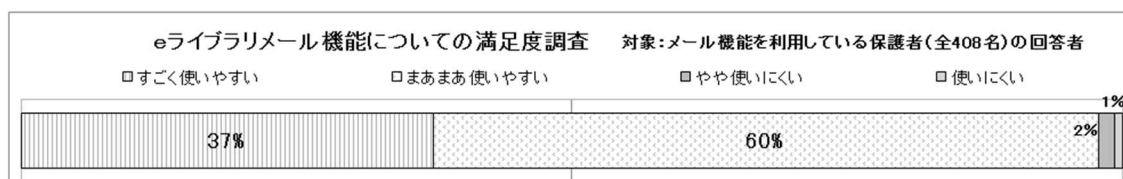
|        |                                                                                                                 |
|--------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メールの種類 | 閲覧確認なし                                                                                                          |
| 送信先    | 全校(全校)全410人                                                                                                     |
| 送信日時   | 2015/11/17 11:49                                                                                                |
| タイトル   | 2学期期末考査が近づいてきました。                                                                                               |
| 本文     | 来週24日から2学期期末考査です。本日で1週間前となりました。特に3年生は進路に関わる重要なテストです。(今まで重要でないテストはありませんでしたが)しっかりと勉強して受けるようご家庭での見守りをよろしくお願いいたします。 |
| 詳細を見る  |                                                                                                                 |
| 送信数    | 410人                                                                                                            |

【図12】送信の月別推移と送信メールの例

また、eライブラリメール機能は以下のような使用が可能である。

- ① 登録した保護者の名前と在籍している生徒との関係性を一覧にして管理できる。
- ② 送信したメールに簡単なアンケートを添付することができる。(メールを受け取った保護者がアンケートに択一選択で回答したり、50文字以内で返答を書ける)
- ③ 回答があったアンケートをエクセル形式で容易に集計ができる。

これらの機能を用いて、このメールシステムを利用している保護者へ満足度調査を実施した(グラフ8)。アンケートは「連絡メール機能の使いやすさ」について4つの選択肢から択一選択で回答してもらい、また、コメントも50字以内で自由に記述して返答してもらった。



【グラフ8】

#### 満足調査返答コメント例

- ・ 子供が手紙の提出を怠るため連絡メールでの情報は助かります。
- ・ 細かい連絡メールありがとうございます
- ・ アクセスして操作するだけなので、特に難しいということはありません。
- ・ 宿泊学習中の連絡は大変有り難かったです。
- ・ 不審者情報などはメールで来ないのでしょうか？
- ・ もう少し連絡のタイミングが早いと嬉しいです。
- ・ 頻繁に送ってこられても困る。
- ・ 誤送はやめてほしい。

満足度調査結果については、回答のあった保護者の内、実に 97%が使いやすいと感じながら利用していることが分かった。また、コメントにあるように、生徒を経由しない保護者への直接の連絡によるため、生徒が保護者に連絡物を手渡し忘れても確実に伝わるという点がとても便利である、と感じている保護者が多いことも分かった。頻繁に送ってこられると困るという意見も見られたが、大多数はきめ細かい連絡メールに感謝している様子が分かった。

また、「誤送はやめてほしい」とあるように、メールは一旦送信すると回収することができないものであるために、送信前に複数の目で何度もチェックする体制が必要であると感じた。

#### 3. 今後の課題

メールの登録者数の割合が約 75%である事は非常に高いことではあるのだが、ここから登録者が増えないのは、家庭でメールを受信する環境を持たないか、もしくはメールによる配信を希望していない保護者が一定数存在することが考えられる。こういった保護者のことも配慮して、メールによる連絡内容は必ず別途プリントや学校通信等で補完して伝える必要がある。ただ、登録率があまりに低いと、登録している少数の保護者にとっても学校側にとっても、手間だけが増えるあまり意味がないものになってしまう。逆に登録率が 100%に近づけば近づくほど、学校から配信した情報を一元管理することができる利便性を持つとともに、学校と保護者の連携協力を密にすることができるという大きなメリットがある。

また、このメール機能を用いて、学校での学習状況や家庭学習の課題の案内等を直接保護者に発信することで、学校と家庭が連携して生徒の家庭学習の促進につながれるような利用方法も考えられる。具体的には、学習支援が必要な生徒に与えた課題の一覧をその保護者にメールで通知し、家庭で課題に取り組めたかどうかを確認して返信してもらう、というような利用方法である。課題は多いだろうが、e ライブラリのメール機能をこういった家庭学習の充実などに活かす手立ても考えていく必要があると思われる。

#### (4) 実践事例 4 (D 中学校)

##### 1. 実践の概要

「e ライブラリ活用の効果的な促進・拡充方法について」

## (1) 実践の目的

昨年度より、学力向上を一つの目的として、学習支援ソフト e ライブラリが導入されている。D中学校においては、教員が自習課題や演習用のプリント教材を準備、作成するために e ライブラリを活用している。しかし、e ライブラリの様々な機能を、教員が効果的に活用しきれているとは言い難い。また、生徒の家庭学習のツールとしての活用も期待されるが、いまだ十分に普及しているとはいえない。よって本研究の目的は、生徒の家庭学習支援ツールとして e ライブラリを普及するための方法を検討することとする。

## (2) 実践の内容

e-ライブラリ活用の促進について（※D中学校 1 年生全員を対象）

| 実践                                                                                             | 留意点                                                                                                                                                                                                                                  |
|------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. e ライブラリの操作方法についての伝達講習<br>2. 操作方法をまとめたプリント、活用に必要な ID カードの配布（図 13）<br>3. e ライブラリ活用アンケートの実施と分析 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・新 1 年生の全生徒を対象に、PC 室で実際に操作させてのきめ細やかな指導を心がける。</li> <li>・教育相談などで、学習方法の一つとしてアドバイスする形で担任から渡すようにする。</li> </ul>  |

【図 13】

## 2. 実践の考察

D中学校では、4月に全校生徒に向けて e ライブラリの操作方法についてまとめたリーフレットを配布して説明をしている。それに加えて、7月に 1 年生全生徒を対象とした、e ライブラリの使い方講座（実習を含んだ講座）を実施した（表 2）。

|                   | 1 年生    | 2 年生     | 3 年生    |
|-------------------|---------|----------|---------|
| eライブラリで取り組んだドリル数  | 2876回   | 670回     | 211回    |
| eライブラリに取り組んだ総学習時間 | 5853分1秒 | 1291分29秒 | 461分52秒 |

【表 2】 D中学校における e ライブラリ家庭学習機能の活用（4月から12月までの合計）

結果から、1 年生が他学年と比べて e ライブラリの使用率が高くなった事が分かった。これは、1 年生に行った使い方講座によって、e ライブラリを活用する際の操作方法の不安を取り除き、より積極的に家庭学習機能に取り組むことができたためと考えられる。他にも考えられる要因として、1 年生が中学入学後すぐに家庭学習の一つのパターンとして、e ライブラリの活用法を知った事が普及につながったのではないかと考えられる。表 2 の結果からは、学年が上がるにつれて e ライブラリを活用した学習が少ない事が分かる。例えば 3 年生になると、家庭学習の方法（塾に通うなど）がすでに確立されてきている事が考えられる。これらのことから、e ライブラリを家庭学習のツールとして普及するためには、リーフレット等の配布だけに留まらず、操作方法について実際にコンピュータを使いながら、きめ細やかに説明する事がより効果的であると言える。

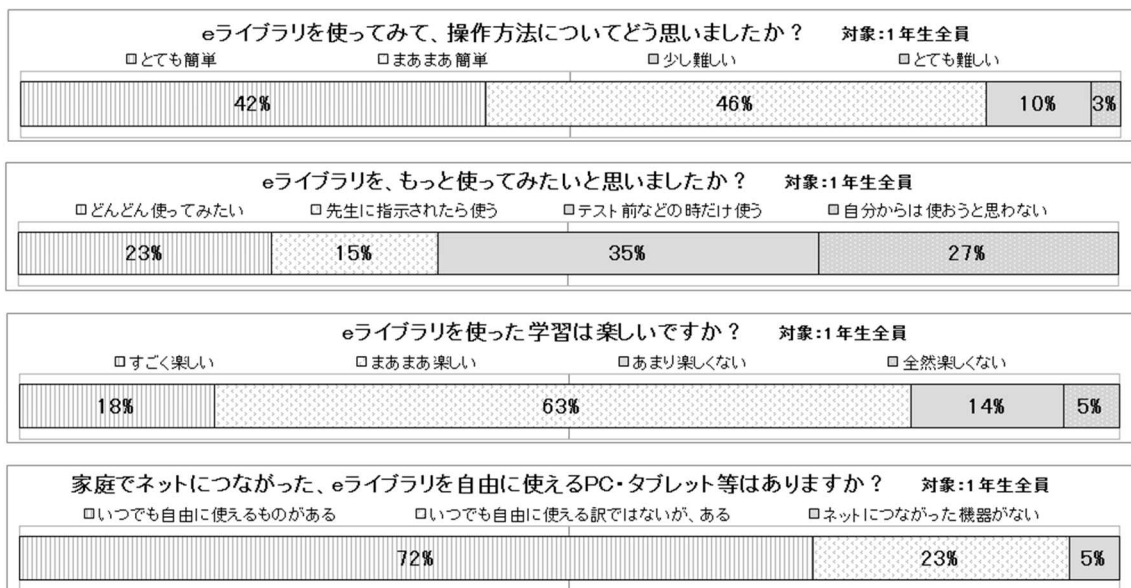
続いて、1年生の「eライブラリを活用した学習」の月別推移を示す（表3）。

|                   | 4月      | 5月     | 6月     | 7月       | 8月       | 9月      | 10月     | 11月     | 12月     |
|-------------------|---------|--------|--------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|
| eライブラリで取り組んだドリル数  | 62回     | 11回    | 57回    | 1358回    | 677回     | 139回    | 236回    | 246回    | 201回    |
| eライブラリに取り組んだ総学習時間 | 202分54秒 | 15分19秒 | 93分57秒 | 2459分14秒 | 1442分55秒 | 282分41秒 | 509分51秒 | 444分10秒 | 466分57秒 |

【表3】 eライブラリで取り組んだドリル数と学習時間の月別推移 対象:1年生全員

D中学校では、4月にeライブラリの操作方法についてまとめたリーフレットを配布して説明を行った。そして、7月の学期末懇談で再び、生徒と保護者に対してeライブラリ活用の周知を徹底する実践を行った。結果から、4月にリーフレット・IDを配布しただけでは活用が進まず、7月にログイン数が一気に増加して活用が促進されたことが分かる。これは、1学期末の教育相談での案内が活用を促したことを表しているものと考えられ、また、夏休み期間中である7月と8月の間に、自主的にeライブラリを活用して学習が行われた事もうかがえる。そして、10月にも再び学習回数が増加していることが結果から分かるが、これは、9月末の教育相談の時にIDカードを再配布して、活用を推奨したことによるものと思われる。以上のことより、教師から案内を発信して自主的な活用を呼びかける事によって、eライブラリへの関心を高め、家庭での学習機会を促進させられることが分かった。

続いて、eライブラリの使用に関するアンケート調査の結果を以下に示す(グラフ9)。



【グラフ9】

操作方法については、90%近くの生徒が「難しくない」と感じていることが分かった。これは操作方法講座の効果も考えられるが、eライブラリのシステムによる部分も大きい。続いて、「もっと使ってみたいか」という問いに対して、「どんどん使ってみたい」と、答えた割合が4分の1程で、残りは「教師側から指示をされたら使う」や、「テスト前などの時だけ使う」などといった限定的な活用を希望する割合が高く、「自分から積極的に使おうとは思わない」という回答をした生徒も4分の1程度見られた。eライブラリの活用を自主性に任せたままだと、継続して活用が進むとは言えないことが分かった。一方、「eライブラリを使った学習を楽しみ」と感じる生徒は8割ほど存在するため、家庭学習の支援ツールとして、eライブラリが普及していく可能性は低く

ないことを感じた。また、「e ライブラリを使用できる環境が家庭にあるかどうか」の調査では、全く使えない家庭環境の生徒の割合が 1 割以下であったことから、教師側の上手な活用方法の指導によって、更に活用が進むのではないかと考える。

### 3. 今後の課題

e ライブラリを家庭学習支援ツールとして、各生徒に定着させるためには、教師からの e ライブラリに関する情報提示が最も大切である。例えば、何度も ID カードを配布したり、伝達講習を実施したり、情報通信を配布することに加え、定期テスト対策のツールとして e ライブラリを活用する案内などの具体的な情報提示が挙げられる。また、既に e ライブラリを家庭学習において活用している生徒は、好意的に学習に取り組んでおり、意欲的な生徒の学習意欲を高めることができている。さらに、e ライブラリを用いた家庭学習は、生徒の ICT 機器の利活用能力を高めるという点においても重要であると考えられる。一方で、グラフ 9 に示すように、各家庭の環境によって、ネット設備や ICT 機器が揃っていないなどの問題点もあることから、e ライブラリの課題を宿題にすることなどは難しさもあることが分かった。

これらを踏まえ、現段階において、e ライブラリは意欲的に学習しようとする生徒に効果的な学習の機会を与えるとともに、さらなる普及活動(教師からの呼びかけ)を継続していくことが大切である。

## 4 研究のまとめ

e ライブラリの活用が、教員の ICT 活用や指導に貢献するという観点から本研究の成果を上げると、次の 3 点である。

- ・ドリル学習機能の活用は、放課後学習での利用に大きな効果が見られた。よく使う生徒であればあるほど、操作方法にも慣れ、活用を楽しんでいると感じて、「より一層取り組みたい」という意欲の向上も見られた。これにより、ICT を活用して生徒の知識の定着や技能の習熟を図れるように指導する事ができた。これを更に家庭学習にまでつなげる事が課題である。
- ・ステープラ機能の活用は、授業中に生徒が作成した提示資料を用いて他の生徒に説明するように指導する場面で有効であった。教科書やノートの絵図を ICT に取り込んで発表資料を作成する活動では、自然とグループで協働する姿勢が見られた。また、この機能を用いて他の生徒へ発表する機会を増やすことは、表現の技能を伸ばすことにつながる事が分かった。今後は、提示装置やタブレットなど、機器整備の充実が課題である。
- ・家庭メール機能の活用は、保護者との連携協力を密にするための情報発信としての役割を果たせることが分かった。この機能を用いたきめ細やかな情報発信は、保護者の信頼を生み、問い合わせの減少といった業務改善の面での利点も見られた。一方、メール機能だけでなく学校ホームページや学校通信、連絡プリントによる補完も欠かせないため、さまざまな情報発信ツールの内の一つであるという認識が必要である。

## 5 おわりに

本研究では、教師からの働きかけによる e ライブラリの普及効果にも着目をした。現段階では、生徒の e ライブラリの利用は自主的な学習での活用に委ねているため、利用率と



いう観点ではまだまだ進んでいないというのが現状である。しかし、教師からの働きかけに加え、生徒間相互作用によって、時間とともにさらに普及が進んでいき、eライブラリに価値が見出されることが分かる。また、eライブラリの機能の一つである入試過去問のデータベースを利用した受験対策学習や、小学校からの苦手な単元を再度復習することができる単元ドリル学習は、不登校生徒を対象として、個人の学力に応じた学習を行えるという点においても、効果を発揮することが期待される。

今後は、希望者だけでなく対象者を指定した放課後学習を行い、授業内容とリンクしたドリル課題を与えるなど、eライブラリを計画的に活用するよう指導して生徒の利用状況を管理し、メール機能によって家庭と連携しながら家庭学習を促していくなどの、今回の研究を更に深めるような取り組みや、どの学校でも実践できるような効果的な学習モデル作成についても考えていきたい。

※eライブラリはラインズ株式会社の登録商標です



## 「校務の情報化推進についての研究」

### ー 校務の情報化を進めるための学校へのアプローチ方法 ー

指導員 児 玉 崇

研究員 遠 山 修 司（下坂部小）松 岡 晋（尼崎北小）

〃 鎌 田 啓 志（長洲小）有 馬 陽 一（水堂小）

〃 藤 田 和 久（清和小）岩 本 紗 知（園田東中）

#### 【内容の要約】

本市の小・中・特別支援学校に校務支援システムが導入され 4 年目になる。システムの導入は、全学校に対し等しく「校務の情報化」の機会を与えたが、それにより等しく「校務の効率化」がなされたわけではなかった。個人間や学校間でシステムの活用度合に差が生じてきている実状が存在するためである。

この差を是正するための方策を鑑みる際の道標の一つとなるステップ表を作成した。そのステップ表に沿って、学校への導入・運用支援を実践した。今回の実践ではシステムの中でも「校内アンケート」及び「日々の様子」という機能について検証を行った。

協力校全 6 校の実践検証を経て、試案した個々のアプローチ方法は有効であるとの結論を得たが、一方で「校務の情報化」をコーディネートできる人材育成と、情報共有に関する教員の意識改革という 2 つの課題が浮き彫りになった。

キーワード： 教育の情報化 校務の情報化 校内研修 校務支援システム  
情報教育担当者 管理者

|               |    |
|---------------|----|
| 1 はじめに        | 35 |
| 2 研究の内容       |    |
| （1）研究のテーマ     | 35 |
| （2）研究テーマの設定理由 | 35 |
| （3）研究経過       | 37 |
| 3 実践事例        | 40 |
| （1）実践事例 1－1   | 40 |
| （2）実践事例 1－2   | 42 |
| （3）実践事例 1－3   | 45 |
| （4）実践事例 1－4   | 47 |
| （5）実践事例 1－5   | 49 |
| （6）実践事例 2     | 50 |
| 4 研究のまとめ      | 52 |
| 5 終わりに        | 53 |



## 1 はじめに

平成22年，文科省が発表した「教育の情報化に関する手引」には、「校務の情報化」が明記されている。「校務の情報化」の目的は，効率的な校務処理とその結果生み出される教育活動の質の改善にある。校務が効率的に遂行できるようになることで，教職員が児童生徒の指導に対してより多くの時間を割くことが可能となる。

本市における「校務の情報化」は，校務支援システムの導入で大きく変容した。今年度は導入から4年目になる。校務支援システムの導入によって，各校において同じシステムを使った校務が可能となった。しかし，各校での「校務の情報化」の推進状況は揃っていない。その状況とは使用状況の活用度合の差であり，大別して2つに分けられる。「個人の差」と「学校の差」である。「個人の差」というのは以前より使用してきた個人のシステムに固執する教員の存在や，校務をコンピュータで処理したことのない教員が，統一された校務支援システムになかなか馴染めずにいることである。「学校の差」というのは，校務支援システムを使っている「校務の情報化」が進んでいる学校とそうでない学校との差が生じてきていることである。

これらを解消するために，これまで教育委員会では，研修を始めとする様々な取組がなされてきた。そのひとつが，本部会の取組である「校務の情報化に関する研修モデルの開発と検証」である。この結果として，各校の情報担当者が自校の課題に応じて研修を開発し，講師役となり研修を持つことで，効果が得られるということが分かった。この成果が意味することは，各校で自主的に研修を行えば講師が誰であれ効果が得られるということであり，各学校で独自に「校務の情報化」を推進することが可能であることを示唆している。

しかし，一方で先に述べたような差が存在するという事実は，自主研修を推進する人材の不足が原因ではないかと考えた。よって今年度は，この問題を補完するための方法を検討したい。検討の方法は研究部員による方法の模索とその試行で，試行方法（以下アプローチという）の評価として教員のアンケートや聞き取りを考察する。

## 2 研究の内容

### (1) 研究のテーマ

校務の情報化推進についての研究

～校務の情報化を進めるための学校へのアプローチ方法～

### (2) 研究テーマの設定理由

#### 1. 校務支援システムの使用状況

次に示す表1は平成26年度末に市内の全小中特別支援学校を対象に実施した校務支援システム使用についての調査結果である。名簿，出欠席，成績，通知表，指導要録という制度上使わなければならない公簿や公簿に準ずる書類については「担当だが利用していない」という回答が全体平均で3.1%である。この結果からシステムをよく利用しているということが分かる。一方で生活・記録（日々の様子，生徒指導，児童生徒の履歴）のように使わなくても校務に支障を来さない機能については「利用している」との回答が全体で38.4%であり，更にスケジュール，TODO管理のようなグループウェアにあっては「利用している」が平均で3.6%という結果である。これらの機能はほとんど使われていないという状況がうかがえる。

また、システムの様々な機能に対し、先生方が担当外と答えていることが見られる。例えば「生活・記録の活用について」は29.5%が担当外と答えている。仕様上は学校全体で取り組む機能であり、実質は全員が担当者である。この結果の中には様々な課題が内在すると考えられる。

平成26年度末アンケート結果（表1）

|             | 項目             | 質問            | 回答    |
|-------------|----------------|---------------|-------|
| 公簿・公簿に準ずる書類 | 名簿の活用について      | 利用している        | 69.9% |
|             |                | 担当外なので利用していない | 25.7% |
|             |                | 担当だが利用していない   | 4.6%  |
|             | 出欠席の活用について     | 利用している        | 76.7% |
|             |                | 担当外なので利用していない | 22.9% |
|             |                | 担当だが利用していない   | 0.3%  |
|             | 成績の活用について      | 利用している        | 73.2% |
|             |                | 担当外なので利用していない | 18.4% |
|             |                | 担当だが利用していない   | 8.2%  |
|             | 通知表の活用について     | 利用している        | 76.2% |
|             |                | 担当外なので利用していない | 21.5% |
|             |                | 担当だが利用していない   | 2.2%  |
|             | 指導要録の活用について    | 利用している        | 79.2% |
|             |                | 担当外なので利用していない | 20.3% |
|             |                | 担当だが利用していない   | 0.4%  |
|             | 生活・記録の活用について   | 利用している        | 38.4% |
|             |                | 担当外なので利用していない | 29.5% |
|             |                | 担当だが利用していない   | 32.2% |
| グループウェア     | 校内アンケートの活用について | 利用している        | 57.9% |
|             |                | 担当外なので利用していない | 35.8% |
|             |                | 担当だが利用していない   | 6.3%  |
|             | スケジュールの活用について  | 利用している        | 4.1%  |
|             |                | 担当外なので利用していない | 70.3% |
|             |                | 担当だが利用していない   | 26.4% |
|             | ToDo管理の活用について  | 利用している        | 3.0%  |
|             |                | 担当外なので利用していない | 66.2% |
|             |                | 担当だが利用していない   | 31.6% |

※回答数値は少数第2位を四捨五入しているため和が100とならない。

このアンケート以外の調査から現在の使用状況として、校務支援システムをよく使いこなそうと取り組んでいる学校の存在がわかっている。これらの学校はそれぞれ独自の発展をしてきており、その経緯は様々である。共通していることは、学校における校務支援システム担当者（以下「管理者」という）が意欲的に取り組んできた結果ではないかと考えられる。また、本研究部員にはそうして取り組んできた者が実在し

ており、それぞれの学校で運用方法を構築し効率よく校務を進めようとしている。<sup>1</sup>

## 2. これまでの成果と課題

本研究部会では過去に、「学校情報セキュリティ研修モデルカリキュラム」をテーマとした研究を行った。この研究では、各校の担当者が講師となって取り組めるような研修モデルの開発に取り組んだ。研修モデルを実際に校内研修で用いたところ、学校情報セキュリティに対する意識の向上に一定の効果があることがわかった。これは外部講師に頼らずとも担当者が講習を行うことで学校独自で自律的に向上できるということを示している。

また、「校務の情報化に関する研修モデルの開発と検証」をテーマとした研究も行っており、1つの研修モデルを15分から30分程度の時間を目安にした内容で、操作演習を実施した。これは担当者が準備しやすいことと研修を受ける側の負担も減らし、更に分かり易さも取り入れようとしたためである。この研究では、演習を取り入れることの有効性と短時間の研修でも効果は十分に得られるということが分かった。

この2つの研究結果を推進させるための補完方法を追及したい。したがって今年度も「校務の情報化推進についての研究」というテーマを引き継ぎつつ、学校へのアプローチ方法について研究することとした。

## (3) 研究経過

### 1. 校務支援システムをよく使っている学校の事例を基にしたステップ表

先に述べたように、校務支援システム導入から4年が経過し、運用についてよく考え取り組んでいる学校が存在する。これらの学校を調査したところ、それぞれに特徴がありシステムの運用方法は異なっていた。システムの全ての機能を使いこなしているわけではないが、それぞれに参考にすべきところが多く見られた。この取組を活かすためにも、学校それぞれの運用実態を把握することは必要である。

聞き取り等による調査の結果、これらの学校は、「使わなくても校務に支障を来さない機能」をうまく活用していたことがわかった。よってこれらの活用実績のある学校の実例を合わせていくことで、多くの機能を利用した理想的な運用方法を見出せるのではないかと考えた。そして、市内全学校がシステムの導入方法を知ってもらうためにも、その道標となるものが必要ではないかと考えた。そして道標作成のため、各機能の導入方法と導入難度・運用難度を検討した。

本市の校務支援システムである「スズキ校務」の仕様から、検討対象とした機能と検討結果は次のとおりである。

#### ・「名簿レイアウト」の活用

様々なレイアウトを作ることが可能で、他校のレイアウトをコピーすることもできる。詳細名簿から紐づくため、管理者の作業と名簿入力 of 全教員の協力が必要。導入は容易と考える。

#### ・「日々の様子」の活用

ひとりの児童生徒について、多くの教員で記録することができる。故に職員全体の協力が必要である。基本操作は容易だが、運用難度は高いと考える。

#### ・「詳細名簿」の活用

項目を増やすことができる。項目は名簿レイアウトと紐づいており、どう運用するのかを考えた上で項目の増減を行わないと管理の煩雑さを招くおそれがある。小中の連携を配慮した項目を作っていく必要がある。

・「校内アンケート」の活用

アンケートは再利用できる。他の学校のアンケートは利用できない。集計機能に優れる。回答方法は容易。アンケートを作る際の手間をどう削減するかで導入難度が変わってくる。

・「特別教室施設予約」「TODO」「スケジュール」の活用

現在の学校でシステム以外の方法を用いて運用されていることを、そのままこの機能に当てはめるにはやや工夫が必要と思われる。

このようにスズキ校務の機能は多岐に渡る。検討結果を踏まえ、作成したのが下図のステップ表である。(表2)

作成する上で特に意識したことは、「管理者」が主たる操作をする機能なのか、もしくは全教員が協力体制をとって操作する機能なのかである。「管理者」がする機能であれば、「管理者」への研修のみでよいし、全教員が知らねばならない機能ならば全教員への研修が必要である。また各機能での導入難度・運用難度が低い機能を「基礎」、高い機能を「発展」と位置付けた。そして、より難度の低い機能から各学校に推進してはどうかと考えた。

ステップ表 (表2)

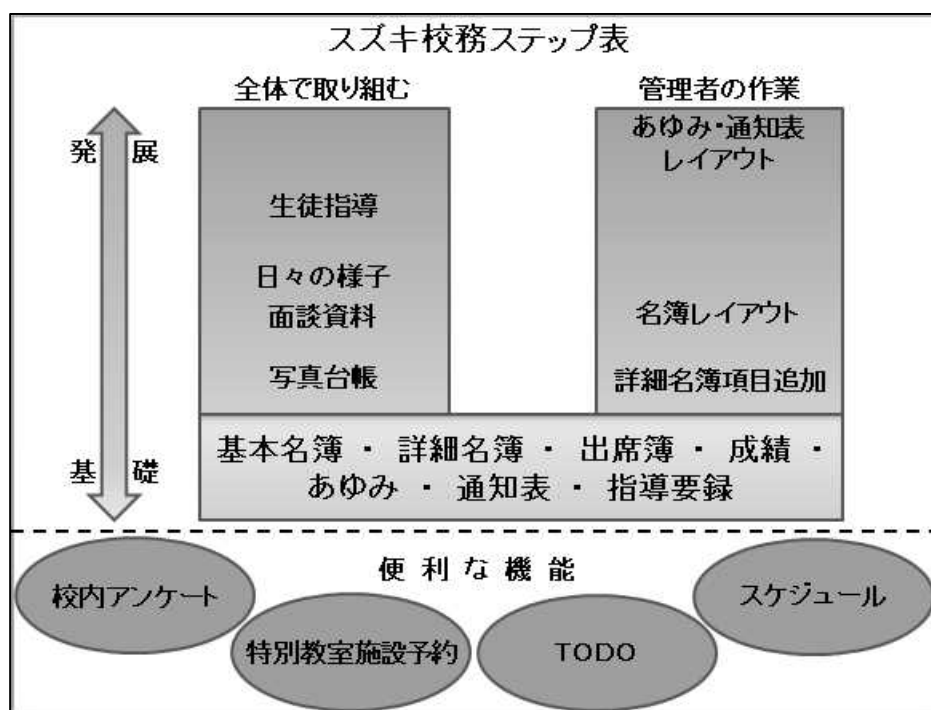


表2における「基礎」は文字通り校務支援システム使用上の基礎になる部分で、公簿の作成も含んでいるため、活用の徹底をしてほしいところである。表の上に行くほど、より難度も高く発展的な使用方法となる。例えば「名簿レイアウト」は、「管理者」が主として作業するだけで活用しやすい機能であり、容易にコピー可能であるため、



「基礎」に近い場所に配置した。また、下部の「便利な機能」というエリアは上部の「基礎⇔発展」とは独立しており、例え「基礎」ができていなくても運用可能であることを示す。このステップ表は仮説にすぎないが本実践を通して錬成することで、今後校務支援システムを活用していく際の指標となると考えられる。

## 2. 「校内アンケート」と「日々の様子」に着目して

表1における「校内アンケートの活用について」という項目を見ると、「利用している」が全体で57.9%と半数を超えた結果となっている。しかし、実際にはこの数値には、考慮せねばならないいくつかの条件が存在する。「校内アンケート」については教育総合センターから各学校に依頼しているアンケートが存在し、毎年度末に全学校で実施している。このアンケートに答えることで「校内アンケート」利用率は100%になるはずである。しかし、利用率で57.9%という数値が出たということは、教育総合センター依頼のスズキ校務でのアンケートを「利用している」と意識していないのではないかと考えられる。よって表1とは別に、各校のアンケート実施状況を知るため、サーバーデータ内の各校の回答済みアンケートの有無を調査した。その結果「校内アンケート」の利用率は全体で11.6%という結果であった。実際は「校内アンケート」の機能はほとんど使われていなかったのである。

「校内アンケート」に着目したのは、スズキ校務の活用度合に関わらず導入できるということもあったが、他に3つの点で「校務の情報化」に大きく寄与すると考えたためである。第1に、一度アンケートを作れば何度でも再利用ができる点で、作る際の手間を削減することができる。第2に、集計機能が充実している点で、全自動の集計機能はグラフ化された結果も印刷でき、アンケート集計者にとって校務の効率化になり得る。第3に、学校内で教職員向けによくアンケートがされており、概ね大きな行事毎に行うため、業務改善の機会が多いのではないかと考えた。

次に「日々の様子」であるが、これまでの実践事例<sup>ii</sup>を基にしながら実践を行うこととした。「日々の様子」を使う利点は、担任以外の教員が児童の見取りを記録でき、その記録を全員で共有できることである。更に記入の操作についても容易と言え、学校内での導入はしやすい。しかし、実際の運用では工夫が必要とされ、活用の差が生じやすい。この機能を活かすためにも、更なる検証が必要と考えた。

よって「校内アンケート」を進める実践と、「日々の様子」を進める実践とに分かれて検証していく。

## 3. 実践の流れと評価方法

学校の校務支援システム使用状況によって取るべきアプローチ方法が異なる。全体研修のみではなく、個人研修や職員朝礼での呼びかけ等、学校の状況に応じてフレキシブルに対応できるようアプローチ方法を検討する。

実践の評価については、次の方法で取り組む。複数の研究協力校において、取組を実施し、研修直後や研修後1ヶ月程度経過時の個々の意識や実態を調査することによって、理解の定着度や行動の違い等について明らかにするとともに、活用効果の実感等について評価する。

### 3 実践事例

事例1は「校内アンケート」機能、事例2は「日々の様子」機能でアプローチした実践事例である。実践事例の概要については下の表に示す。(表3)

実践事例比較表(表3)

| 事例番号 | 想定する対象者 | 伝達時間 | 主な内容                       |
|------|---------|------|----------------------------|
| 1-1  | 全教員     | 15分  | 「アンケート集計担当者」との相談<br>→ 全員研修 |
| 1-2  | 全教員     | 15分  | 研修用資料作成 → 全員研修             |
| 1-3  | 全教員     | 15分  | 研修用資料作成 → 全員研修             |
| 1-4  | 担当者     | 10分  | 「アンケート集計担当者」への研修           |
| 1-5  | 担当者     | 10分  | 「アンケート集計担当者」への研修           |
| 2    | 全教員     | 5分   | 職員会議での周知 → 個別対応            |

#### (1) 実践事例1-1

##### 1. 実践テーマ

「スズキ校務の校内アンケート機能を使って、校務の情報化を推進する」

##### 2. 現状と目的

本校では現在、他校と同じようにスズキ校務による校務の情報化を行っている。主に使っている機能は、「名簿、出欠席、成績、通知表、指導要録」や「写真台帳」などである。一方で、その他の機能についてはあまり積極的に活用されておらず、あくまで通知表作成などに必要な最低限の機能だけを使っているような現状である。特に、「校内アンケート」の機能については全く活用されておらず、体育大会や避難訓練など、ほぼ全てのアンケートや反省が手書きで行われており、集計し表計算ソフト等に入力して印刷するという手間と時間が生じている。しかし、この機能については関心を持っている教員も多く、実際に「校内アンケートは担任・専科関係なく、みんなが使える上に、集計の面でも役立つので、ぜひ広めてほしい」という声もあった。また、以前に研修の話も出たが、そのときは日程が合わず、実施できないままであった。つまり本校には、アンケート機能を使ってみたいが、使い方がわからないので、結局手書きのままで行っているという教員が多くいる。

これらの現状を受け、本校ではまず校内アンケート機能を活用すべきだと考えた。このアンケート機能を活用することで、回答から集計までの流れが効率よくできるようになり、業務の改善が行われるのではないかと考えられる。

##### 3. 実践内容

研修を実施するにあたりアンケートを実施する対象や時期について、管理職や教務主任と打ち合わせをした。そこで、全教員が関係する行事ということで、図工展とマラソン大会後の職員アンケートを対象に、研修を行うことに決めた。アンケートを作成する担当者へは、集計・印刷が簡略化される、一度作成したアンケートやデータは次年度も引き続き利用できるなどのメリットを説明し、協力を依頼した。その後、作成の研修を実施し、アンケートを作成した。次に全教員へ向けて、アンケートの回答の方法について研修を行った。今回はすぐに実践しやすいように、回答手順を説明す

る資料と一緒に、実際に研修用のアンケートに回答してもらいながら使い方を確認するという形で、研修を実施した。

【アンケート回答者への研修の展開】

| 活 動                                | 留 意 点                                                                               |
|------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 校内アンケート機能を使う目的について説明する。         | ・校内アンケート機能を使うことによって、回答や集計、印刷する作業が簡略化され、短時間でできるようになるなどのメリットを説明する。                    |
| 2. アンケートの回答方法を知る。                  | ・回答の手順をまとめた資料を使い、簡単に流れを説明する。                                                        |
| 3. 実際にアンケートに回答し、注意事項や回答の手順を理解する。   | ・研修用に作ったアンケートに回答して、実際にアンケート機能を使用してもらう。<br>・資料と合わせて、順に回答していくことで、回答の流れや注意点を確認する。      |
| 4. まとめ                             | ・再度、回答や集計にかかる時間が短縮されるメリットを押さえ、積極的に活用してもらうよう伝える。<br>・操作方法でわからない点があれば、随時対応していくことを伝える。 |
| 5. アンケートを作成した担当者に、個別に集計・印刷方法を説明する。 | ・再度結果を打ち直す必要がなく、集計から印刷まで簡単な操作でできることを押さえる。                                           |

4. 実践の評価

まず、研修を行った時期について評価する。11月～12月と、行事が続く時期に合わせて研修を実施したことで、全教員がスズキ校務でアンケートを行う良いきっかけとなった。研修の時期と行事のアンケートを行う時期が近かったため、研修内容をただちに実践することができた。

次に、研修の内容について評価する。資料を見て説明を聞きながら、各教員が実際にスズキ校務でアンケートに答えていく体験型の研修は、とても有効であった。回答の手順だけでなく、「途中保存」や「回答修正」などの機能も、実際に使ってみて利便性を体感することができた。研修後に行事のアンケートを行ったときも、教員から質問や不明な点が出ることもなく、スムーズに回答が行われた。このように、今回の研修内容は各教員にとって理解しやすいものであったと感じている。

5. 実践の効果と考察

本研修の実施1ヶ月後に、各教員にアンケートをとった。その結果、「スズキ校務のアンケート機能を使って、メリットを感じた」教員は、全体の75%に及んだ。また、「回答にかかる時間が短くなった」と感じている教員は、全体の66.6%に上り、「今後、スズキ校務の校内アンケート機能を使いたい」教員も、全体の83.3%に上った。他にも、回答者の意見として以下のようなものもあった。

### 【回答者の意見】

- ・回答が楽に素早くできた。
- ・手書きよりパソコンで打ち込む方が楽だった。
- ・時間短縮になった。
- ・スズキ校務を使う機会が多いので、アンケートに気付きやすく、入力が楽だった。

次に、集計する側の意見としては、以下のようなものがあった。

### 【集計者の意見】

- ・紙面ではパソコンで打ち直さないといけないため、大変だったのが改善された。
- ・記述したデータがそのまま運用できる。
- ・集計がすごく楽になった。
- ・文字を打つ手間も時間も省けた。

これらの結果から、今回の実践により本校の教員は、「校内アンケート」機能の利便性を実感することができた。さらに、今後は行事の反省だけでなく、学校評価などもこのアンケート機能で実施してみたいという意見もあった。このように、スズキ校務を使って校務の情報化を推進するといった面でも、一定の成果を得られた。

一方で、以下のような意見や要望もあった。

- ・紙面なら、まだ回答を提出していないとすぐに気付くことができるけれど、パソコンを毎日開くことはないので、アンケートに気付きにくかった。
- ・自由記述だと、成果と課題が混同して集計されてしまう。従来のように、成果と課題に分けて集計したい。
- ・回答方法だけでなく、アンケート作成や集計の仕方についても教えてもらいたかった。

アンケート回答者の状況については、一覧で確認ができるためアンケート担当者から声をかけ勧めることができる。そして、アンケート内容については、アンケート作成時の検討である。ここでアンケート作成について関心を持たれたことについては研修を、教員全体に行う必要があると考えられる。

前述したように、「今後もアンケート機能を活用していきたい」や「作成や集計方法も教えてもらいたい」など、前向きな意見も多数あった。他にも、「スズキ校務で授業時数の報告や、家庭訪問の日程調整などもできたら便利」という意見も出てきた。このように、今回の実践を通して、校内にスズキ校務を積極的に使っていこうという意識が徐々に芽生えてきたことは確かである。今後は、アンケート機能はもちろん、「日々の様子」や「生徒指導」、「名簿レイアウト」など他の機能も、進んで紹介していきたい。そのためには、今回のように研修を行う時期や対象、どんな研修内容にするかを考慮して、校内に広めていく必要がある。そして、出てきた課題を改善しながら、定着に向け、校務の情報化をより一層推進していきたい。

## (2) 実践事例 1－2

### 1. 実践テーマ

「校務の情報化研修」～スズキ校務「校内アンケート機能」の使い方～

### 2. 現状と目的

本校では、これまで「スズキ校務」による「名簿、出欠席、成績、通知表、指導要

録」に積極的に取り組み、校務の効率化を図っている。また、職員会議の資料を校務用ネットワークの共有サーバーから読み込み、それぞれのパソコンで見ながら会議をするといった校務のペーパーレス化にも積極的に取り組んでいる。

今回、教職員用のアンケートをスズキ校務の「校内アンケート」機能で作成し、更なる校務の効率化を図りたいと考え、その使用方法についての研修をした。これまで、各担当が紙媒体でアンケートを作成・配布し、Excelなどのソフトで集計し、その結果を印刷・配布するという手間がかかる作業であったが、スズキ校務の「校内アンケート」機能を利用すれば、一連の作業手順が一つのソフトでできるため、校務の効率化につながると考えたのである。

### 3. 実践内容

まず「校内アンケート」機能の使い方の研修をする前に、9月から12月の期間における行事の担当を確認し、それら各担当に「校内アンケート」機能を使う利点を説明した。その利点とは、アンケートを作成する際に一連の作業を一つのソフトでできること、次年度に使用したアンケートを再度利用できることである。

研修では、研修内容をスクリーンに提示し、その内容を印刷した資料を提示しながら、以下に示すような手順で「校内アンケート」機能について説明した。尚、提示資料は手順通りに進めていけば、「校内アンケート」機能を使うことができるように作成した。

#### 【研修の展開】

| 活 動                              | 留 意 点                                                                  |
|----------------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| 1. 課題について確認する。                   | ・「校内アンケート」機能のメリットについて説明する。                                             |
| 2. 実際に「校内アンケート」機能を使ってアンケートを作成する。 | ・実際に打ち込む様子をスクリーンに投影したうえで、パソコンに不慣れな教員にも理解しやすいように、実際にパソコンに触れさせながら解説を進める。 |
| 3. まとめ                           | ・「校内アンケート」機能を活用することで、アンケートの集計が効率よく作成できることを押さえる。                        |

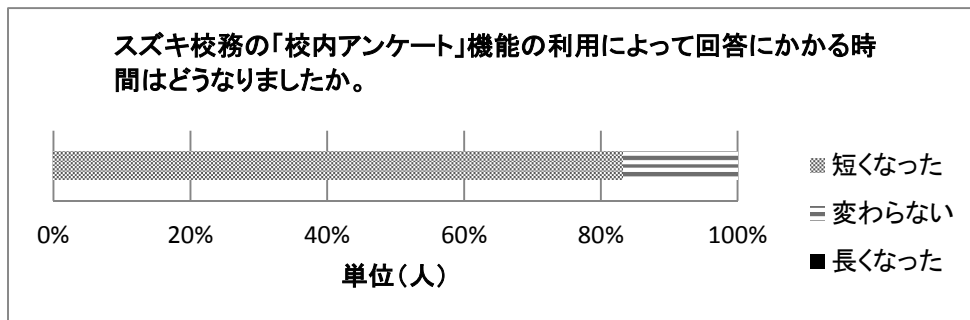
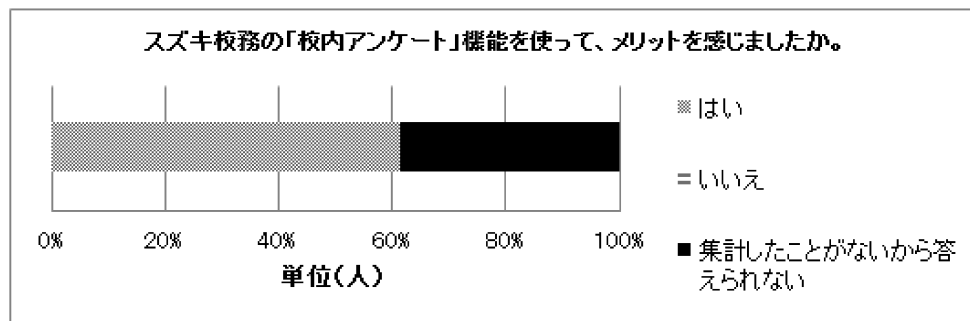
### 4. 実践の評価

研究対象とした9月から12月の行事日程を確認したことで、計画的に各教員にアンケート機能を使用してもらうことができ、導入から定着までを円滑に進めることができた。

研修については、プロジェクターで大きく「スズキ校務」の操作画面を提示して、教員には各机上パソコンで実践してもらいながら説明したことも有効であった。運用面に関しては、計画的に各担当に呼びかけてアンケートを作成してもらい、各教員の回答、集計とスムーズにすることができた。また、後述するように、より効果的なアンケートの内容を考える等、アンケート機能の便利さを感じながら使うようになった。

### 5. 実践の効果と考察

本研修の実施1か月後に、各教員からとったアンケート結果を以下に示す。



さらに使用してみて感じたメリットの具体的内容を問う設問に対しては、次のような回答があった。

【研修1か月後アンケート】

- ・回答を入力するだけなので楽で早い。
- ・回答の集計を自動的にしてくれるので、作業の手間が省け、とても便利になった。
- ・自由記述したコメントが一度に集約されるため、こちらが一つずつまとめなくてもよいので、業務改善につながる。
- ・グラフとして表されるため、割合が一目で分かる。
- ・どなたが未回答かすぐに分かるのが良いと思います。

以上のように、スズキ校務の「校内アンケート」機能を使用することで、校務の効率化を図ることについての十分な効果が得られたと言える。

一方で、課題としては次のようなものが挙げられる。

【運用面について】

- ・アンケートを回答してもらう際に、こまめに呼びかける必要がある。
- ・アンケート作成の際、分からない所は画面右上のヘルプを見る、今回配布した資料を見る、スズキ校務管理者に聞くなどの方法を各教員に随時知らせ、できる限り作成に対するハードルを低くする必要がある。
- ・他校のアンケートを参考にすると時間短縮になる。

【アンケートの内容について】

- ・アンケートの項目は各行事・研修の提案のもので良いが、設問については効果的な文言を考える必要がある。
- ・記録として残す場合は、自由記述が適当である。その際、成果を問う設問と課題を問う設問を分ける必要がある。

以上のような課題を改善しながら、より校務の効率化が進むよう運用していきたいと考える。

### (3) 実践事例 1－3

#### 1. 実践テーマ

「スムーズな校務の情報化」 ～「校内アンケート」を使って～

#### 2. 現状と目的

本校では現在「名簿、出欠席、成績、通知表、指導要録」の作成を、スズキ校務を使って行っている。他校ではスズキ校務の他の機能を使っており、本校に導入すると校務にかかる手間や時間を大幅に減らすことができる機能がある。しかし本校では、それらの有効な機能を新たに導入して校務の情報化を進めようという取り組みは、あまり行われていない。

今回の実践を始めるにあたり、校内で聞き取り調査を行い、校務の情報化のニーズを探った。調査の結果、情報化できるとよい校務として、クラブ・委員会名簿や学級編成票の作成、職員会議の資料配布、空き教室の予約、校内アンケート、学校評価が挙げられた。

これらの中から、最も情報化による効果が高いであろう校内アンケートに狙いを絞って実践を進めた。行事の事後反省のために校内アンケートを行うことが年間に数回ある。これまで校内アンケートは回答用紙に手書きする方法で行われていたため、スズキ校務の「校内アンケート」機能を使って回答作業を行うことで、作業時間の短縮が見込まれた。さらに、回答を集計する場合は用紙に書かれた内容をパソコンに入力し直す必要があった。「校内アンケート」機能では、自動的に回答が集計されるため、入力し直しにかかる膨大な時間や手間を削減できると考えられる。また、「校内アンケート」機能を使った回答作業は比較的簡単であり、教員全員への研修が短時間で済むことも、選んだ理由の一つである。このような実践を行うことで、スムーズかつ確実に校務の情報化を進めることができると考えた。

#### 3. 実践内容

本実践では、本稿研究部員が「校内アンケート」を導入するための諸々の準備を主導的に進めた。これにより、他の職員の負担が軽くなり、導入までのハードルが下がることで、「校内アンケート」の推進が容易になることを目指した。

まず、研修を行う前に校内アンケートの集計を行う予定の職員に、試験的に校務支援システムを用いてアンケートができないか相談した。このために必要なアンケート作成の作業は、研究部員が行うこととした。「校内アンケート」のメリットも相まって、これらの教員から協力を得ることができた。

#### 【アンケート回答者への研修の展開】

準備物：大型モニター、パソコン（各人1台ずつ）

| 活 動                         | 留 意 点                                                                    |
|-----------------------------|--------------------------------------------------------------------------|
| 1. 「校内アンケート」機能を活用する目的を確認する。 | ・「校内アンケート」機能を活用するメリットとして、作業にかかる手間や時間が減ることを挙げる。特に、集計する場合にメリットが大きいことを強調する。 |

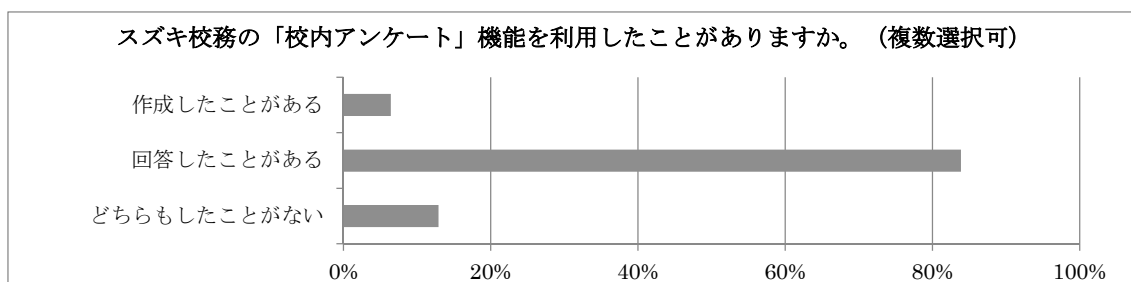
|                     |                                                                                                             |
|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2. 回答方法を確認する。       |                                                                                                             |
| (1) 回答方法を知る。        | ・パソコンの画面を大型モニターに提示し、回答方法を実演しながら説明する。                                                                        |
| (2) 実際に回答を入力して練習する。 | ・練習用のアンケートを事前に作成しておく。<br>・講師に質問するだけでなく、周囲で教え合わせることで、効率を高める。                                                 |
| 3. 回答の集計方法を知る。      | ・自動で回答が集計されるため、手書きの回答を文書ファイルに入力し直す必要がなくなることを示す。<br>・そのまま集計結果を印刷できる他、集計結果を CSV 出力し、従来同様に文書ファイルにして印刷できることを示す。 |
| 4. アンケートの作成方法を知る。   | ・従来同様に自由記述のアンケートを作成できることを示す。<br>・必要があれば、講師が代わりにアンケートを作成することを伝える。                                            |

研修は、職員の負担を軽くするために15分間で行った。短時間で操作に慣れてもらうために、実演や実習を中心にした。パソコン操作技能の個人差が大きいため、回答の練習を早く終えた人が教える側に回ると、時間の無駄がなく、かつ研修内容も伝わりやすかった。アンケートの回答方法を従来通りの自由記述にできることや、集計結果をコピーして従来通り文書ファイルにできることを示すことで、情報化に対する不安感を軽減させた。また、必要があれば「スズキ校務」でのアンケートの作成を研究部員が代行に行うこととし、導入しようとする職員にかかる負担をできる限り減らした。

#### 4. 実践の評価

校内の職員を対象に、スズキ校務に関するアンケートを行い、36名中31名から回答を得た。また、研修後にアンケート集計担当者を対象にインタビューを行った。

アンケートの結果、「校内アンケート」機能でアンケートを作成したことがあると答えた職員は少なく、これまで十分使われていなかったことが裏付けられた。(図1)



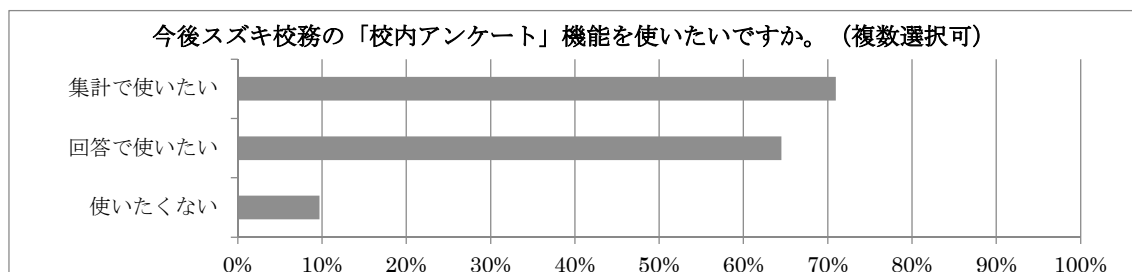
【図1】

しかし、本実践や実践後の調査で「校内アンケート」機能を使った結果、「手書きよりも楽」「集計が楽」「時間短縮になる」といったメリットを多くの職員が感じていることが分かった。

また、多くの職員が、今後スズキ校務の「校内アンケート」機能を使いたいと回答



した。(図2)特に、集計で使いたいと答えた職員が多かった。「校内アンケート」機能は、回答よりも集計で使う方がより多くの作業を必要とする。集計で使いたいという職員が多いのは、本実践によって「校内アンケート」機能を使うメリットを職員に十分伝えられたことを示している。ただし、「校内アンケート」機能を使いたくないと回答した職員も若干存在し、課題を残している。



【図2】

校内アンケートの集計を行った教員に対するインタビューでは、全員が今後「校内アンケート」機能を使ってアンケートを作成していきたいと回答した。今回は、筆者が代わりにアンケートを作成したが、本実践を通して、自分で作成してもよいと思うほどのメリットを実感してもらえたと考えられる。

#### 5. 実践の効果と考察

本校は、スズキ校務の発展的活用があまり進んでいなかった。「校内アンケート」機能を使ってみると大きなメリットを感じたにもかかわらず、これまで使われてこなかった原因は、校務の情報化を推進する職員の不足によるところが大きい。また、そのような職員がいても、他の職員にとって情報化が大きな負担となる場合は、一時的な導入に留まるのではないだろうか。

本実践では、比較的スズキ校務の使用に慣れた職員が諸々の作業を引き受け、研修や操作等における職員の負担をできる限り減らしたことで、スムーズに校務の情報化を進めることができた。この結果、「校内アンケート」を利用しようとする機運が職員間に高まり、自主的に利用しようとする教職員の出現が見られた。また、学校評価についても「校内アンケート」を使う運びとなった。

しかしながら、課題も残っている。実践後のアンケートでは、「校内アンケート」機能を使うことで回答にかかる時間が長くなったという職員や、今後は「校内アンケート」機能を使いたくないという職員が若干が見られた。これらの課題に対応し、今後もさらにスムーズな校務の情報化の方法を探っていきたい。

#### (4) 実践事例1-4

##### 1. 実践テーマ

「スズキ校務 アンケート機能を活用して業務改善」

##### 2. 現状と目的

本校では、スズキ校務導入以後、校内において職員研修を実施している。その効果もあり、普段から職員のスズキ校務の活用はあまり抵抗なく行われているという現状がある。しかし、利用されている機能を具体的に分析すると、「名簿、出欠席、成績、通知表、指導要録」など「基礎」の機能に限定されるということが課題として残って

いた。普段のスズキ校務を用いた業務に加えて、もう一步活用を進めるために、本校では年に数回の利用に留まっている「アンケート機能」に目を向けていきたいと考えた。

### 3. 実践内容

そもそもこのアンケート機能の活用というものには、「アンケートを作成する側」と「アンケートに回答する側」という2つの視点があることに留意しなければならない。『どのようなアンケートを作成すればよいか?』という作成者側の困難さと、『アンケートにはどのように回答すればいいの?』という回答者側の困難さには目的の違いによるズレが生じるため、同時に操作研修を行ったり、デモアンケートを作成する研修を行ったりすることはあまり研修効果を実感できにくいのではないかと考えた。そこで今回は次の2通りの研修を行った。

#### (1) アンケート集計をする職員

「アンケートを作成する立場（分掌）にある職員」または、「現在、紙ベースでアンケートを作成している（特に体育大会や特活行事などの担当者）、もしくは作成したものを集計する立場にある職員」を対象に、個別にスズキ校務のアンケート機能を用いたアンケートの作成方法とその利点を研修した。そして実際にスズキ校務で作成したアンケートを利用して、以前とどんなことが変わったかということヒアリングするという形をとった。

#### (2) アンケート回答をする職員

回答者側に対しては、前述で作成されたアンケートにどのように回答したらよいのかということを記した手順表を全職員に配布し、それを見ながら期限内に各アンケートに回答してもらった。その上で感じた回答の仕方の難しい点・問題点などを吸い上げた。

### 4. 実践の評価

本校では、以前より年度末の学校評価等でスズキ校務のアンケート機能を利用するなど、操作方法の研修は何度か行っている。その効果もあり、職員の大体は回答手順など理解している。しかし、それはあくまで「回答者側」としての活用であり、アンケートの「作成者側」という立場になった場合にどのように活用していくかということとはほとんど知られていない。今年度の研究を進めるにあたり、特に「アンケートを作成する立場にある職員」に重点を置き、個別に作成方法を研修していくという方法をとった。個別研修を行ったことで、実際のアンケート内容（文言）や選択式・自由記述式の使い分けを理解する等、具体的で詳細な研修ができた。

### 5. 実践の効果と考察

【研修直後】、並びに【研修 1 ヶ月後】のアンケートやヒアリングから、効果（○）と課題（●）について具体的には次のような回答があった。

〈回答者側〉

○文字で書かずに選択肢を選ぶだけなので早く、楽になった。

○担当者に提出する（提出し忘れる）などの手間が減り、作業にかかる時間も短くなった。

●個別教員を対象にされたアンケートの場合、学年でまとめた意見を回答すること

ができない。(話し合いには参加しているが、未回答のままになる者がいる。)

- 校務系のネットワークでのみ回答が可能のため、「読書アンケート」のような児童向けアンケートでは、やはり一度紙ベースでアンケートをとる必要がある。教室でアンケート回答ができればその手間が省け、運用の幅が広がるのではないかな。

〈作成者側〉

- 回答の集計やグラフ化が自動で行われるため、作業の手間が省ける。
- 回答状況が確認できる。
- 前年度までに作成したアンケートを、テンプレートとして再利用できる。
- 学年ごとに集計が必要な場合、アンケートそのものを複数作る必要がある。
- アンケートを作成する立場にない場合は、今回の研修は必要性を感じにくい。作成方法が分かっても、アンケートを新規に作成することが年に何回あるか。

以上の効果と課題を考察すると、「アンケートの回答者と作成者」にはいずれもメリットを感じる部分があり、どれも校務の情報化や業務改善につながるものではないかと見て取れる。しかし一方で、課題として個人を特定したアンケートが取れないことが挙げられた。また、実際に作成してみないとわからないような問題点などもあり、研修等を行い、活用の幅を広げることを推進していきたいと考える。

## (5) 実践事例 1－5

### 1. 実践テーマ

「スズキ校務アンケート機能の普及」

### 2. 現状と目的

本校では「名簿、出欠席、成績、通知表、指導要録」に関してスズキ校務の活用がはかられており、ほとんどの教員がレベルの差はあるものの入力是可以。一方、アンケート機能や日々の記録、名簿の作成など、スズキ校務を使用しなくても日々の業務が他の手段でまかなえるものはほとんど活用されていない。スズキ校務の更なる活用を目指し、普及を目指すにあたって、使用していない機能の中で、一番活用する場面が多く浸透しやすいと考えられるのが「アンケート機能」である。集計に時間のかかるアンケートをスズキ校務で処理することで、さらなる活用をうながすことを目的とする。

### 3. 実践内容

現在の本校におけるアンケートの実施状況について、回答は全ての教員ができる。しかし、作成については使った教員が少ない。パソコンのスキルが未熟なためできないというよりも使うチャンスがない、そもそもアンケートの作成ができるということを知らないからではないかと考えられる。また、一度作ったものを違う機会に使い回せることや、集計が簡単にできること、誰が回答したかわかる機能があることなど、メリットがまだ浸透しておらず伝える必要があると考えた。しかし、アンケート機能を使用するのは限られた特定の教員であり、全員に研修の機会を設けるのではなく、こちらから直接アンケート担当者に声をかけて、作成の仕方・集計の仕方を伝え利用してもらうことにした。

### 4. 実践の評価

回答については、パソコンを普段使用しない者にとっては手間がかかるという意見

も聞かれたが、操作自体はわかりやすく、スズキ校務を開くとわかりやすいところにアイコンも出ているので、操作自体への戸惑いの声は聞かれなかった。

作成側にとっては、回答したかどうかの確認ができるので未回答の人への声掛けがしやすいという意見がある一方で、誰がどの意見を書いたのかわからないため、匿名のアンケートでは問題ないが、記名のアンケートはとることができないという問題点もあった。また、グラフについては自動的に円グラフになっており、文章も今まで紙ベースに記入してもらったものを再度入力していたがその必要もなく集計が簡単にできることが好評であった。

## 5. 実践の効果と考察

### (1) 効果について

研修対象を担当者に限定したことで、アンケートをとる立場にいる教員は限られた人数であり、全体に伝えるよりも、個別に伝達してその場ですぐ利用してもらうことで便利さを実感してもらい、使い方を身につけることができたと感じている。

### (2) 今後のための考察

学校職員全員がスズキ校務を使えるようになるのがもちろん目標である。そのための方法として、昨年度は学校全体の研修を設けた。しかし、充分浸透したとは言い切れない。特に年度を越えると転勤してきた教員と本校で研修を受けた教員との間にスキルの差が見られることもある。今後は、学校全体のスズキ校務の利用を推進するためにも、「困った時にこの人に聞ける」という中核となる人材の育成が必要であると考えられる。そのためにも、スズキ校務の利用に積極的な人に個別にスキルを伝えることに意義があるのではないかと考え、今後はアンケート機能を使えるようになった教員が他の人にそのスキルを伝えることができると期待がもてる。また、個別で伝えるメリットは同じ画面をみながら操作を確認できるのでコンピュータの操作に慣れていない人にも伝えるのが容易である。一斉に行う研修と比べると普及するまでに時間がかかるかも知れないが、今後もアンケート機能以外の機能も含めて、個別に広めることと、全体での研修とを併用しながらスズキ校務の利用を推進していきたい。

## (6) 実践事例2

### 1. 実践テーマ

「日々の様子」の活用による、指導の充実と成績処理の効率化

### 2. 現状と目的

本校では、出「名簿、出欠席、成績、通知表、指導要録」については、スズキ校務を使って行うことができている。しかし、必要な処理以外については、スズキ校務の活用は見られない。最低限使うことが出来れば良いという機能は、ほとんどの職員が操作出来るが、スズキ校務にある、これを使えばより児童への指導や、日々の作業の効率化につながるというものについてあまり使われていないのが現状である。

そこで今回本校において、スズキ校務の機能「日々の様子」を周知し、活用することで、様々な児童の様子をあゆみの所見に反映させるとともに、あゆみの所見を入力する作業の効率化を図ることを目指した。

### 3. 実践内容

あゆみや指導要録の所見欄には、学習の成績だけでなく、児童の学校生活における

様々な頑張りや成果、また、その児童の良さが書かれる。日頃の児童の様子を細やかに記録し、その記録をもとに所見を記入する方法が多いが、記録が少なく、記入する際に記憶を辿ることになってしまったり、担任一人の視点によるため、偏りがあったり見える範囲に限界があったりした。そこで、スズキ校務の「日々の様子」機能を活用することに、それらの課題の解決を図ろうと考えた。

「日々の様子」機能を職員に広め、活用してもらうために「日々の様子」機能のメリットと入力方法を説明した。

職員への周知は、運営委員会や職員会で行い、随時個別に操作方法を伝えた。

**【職員に伝えた日々の様子活用のメリット】**

○児童に関わる多くの教師の視点から、児童の様子を記録・共有できる。

    それを今後の指導に活かせる。

    あゆみや要録に活かせる。

    個人懇談会の資料として活かせる。

○作品展などに出品したり、賞を受賞したりした記録を校務分掌の各担当者が残しておくことで、あゆみや要録への記入漏れを防いだり、作品展などの名称に違いが生じることを防いだりすることができる。

1 1月末の個人懇談会、1 2月のあゆみ作成の時に入力されたことが活かせるよう、9月に職員への周知を行い、励行するようにした。

#### 4. 実践の評価

操作方法が複雑なものではないことから、職員会や運営委員会といった場では、担任だけでなくどの教師でも入力できることや、校務分掌の各担当者が表彰などは入力しておくという約束事を伝え、操作方法については随時個別に伝えてまわった。

今回の取り組みの結果、「日々の様子」への入力数は増えた。作品展への出品や賞の受賞記録は各担当者に入力するよう伝えたことで、このことについてはきちんと入力されていて、あゆみの作成に活用できた。担任からは、「便利だと思った。」という感想も聞くことができ、校務分掌の各担当者からは、「確認でいちいち聞かれる煩わしさがなかった」という意見も聞くことができた。しかし、学校生活全般に関わる児童の様子についての記入は少なかった。委員会での活動の様子、朝のあいさつ当番での様子、たてわりのなかよし学級での様子についての記入があったが、記入している教師は限られていた。しかし、担任の教師からは、「記録しといてもらったらありがたかった」という感想が聞けた。

今後、機能を活用していこうと思うかという質問には、92%が活用しようと思うという答えだった。そう思う理由としては、「一人では見きれない所も記録してもらえる」や「資料として使える」という意見があった。

機能を利用していない理由としては、「時間的に余裕がない」という意見が1番多く35%であった。「口頭で情報共有する方がよい。」という意見もあった。次に多かったのは「利用方法がわからない。」で21%であった。

#### 5. 実践の効果と考察

今回、機能を知り活用することで、機能の良さを実感している先生が出てきていることに成果が見られた。パソコン操作、スズキ校務を操作することへの抵抗が少ない

教師は、どのような機能が試しに見てみようと、積極的に入力している傾向が見られた。活用していない教師には、パソコン操作に抵抗がある教師もいる。操作方法についてはより積極的に伝えていくことと、入力してもらう文言の例なども紹介して、どのようなことをどのように入力していくのかを知っておいてもらうことが必要である。教師の意識の中に、口頭での共有以外に記録として残し共有することの価値を高めることが課題であり、いかに活用の必要性を教師に持たせるかが今後の課題である。

## 4 研究のまとめ

### (1) 「校内アンケート」の有効性とステップ表との整合性

実践事例の結果から「校内アンケート」の導入によって、業務改善が進むと言える。また、扱いが簡単であり即効性が高いとも考えられる。

さて、「校内アンケート」はステップ表の「便利な機能」カテゴリにあたり、「基礎⇄発展」とは関係なく推進できるというのが仮説であった。実践事例における協力校は、それぞれにステップ表での「基礎⇄発展」でどの段階にあるのかが異なっていたが、「校内アンケート」導入の効果についての大きな違いはなかった。これらのことから「校内アンケート」については、学校における校務支援システムの使用状態に関わらず導入が容易であることが実証できたと言える。また、「校内アンケート」機能が個別研修の実施で、非常に有効であることも同時に実証された。「基礎⇄発展」という学校の活用状況に関わらず、「校内アンケート」については導入しやすく、協力校と同様の結果が得られると考えられる。

更に、「校内アンケート」を推進したことにより他の面でも効果があった。「基礎」段階に近い学校においては、システムに対する全体の意識を高めることと教員それぞれのスキルアップへのきっかけとなり、「発展」を目指す学校にあっては、システムをよく理解している教員を増やすことができた。

「日々の様子」についての有用性は充分に実証された。この機能の運用方法として、作品展の出典や受賞履歴については担当者が記入を行うというような、特定の内容については必ず記入しなければならないとする取り決めが非常に有効であった。今回の実践事例以外にも、特定の内容に関しては必ず書かねばならないという運用をしている学校では、「日々の様子」が円滑に活用されている事例も、実践前の調査の中で確認されている。一方、「みんなで気付いたことを記録していきましょう」というような運用については、効果が薄いということも実証された。これらを踏まえた運用を推進すると共に、課題の改善にも取り組むべきと考える。

### (2) 課題について

「管理者」としての「中核となる教員の育成」「校務の情報化を推進する教員の不足」という課題が浮き彫りになった。そして、学校の実状をよく知っている「管理者」がどのように校務支援システムを運用するかで、学校における「校務の情報化」は大きく変わってくる。「日々の様子」のように常に推進する人物がいないと使用状況が進みにくい機能もあり、「管理者」の育成は極めて重要である。育成方法の一つとして、学校の外部からの支援で目的を達成することは可能であるが、その場合は支援できる人員が別に必要となる。

現在の状況であっても、校務支援システムを使つての「校務の情報化」において、様々な機能が使われ活用されていくかもしれない。しかし、「校務の情報化」をより能動的に推進していくためには「口頭での共有以外に記録として残し共有することの価値を高めること」というような教員の意識を変えていくことも必要である。そのことと並行して、例えば職員全員で「スズキ校務」を使う時間を設けるなど、校務支援システムを全員で一斉に行う業務の一部として取り入れていくことも必要なのではないだろうか。

このように様々な課題が浮き彫りになったことから、これらの課題へ対応できる体制を築くことや、この研究を生かした研修及び学校アプローチの継続的な実践が必要である。

## 5 終わりに

まず、本研究の問題点として、事後のアンケートや聞き取りから教職員の意識を得ることはできた上、好評価も得られたが、それをもって「校務の情報化」が進んだとは言えないことが挙げられる。「校務の情報化」で「校務の効率化」がなされているかも不明瞭である。

しかしながら本研究では、校務支援システムを使った「校務の情報化」を推進する順序について、ステップ表にまとめることができたこと、またそれに沿った支援方法は有効であるという成果が得られた。この成果は、各学校において自主的な研修ができる教員を育てるためにはアプローチが有効であることを示している。それは同時に、アプローチできる人間の必要性、ひいては情報化をコーディネートできる人材育成の必要性を示すものでもある。

課題も多く残されたが、そのことを前向きに捉え、今後その課題をクリアしていく方策を思案していきたい。校務支援システムを使いこなすということは、その機能をどう現場で運用していくかということである。そのためには活用度合是正のための研修、個に応じた研修、学校への情報伝達等、様々な面での取組を考えていかなければならない。

### 【 参考 】

<sup>1</sup> 「校務の情報化推進についての研究」(尼崎市立教育総合センター 研究紀要51号 平成26年3月)

<sup>1</sup> 「校務の情報化推進についての研究」(尼崎市立教育総合センター 研究紀要52号 平成27年3月)





## コミュニケーションの楽しさをあじわうことができる 授業のあり方を探る

指導主事 西 田 一 義

研究員 檉 貴 之（杭瀬小）吉川 あ ゆ 子（園田東小）

〃 吉 岡 沙 織（立花南小）熊 田 啓 子（上坂部小）

〃 森 栗 恭 子（名和小）阪 本 千 文（武庫東中）

〃 山 本 宣 忠（園和北小）

### 【内容の要約】

平成23年度より小学校外国語活動が完全実施されて5年が経過した。

本市では外国語活動の授業については、学校ごとに工夫して取り組みを行っている。また、当教育総合センターでも小学校での外国語活動の教科化（新たな教科「小学校英語」）に向けて、本年度より3年をかけて市内の全小学校教員を対象に外国語活動の研修を行っているところである。

その中で、コミュニケーションの楽しさをあじわうことができる外国語活動の学習とはどのようなものか、あり方について探るとともに、小・中の接続を考えた授業の形態についてもあわせて調査・研究していく。

キーワード： コミュニケーション力、蓄積、自信、学ぶ意欲、アクティブ・ラーニング

|                                            |    |
|--------------------------------------------|----|
| 1 はじめに .....                               | 55 |
| 2 研究の内容                                    |    |
| （1）研究のテーマ .....                            | 55 |
| （2）研究テーマの設定理由 .....                        | 55 |
| （3）研究の進め方 .....                            | 56 |
| （4）検証のための評価方法 .....                        | 56 |
| 3 実践事例                                     |    |
| （1）実践1～単元を通して目的意識、相手意識を明確にした2つの授業実践～ ..... | 56 |
| （2）実践2～交流（環境づくり）を通した習得の授業実践～ .....         | 62 |
| （3）実践3～反復練習に重点を置いた2つの授業実践～ .....           | 66 |
| （4）実践4～意欲を育てる取り組みの授業実践～ .....              | 71 |
| 4 研究のまとめ .....                             | 73 |
| 5 おわりに .....                               | 74 |



## 1 はじめに

平成26年11月20日に中央教育審議会にて文部科学大臣より諮問があり、外国語活動の教科化が動き始めている。「グローバル化する社会の中で、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくことができるよう、外国語で躊躇せず意見を述べ他者と交流していくために必要な力を育成していくために、小・中・高等学校を通じて大きく英語教育を変えていかなければならない。」と文部科学省教科調査官 直山 木綿子氏は述べている。

市内小学校では、外国語活動の完全実施から5年、子どもたちが英語に慣れ親しみ、外国語活動について楽しんで取り組める環境を整えつつある。

また、本年度より、当教育総合センターでも、3年間を通して平成28年度の指導要領改訂による小学校における外国語活動の教科化に向けて、尼崎市内の全小学校教員を対象とした外国語活動の研修をスタートした。

文部科学省が行った「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査」の結果では、8割近い子どもが肯定的な思いを英語の学習に持っており、英語の学習が楽しいと答えている。しかし、一方で2割程度の子どもが「何をやっているのかわからない」というように、英語でどのようなことができるようになったのかが自覚できていない児童がいるということも明らかになっている。また、楽しいと答えている児童の8割近くは、授業がゲームや歌などの活動が多く、コミュニケーション能力の育成まで至っていないとの報告があがっている。

このような動向をうけて、本年度 外国語活動研究部会を立ち上げ、これからさらにグローバル化する社会の中で、言語や文化が異なる人々と積極的に自分の意見を交流させられる力（つまり、コミュニケーション力）をどのように育成していくのかを研究していくこととした。メンバー構成は、小学校高学年担当教員5名と低学年担当教員1名及び中学校教員1名の計7名である。

## 2 研究の内容

### (1) 研究のテーマ

コミュニケーションの楽しさをあじわうことができる授業のあり方を探る

### (2) 研究テーマの設定理由

これまでから、外国語活動の授業については、学校ごとに工夫して取り組んではいるものの、全国のアンケートの傾向から本市においても「友だちと英語で会話をするのが楽しい」というところまでは至っていないと推測し、本市の状況を知ることから始めた。（※資料1）

アンケートの結果（※資料2）からも、①コミュニケーション力を培う外国語活動について、②教科化に向けたアクティブ・ラーニング型外国語活動の授業づくり、③小中の接続を見通したカリキュラムについての3点を課題として研究テーマを設定し、主体的に自ら学ぶ授業とはどのようなものか、コミュニケーションの楽しさをあじわうことができる授業のあり方について探るとともに、「小学校英語」教科化にあたり、小・中の接続を考えた授業のあり方もあわせて調査・研究していくこととした。

1年目の本年度は、①コミュニケーション力を培う外国語活動に焦点をあてて取り組む。

(1) 英語の授業は好きですか（一つだけ選びましょう）  
☐ 好き ☐ どちらかといえば好き ☐ どちらともいえない ☐ どちらかといえば嫌い ☐ きらい

(2) 英語の授業に進んで参加していますか（一つだけ選びましょう）  
☐ 進んで参加している ☐ どちらかといえば進んで参加している ☐ どちらともいえない ☐ どちらかといえば進んで参加していない ☐ 進んで参加していない

(3) 英語の授業の内容をどのくらい理解していると思いますか（一つだけ選びましょう）  
☐ 理解している ☐ どちらかといえば理解している ☐ 半分くらい理解している ☐ どちらかといえば理解していない ☐ 理解していない

(4) 英語の授業で楽しいと思うことは何ですか？（あてはまるものを全て選びましょう）  
☐ 英語の歌を歌うこと  
☐ 英語のゲームをすること  
☐ 英語で友だちと会話をする  
☐ 外国のことについて学ぶこと  
☐ 日本語と英語のちがいを知ること  
☐ 英語の文字や単語を読むこと

(5) 英語は好きですか（一つだけ選びましょう）  
☐ 好き ☐ どちらかといえば好き ☐ どちらともいえない ☐ どちらかといえば嫌い ☐ きらい

(6) 英語が使えるようになりたいですか（一つだけ選びましょう）  
☐ そう思う ☐ そう思わない ☐ わからない

(7) 英語が大切だと思いますか（一つだけ選びましょう）  
☐ そう思う ☐ どちらかといえばそう思う ☐ どちらかといえばそう思わない ☐ そう思わない ☐ わからない

(8) 外国の人が話しかけてきたらどうしますか（一つだけ選びましょう）  
☐ 英語で受け答えをする ☐ 日本語で受け答えをする ☐ だまっている ☐ その場からにげる ☐ わからない

【資料 1】アンケート

| 英語で歌を歌う    | 英語でゲームをする     | 英語で会話する  |
|------------|---------------|----------|
| 49%        | 77%           | 50%      |
| 外国の事について学ぶ | 日本語と英語のちがいを知る | 文字や単語を読む |
| 31%        | 30%           | 31%      |

【資料 2】アンケート結果

項目(4)英語の授業で楽しいと思う事は何ですか  
 (※アンケート実施児童平均値)

### (3) 研究の進め方

コミュニケーション力を培う外国語活動のあり方を 1～4 の実践を通して検証していく。

実践 1 単元を通して目的意識、相手意識を明確にした授業の実践

実践 2 実践 1 に加えて、交流（環境づくり）を通した習得の実践

実践 3 反復練習に重点を置いた取り組みの実践

実践 4 意欲を育てる取り組みの実践

### (4) 検証のための評価方法

授業者の学級児童を対象に、6 月と 12 月のアンケート（「(1)英語の授業は好きですか」「(4)英語の授業で楽しいと思うことは何ですか - 英語で友だちと会話すること - 」）の結果に焦点を当てて評価する。

## 3 実践事例

### (1) 実践 1 ～単元を通して目的意識、相手意識を明確にした 2 つの授業実践～

#### 1. 実践の概要【第 6 学年 児童 33 名】

##### (1) 単元名

「デパートで買い物をしよう」

##### (2) 単元の目標

○店で買い物をするときを使う基本的な英語表現を話したり聞いたりしようとする。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

○果物、色や衣服を表す英語表現を使って、買い物の場面を表現している。

【外国語への慣れ親しみ】

○店で買い物をするとき、日本語同様に様々なやりとりの方法があることに気付く。

【言語や文化に関する気付き】

### (3) 指導にあたって

「買い物」は、外国語活動の題材として最もよく活用される単元のゴールである。店員とお客という会話のやり取りが、学習指導要領にある具体的な場面を想定したコミュニケーション活動として学習に取り入れやすい。本単元では、「果物」「色」「衣服」を言語材料として扱い、自分の欲しいものを注文する活動を取り入れる。

単元目標「デパートで買い物をしよう」に到達させる為に、言語材料の復習と新たな表現の確認を行う。本単元では多くの言語材料を取り扱う為、導入からゴールまでを全6時間として設定し、以下のように指導する。

1時では、VTR視聴による単元の見通しを行う。VTRを視聴し、詳しい和訳はせずに何をしている場面か想像させる。そして、必要な英語表現を日本語で予想させる。また、「色」を表す言語材料を学習させる。チャンツによる発音の反復練習と、カラーフルーツバスケットゲームによる聞き取りの練習を行う。

2時では、欲しいものを尋ねる英語表現を学習させる。チャンツによる発音の反復練習、ペアゲームによる発音・聞き取りの練習を行う。ペアゲームでは、お互いのカードを尋ねる際に **What do you want? I want ---.** を使って同じカードを持っている児童を探させ、注文するときの英語表現に慣れ親しませる。

3時では、「色」「衣服」を表す言語材料を学習させる。チャンツによる発音の反復練習、「色」と「衣服」の組み合わせを聞き取り判断する練習を並べ替えゲームで行う。

4時では、再び欲しいものを尋ねる英語表現を学習させる。しかし、この時間では **What would you like? I'd like ---.** の表現を使い、**What do you want? I want ---.** よりも丁寧な表現があることを児童に気付かせる。

5時では、**How many?** を使った数の英語表現を学習させる。**one～ten** までの言語材料をチャンツで確認し、ペアゲームで表現の定着を図る。

6時では、「デパートで買い物をしよう」を行い、果物屋・洋服屋で買い物をする場面を想定した単元のまとめの活動を行う。果物や衣服は色画用紙で用意し、学習に最後買った物をワークシートに貼り付けさせる。学習後、果物や衣服を注文できたかの評価資料・教室内掲示物として活用する。

学習する言語材料・表現は、他の学年に比べ最も多様性のある単元となっている。

### (4) 単元の指導計画（全6時間）

| 時 | 目標と主な学習活動                                                         |                                                                       | 評価    |   |   |                                                                                                                |
|---|-------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|-------|---|---|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|   |                                                                   |                                                                       | 評価の観点 |   |   | 評価規準<br>【観点】[方法]                                                                                               |
|   |                                                                   |                                                                       | コ     | 慣 | 気 |                                                                                                                |
| 1 | 買い物ごっこをすることを知り、単元で学習する内容を考える。<br>チャンツとフルーツバスケットゲームで果物の英語表現に慣れ親しむ。 | “Let's go to a department store”<br>VTRを見る。<br>買い物ごっこに必要な言葉を日本語で整理する。 | ○     | ○ | ○ | 果物を表す英語表現を使って、積極的にゲームをしようとしている。【コ】<br>果物を表す英語表現を使って、ゲームを楽しんでいる。【慣】<br>果物を表す英語表現が日本語として定着しているものがあることに気付いている。【気】 |

|           |                                                           |                                                                                                             |   |   |   |                                                                                                                                                                |
|-----------|-----------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|---|---|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2         | ペアゲームをし、欲しいものを尋ねる英語表現に慣れ親しむ。                              | カラーフルーツバスケットゲーム<br>欲しいものを尋ねる英語表現をチャンツで繰り返し発音し、練習する。                                                         | ○ | ○ | ○ | 果物を表す英語表現を使って、積極的にゲームをしようとしている。【コ】<br>果物を表す英語表現を使って、ゲームを楽しんでいる。【慣】<br>果物を表す英語表現が日本語として定着しているものがあることに気付いている。【気】                                                 |
| 3         | カード並べゲームをし、色と衣服の英語表現に慣れ親しむ。                               | ペアゲーム（欲しいものを尋ねる）<br>色と衣服の英語表現をチャンツで繰り返し発音し、練習する。                                                            | ○ | ○ | ○ | 色・衣服を表す英語表現を使って、積極的にゲームをしようとしている。【コ】<br>色・衣服を表す英語表現を使って、ゲームを楽しんでいる。【慣】<br>色・衣服を表す英語表現が日本語として定着しているものがあることに気付いている。【気】                                           |
| 4         | ペアゲームをし、欲しいものを丁寧に尋ねる英語表現に慣れ親しむ。<br>外国語にも丁寧な言葉遣いがあることに気付く。 | カード並べゲーム<br>欲しいものを丁寧に尋ねる英語表現をチャンツで繰り返し発音し、練習する。                                                             | ○ | ○ | ○ | 色・衣服を表す英語表現を使って、積極的にゲームをしようとしている。【コ】<br>色・衣服を表す英語表現を使って、ゲームを楽しんでいる。【慣】<br>色・衣服を表す英語表現が日本語として定着しているものがあることに気付いている。【気】<br>欲しいものを伝え合う英語表現にも、丁寧な表現があることに気付いている。【気】 |
| 5<br>(本時) | ペアゲームをし、数を探る英語表現に慣れ親しむ。                                   | ペアゲーム（欲しいものを丁寧に尋ねる）<br>数を探る英語表現をチャンツで繰り返し発音し、練習する。                                                          | ○ | ○ |   | 色・衣服を表す英語表現を使って、積極的にゲームをしようとしている。【コ】<br>数を表す英語表現を使って、積極的にゲームをしようとしている。【コ】<br>色・衣服を表す英語表現を使って、ゲームを楽しんでいる。【慣】<br>数を表す英語表現を使って、ゲームを楽しんでいる。【慣】                     |
| 6         | 学習した英語表現を使って、お店で買い物をします。                                  | ペアゲーム（数を探る）<br>店員とお客様の表現を復習する。<br>“Let's go to a department store!”をし、単元で学習した英語表現に慣れ親しむ。<br>ワークシートに買った物を貼る。 |   | ○ |   | たくさんの果物の中から、自分の欲しい果物を注文している。【慣】<br>色と衣服を組み合わせ、自分の欲しい色の衣服を表現している。【慣】<br>客と店員の丁寧な表現のやりとりを、店によって使い分けている。【慣】                                                       |

(5) 本時の目標

○数を探る英語表現を使って、相手の持っているおはじきの個数を聞き合う。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

○数を表す英語表現に慣れ親しみ、発音したり聞き分けたりする。

【外国語への慣れ親しみ】

(6) 準備物

ピクチャーカード（衣服・数） おはじき ワークシート（ふり返し用）

VTR “Let’s go to a department store!”

(7) 本時の展開（4/6）

| 過程（分）            | 児童の活動                                                                                                      | 教師（HRT）・ALT の指導・支援 ◆評価                                                                                                                                                                                                                    |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Greeting<br>(5)  | 1. あいさつをする。<br>Hello.<br>Hello, how are you?<br>I’m fine(happy/hungry...).                                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ HRT のあいさつに答える活動を通して、外国語学習の始まりを意識させるとともに、外国語を話しやすい雰囲気を作り出す。</li> <li>・ 全体で一斉にあいさつした後、1人5人ずつ発表させるなど、繰り返し練習させる。</li> </ul>                                                                          |
| Warm-up<br>(10)  | 2. ゲームをする。<br>★ “Make pair game”<br>What would you like?<br>I’d like -(clothes)-.                          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ゲームをして、前時で学習した衣服と丁寧に欲しいものを尋ねる英語表現を復習する。</li> <li>・ 衣服や丁寧に欲しいものを尋ねる英語表現を判断しにくい児童を支援する。</li> <li>・ 前時までの内容が定着しているか確認する。</li> <li>◆ 衣服の判断をスムーズにできているか。</li> <li>◆ 丁寧に欲しいものを尋ねる表現が使えているか。</li> </ul> |
| Activity<br>(25) | 3. 本時のめあてを確認する。<br><div>英語で「いくつかな!？」をたずね合おう</div>                                                          |                                                                                                                                                                                                                                           |
|                  | 4. チャンツをする。<br><div>How many?<br/>(number) one, two, three, four, five, six, seven, eight, nine, ten</div> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 衣服を表す英語表現を発音させる。</li> </ul>                                                                                                                                                                      |
|                  | 5. ゲームをする。<br>★ “Make pair game”<br>How many? -(number)-.                                                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ おはじきを配布し、ルールの説明をする。</li> <li>・ How many? -(number)-を使い、お互いの持っているおはじきの数が10になるようにペアを探させる。</li> <li>◆ 数を表す英語表現を聞き取ることができているか。</li> <li>◆ How many?を使って、友達とコミュニケーションをとっているか。</li> </ul>              |
| Closing<br>(5)   | 6. 本時のまとめをする。<br><br>7. 次時の内容を確認し、終わりのあいさつをする。<br>Good bye! See you.                                       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ VTR を視聴し、学習した英語表現の使われ方を確認させる。</li> <li>・ 授業を振り返って感じたことをワークシートに書かせ、発表させる。</li> <li>◆ 本時の学習内容を自分なりに振り返っているか。</li> </ul>                                                                            |

2. 実践の概要 【第6学年 児童40名】

(1) 単元名

「Turn right」(Hi, friends! 2 Lesson 4)

(2) 単元の目標

相手意識をもって目的地への行き方を尋ねたり、わかりやすく道案内したりしようとする。

(3) 指導にあたって

本学級は、課題に対して前向きに取り組む児童も多くいるが、一人で発話するような活動や発表に対しては、声が小さくなったり、ボディラングージを使うのを恥ずか

しがったりと、なかなか積極的に取り組むことが難しい児童もいる。

この単元は、相手意識をもって目的地への行き方を尋ねたり、わかりやすく案内したりすることで進んで友だちとコミュニケーションをとろうとする態度を育成するのに適している教材である。

友だちに道を尋ねたり、道案内をしたりする活動を単元の最終活動に設定し、その目的を友だちの誕生日プレゼントをゲットする為とすることで、児童が何の為に英語表現を習得しなければならないのか（学習課題）がはっきりと理解できるようになるであろうと考えた。

また、道案内に友だちのプレゼントをゲットするという目的を追加設定することで、友だちのことを思いながら誕生日プレゼントを考えたり、作ったりする必要性を感じ、意欲を持って取り組むことができる。

その上で、英語への苦手意識を軽減し、より英語が身近に感じられるよう、外国語活動の授業中だけでなく、日常生活の様々な場面（朝の会、プリント配布時、動きの指示、認め言葉等）で積極的に英語を用いるようにした。

#### (4) 単元の指導計画（全4時間）

| 時         | 目標                                              | 主な活動                                                                                                                                                                                                                        |
|-----------|-------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1         | 町中にある様々な建物などの言い方を知り、日本語との違いに気付くとともに、道案内の言い方を知る。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・道案内のロールプレイを見る。</li> <li>・建物などの言い方を知る。</li> <li>・道案内の言い方を知る。</li> <li>・Turn right ゲーム<br/>(リズムに乗り、指示された通りに体の向きを変えたり、足踏みしたりする)</li> </ul>                                             |
| 2         | 建物などの言い方や、目的地への行き方を尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・建物などの言い方に慣れ親しむ。</li> <li>・目的地への行き方を尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。</li> <li>・同じ地図はできるかな</li> </ul>                                                                                              |
| 3         | 目的地への行き方を尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。<br>やりとりの表現に慣れ親しむ。  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・目的地への行き方を尋ねたり、言ったりする表現に慣れ親しむ。</li> <li>・次時の準備をする。</li> <li>①くじでプレゼントをあげる友達を決定する。</li> <li>②誕生日プレゼントを考える。</li> <li>③プレゼントをゲットする場所や店を決め、ワークシートに記入する。</li> <li>④プレゼントを作成する。</li> </ul> |
| 4<br>(本時) | 相手意識をもって目的地への行き方を尋ねたり、わかりやすく道案内したりしようとする。       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・友達へのプレゼントをゲットしに行こう～わかりやすく友達に道案内しよう～</li> <li>・ゲットしたプレゼントをワークシートに貼り付け、プレゼントを完成させる。</li> <li>・友達にプレゼントを渡す。</li> </ul>                                                                 |

#### (5) 本時の目標

相手意識をもって目的地への行き方を尋ねたり、わかりやすく道案内したりしようとする。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

#### (6) 準備物

ワークシート、絵カード、マップ



(7) 本時の展開 (4/4)

| 学習活動                                 | 児童の活動                                                                                                                 | 留意点                                    |
|--------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------|
| 1. あいさつ                              | 教師や友達とあいさつをする。                                                                                                        | 外国語学習の始まりを意識させる。                       |
| 2. 建物や場所の名前、道案内の言い方を復習する。            | 建物や場所の名前を教師の後に続いて発音したり、道案内の言い方では教師の指示に従って体を動かしたりする。                                                                   | 道案内の言い方では、リズムに合わせて、体を動かしながら発音させるようにする。 |
| 友達へのプレゼントをゲットしに行こう ～わかりやすく友達に道案内しよう～ |                                                                                                                       |                                        |
| 4. 道案内の表現を確認し、練習する。                  | 教師を相手に道案内の表現を練習する。                                                                                                    | 繰り返し練習させることで表現に慣れ親しませる。                |
| 5. 友達に目的地への行き方を尋ねたり、道案内したりする。        | <ul style="list-style-type: none"> <li>地図を見てペアの指定した場所への行き方を説明する。</li> <li>地図を見ながら道案内を聞き、場所を言い当て、プレゼントをもらう。</li> </ul> | 地図上で消しゴムを動かしながら道案内を聞かせる。               |
| 6. 友達へのプレゼントを完成させる。                  | ワークシートに手に入れたプレゼントを貼る。                                                                                                 | 他の人に出来るだけ見せないように声かけする。                 |
| 7. 友達にプレゼントを渡す。                      | プレゼントを渡したり、もらった                                                                                                       | お礼を言うようにさせる。                           |
| 8. 振り返り                              | 振り返りカードを書く。                                                                                                           | 授業を振り返って感じたことを記入させる。                   |
| 9. あいさつ                              | 教師とあいさつをする。                                                                                                           |                                        |

3. アンケート結果

|                                | 6月  | 12月 |                                                                                             |
|--------------------------------|-----|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 英語の授業は好きですか<br>(好き・どちらかといえば好き) | 78% | 82% | +4<br> |
| 英語で友だちと会話すること                  | 63% | 56% | -7<br> |

4. 分析

以上の2つの実践では、最終活動（学習計画）を単元の最初に示したことで、児童が目的意識をもって外国語活動に取り組むことができた。さらに、友だちへのプレゼントを考えたり、作ったりする活動を設定することで、友だちのことを理解しようとする態度が育ち、最終活動の道案内する児童が相手のペースに合わせて話したり、英語が苦手な相手にはジェスチャーを交えながら案内する等の工夫する姿が見られ、相手を意識しながらのコミュニケーションをとることができた。その結果、「英語の授業が好き」という児童がプラス4%増加したと考える。

また、日常生活の様々な場面に英語を用いたことで、自ら英語を日常生活の中で使おうとする児童の姿も多く見られるようになった。英語への抵抗が少なくなり、大勢の前でも自信を持って発話できる環境の向上もアンケート指数変化の要因であろう。

ただ、「英語で友だちと会話すること」については、全ての単元に対して、児童が目的意識を持てる課題設定をすることが十分ではなかったため、友だちと会話することが好きという能力の定着にまでは至らなかったと考えられる。

児童が目的意識を明確に持てる計画的なカリキュラム作りが必要であり、きちんと英語が使えるというより英語を使うことを通して「友達とのかかわり」を大切にする

活動を設定し、言語材料・表現の習得だけにとらわれない授業を行うよう配慮することが大切である。

## (2) 実践2 ～交流(環境づくり)を通した習得の授業実践～

### 1. 実践の概要 【第1学年 児童26名】

#### (1) 単元名

『はらぺこあおむし』であそぼう！

#### (2) 単元の目標

○英語でたずねたり答えたりして、進んで友だちと交流を図ろうとしている。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

○食べ物の言い表し方に慣れ、その名前を使ったゲームに進んで参加している。

【外国語への慣れ親しみ】

○食べ物を表す英語表現には外来語としてなじみのあるものが多いが、発音やアクセントが異なることに気付いている。

【言語や文化に関する気付き】

#### (3) 指導にあたって

同じ英語表現に何度も触れる活動を設定し、表現の幅や使える語彙を増やすことができたなら、友だち同士のやり取りを楽しもうとする意欲が高まり、積極的にコミュニケーションを図り、相手に通じた喜びや相手を理解できた喜びをあげることができであろうと仮説をたてて取り組んだ。

1学期は、「こんにちは。ごきげんいかが。」などの簡単なあいさつや答え方に慣れ親しんだ。2学期は、1～12までの「数」を使って、ゲームを中心とする活動を楽しんだ。Classroom Englishとして、主に手紙を配る時に“Here you are.” “Thank you.”の表現を使い始めたところである。“You are welcome.”の表現は、HRT(ホームルームティーチャー)は意識して使用しているが児童の使用は少ない。また、速さを変えたり声のトーンを変えたりするなどALTの指導する変化をつけた繰り返しの手法を使った活動を好むこともあり、同じように真似をして楽しく学んできた。

絵本『はらぺこあおむし』は、児童はよく知っていてなじみがある話である。今回は、絵本に出てくる食べ物(単語15個)に絞ることで、初めて言い方を知る児童も取り組みやすくなると考える。

また、「ストロベリー」ではなく「ストロベリー」といった、外来語と英語の発音やアクセント、抑揚の違いにも触れることができ、英語に対する興味を持つことができる。

さらに、やり取りの表現「どうぞ」「ありがとう」に慣れ親しむことで、お店屋さんごっこなどをする時の基本的な表現に生きてくると考える。

ゲームや歌を中心にくり返しテンポよく活動して耳にリズムが残るようにしていくことで、児童が積極的に英語を使ってコミュニケーションを図る自信をつけることにつなげていく。また、言葉のシラブル(音節)が自然に体得できるように、チャンツ時に手拍子を取り入れる。Activityでは、反復による習熟を効果的にするために、一つのゲームで食べ物を中心に、曜日と数の3種類で活用する。活動ではペアやグループでの会話を増やし、自力で言う場面を設定する。また、ジェスチャーなど自分なりに表現の仕方を考えて、相手にどうにかして伝えようとする態度を育てていく。また、

児童の活動や表現を大いに認め、自信をもって活動に参加できるように賞賛する言葉をかけていきたい。

1 時では、絵本『はらぺこあおむし』の読み聞かせを行う。既習事項の曜日と数は、歌による言い慣れを目指す。また、キーワードを決めて、手をたたいたりジャンプしたりと変化をつけて歌うことで楽しみながら慣れていかせたい。「くだもの」の言い表し方を知り、チャンツとゲームを中心に繰り返し言い慣れと聞き慣れをしていく。さらに繰り返し言ったり聞いたりする中で、英語と外来語として使われている日本語とでは、アクセントと発音に違いがあることに気付かせたい。

2 時以降では、絵本『はらぺこあおむし』の読み聞かせは学習が始まる前に行い、活動の時間を確保する。ここでは、“Here you are.” “Thank you.” のやり取りに慣れ親しませる。“You are welcome.” まで扱いたいところだが、フレーズが増えることで活動自体に不安を持ったり、いいかげんになったりすることが考えられるため、本単元では扱わない。タッチゲームやラインゲームで、語彙とやり取りの表現の定着を図っていく。

3 時では、前時まで学んだ言葉や表現を使ってゲームを楽しみながら自信の定着を図っていく。

4 時（本時）では、単元のまとめとして「はらぺこゲーム」を行い、はらぺこあおむしが描いてあるカードにゲットした食べ物を貼り、はらぺこあおむしを太らせていく。ここでは、“はらぺこあおむしになり、たくさん食べて beautiful butterfly に変身する” というお話の世界の力を借りてやり取りを楽しませたい。最後の読み聞かせでは、はらぺこあおむしになりきって聞いている児童が増えていることを期待したい。

#### (4) 単元計画（全4時間）

| Lesson2 「はらぺこあおむし」であそぼう |                                    |            |                                                                                                                  |                                                                                   |
|-------------------------|------------------------------------|------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| part                    | 目標                                 | 評価         | 主な活動                                                                                                             | 扱う表現・主な語彙                                                                         |
| 1                       | くだものの言い方に慣れ親しむ。                    | (ア)<br>(エ) | ・英語版『はらぺこあおむし』を聞く。<br>・聞き取れた英語を出し合う。<br>・♪1週間の歌・数字の歌を歌う。<br>・くだものの言い方を知る。<br>・Activity①タッチゲーム（注1）                | 曜日<br>数（1～12）<br>apple, pear, plum, orange,<br>strawberry, watermelon             |
| 2                       | ・食べ物の言い方に慣れ親しむ。<br>・やり取りの表現に慣れ親しむ。 | (ア)<br>(エ) | ※英語版『はらぺこあおむし』を聞く。<br>・♪1週間の歌・数字の歌を歌う。<br>・曜日・数・食べ物の言い方に慣れ親しむ。<br>・タッチゲーム2<br>・Activity①ラインゲーム（注2）               | 曜日・数（1～12）<br>食べ物<br>I am hungry.<br>【食べ物】 please.<br>Here you are.<br>Thank you. |
| 3                       | 曜日・数・食べ物を使ってやりとりを楽しむ。              | (イ)<br>(ウ) | ※英語版『はらぺこあおむし』を聞く。<br>・♪1週間の歌・数字の歌を歌う。<br>・曜日・数・食べ物の言い方に慣れ親しむ。<br>・タッチゲーム3<br>・ラインゲーム<br>・Activity①食べ物ゲットゲーム（注3） | 曜日・数（1～12）<br>食べ物<br>I am hungry.<br>【食べ物】 please.<br>Here you are.<br>Thank you. |
| 4<br>本時                 | はらぺこあおむしをおなかいっぱいにさせよう。             | (イ)<br>(ウ) | ※英語版『はらぺこあおむし』を聞く。<br>♪1週間の歌・数字の歌を歌う。<br>・曜日・数・食べ物の言い方に慣れ親しむ。                                                    | 曜日・数（1～12）<br>食べ物<br>I am hungry.<br>【食べ物】 please.                                |

|  |  |                                                                                                                 |                             |
|--|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|
|  |  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・タッチゲーム3</li> <li>・Activity①はらぺこゲーム（注4）</li> <li>・学習全体をふりかえる。</li> </ul> | Here you are.<br>Thank you. |
|--|--|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------|

(5) 本時の目標

○英語での曜日や数, 食べ物の言い表し方に親しみ, 歌やゲームに元気よく取り組む。

○HRT や友達とのやり取りを楽しむ。

(6) 準備物

フラッシュカード, 曜日・数字・食べ物カード (6枚), Activity 用食べ物カード  
CD デッキ (曲 ♪The days of the week・♪Seven steps) ワークシート

ふり返しシート, パソコン, モニター, ミニ三角コーン

(7) 本時の展開 (4/4時間)

| 過程 (分)           | 児童の活動                                                                                                                                    | 教師 (HRT) の指導・支援 ◆評価                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Greeting<br>(2)  | 1. あいさつをする。<br>・ Hello, how are you?                                                                                                     | ・ 英語で元気よく挨拶を交わす活動を通して, 外国語学習の始まりを意識させるとともに, 外国語を話しやすい雰囲気を作り出す。                                                                                                                                                                                                                               |
| Warm-up<br>(15)  | 2. 歌を歌う。<br>♪The days of the week<br>♪Seven steps<br><br>3. チャンツをする。                                                                     | ・ 歌う前に曜日と数字の単語の確認をする。<br>・ 同じ歌を異なる歌い方で繰り返して歌わせる。<br>(手をたたく・ジャンプ・サイレント等)<br>◆元気に歌えているか。<br>・ 食べ物の英語表現をリズムを使って練習させる。<br>T:apple C:apple・apple・apple<br>T:りんご C: apple・apple・apple                                                                                                              |
| Activity<br>(20) | 4. タッチゲームをする。<br>・ 班ごとに分かれて座る。<br>C:What food(day/ number)?<br>T:Orange.<br>C:Orange!<br><br>本時のめあてを確認する。                                | ・ 単語を言いながらタッチをさせる。<br>・ お手つきをしたら, 立って1回休憩をさせる。<br>・ 大きな声で言っていたら大いに褒める。<br>◆前時までの内容が定着しているか確認する。                                                                                                                                                                                              |
|                  | 『はらぺこあおむし』で あそぼう！<br>～「はらぺこあおむし」をおなかいっぱいにさせよう！～                                                                                          |                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|                  | 6. Activity①<br>はらぺこゲームをする。<br>A&B: Hello.<br>A: I'm hungry.<br>(食べ物の名前), please.<br>B: Here you are.<br>A: Thank you.<br>A&B: Good bye. | ・ ロールプレイを見せた後, 相手や役割を変えて練習することで交流時の英語表現に慣れさせる。<br>・ Gesture をつけて練習させる。<br>・ 食べ物をもらったら, ワークシートに貼ってあおむしを太らせる。<br>・ 言い出しにくい児童には, 一緒に言うなど支援をする。<br>・ Smile, Eye contact, Gesture 等ができていた児童がいたら大いに褒める。<br>◆ゲームに進んで参加し, やり取りを楽しんでいるか。<br>・ 授業を振り返って感じたことをワークシートに書かせ発表させる。<br>◆本時の内容を自分なりに振り返っているか。 |
| Closing<br>(8)   | 7. 本時と単元のふり返しをする。<br><br>8. 終わりのあいさつをする。<br>Good bye! See you.                                                                           |                                                                                                                                                                                                                                                                                              |

ア タッチゲーム (聞き慣れ・言い慣れ)

発音された英語を聞いて, 該当するものが描かれたカードにタッチする。

- ① 黒板に貼ってあるフラッシュカードを使って、2人ずつ行う。ハンマー使用。
- ② かるたやカードを使って、班ごとに行う。タッチのみ or とる

教師： Are you ready? (回答者は、手を頭の上に置いて、Yes!) 1・2！  
 児童： What fruit?  
 教師： Apple.  
 児童： Apple! (該当する絵カードをタッチする。)

タッチゲーム 1：くだものかるた

(apple, pear, plum, orange, strawberry, watermelon) 6枚を使用する。

タッチゲーム 2：食べ物かるた

(chocolate cake, ice-cream cone, pickle, cheese, salami, lollipop, cherry pie, sausage, cupcake) 9枚を使用する。

タッチゲーム 3：曜日・数 (1～12)・食べ物が書いてある絵カードを使用する。

#### イ ラインゲーム (言い慣れ)

- ① 班ごとに1列に並ぶ。
- ② 指定されたカードを使い、列の前後の友達とやりとりをする。
- ③ 全員が言って座ったチームが勝ち。

A：(食べ物カードを見せる)  
 B：Apple, please.  
 A：Here you are. (カードを渡す)  
 B：Thank you. (カードを受け取る)



#### ウ 食べ物ゲットゲーム (言い慣れ)

- ① 一人3枚ずつ食べ物のカードを持っておく。
- ② ペアになり、簡単なあいさつをする。
- ③ じゃんけんをする。
- ④ 勝った児童は、負けた児童が持っているカードの中から1枚選び、受け取る。
- ⑤ 簡単なあいさつをする。
- ⑥ 次の相手を探す。カードがなくなってしまった児童は、カードをもらいに行く。

お互いに：Hello. Rock-scissors-paper-1,2,3! (じゃんけんをする)  
 負けた児童：持っているカードを見せる。  
 勝った児童：Apple, please. (相手のカードの中から1枚選んで伝える)  
 負けた児童：Apple. Here you are.  
 勝った児童：Thank you.  
 お互いに：Good Bye.  
 ※カードがなくなってしまった児童：Card, please.

#### エ はらぺこゲーム (言い慣れ)

- ① はらぺこチームとたべものチームに分かれる。
- ② はらぺこチーム：ワークシートを準備する。  
 たべものチーム：食べ物のシールを準備する。
- ③ はらぺこチームは歩きまわり、食べ物を貰いに行く。
- ④ たべものチームは、食べ物シールをワークシートに貼ってあげる。
- ⑤ 時間が来たら、役割を交代して行う。

#### 2. 児童の変容

- ・繰り返し行う活動を通して、興味と心配を自信に変えることで、楽しく取り組む態度が見られるようになった。
- ・学習だけでは定着しなかった表現が、他学年との交流活動をすることで活用されるようになった。

### 3. 分析

以上の実践では、低学年の児童に関しても、あいさつ・数（1～12）・食べ物・色・曜日などの言葉や英語表現に何度も触れることで、使える語彙や表現の幅を増やすことができることがわかる。初めて英語という言葉に出合う児童は、興味を持ってリピートしたり、身体表現も取り入れながら歌ったりする。特にリズムを伴って発音するチャンツは、繰り返しても飽きずに取り組み、発話する回数や順序、速さを変えたりするなどの変化をつけることができる。また、リズムをつけて紹介することで、スムーズに言えるよう意欲的に練習に取り組むことができる。ただ、一人で答える場面になると定着がないため躊躇する様子が見られる。しかし、2時間、3時間と時間が進むにつれ、語彙の聞き慣れや言い慣れが増して積極的に活動に取り組めるようになり、友だちとのやり取りも活発になっていくのも低学年の特性であろう。言い方を忘れた場合も、友だち同士で教えあいながらコミュニケーションを図る場面が多く見られた。繰り返しを通して、やり取りを楽しんだり、積極的にコミュニケーションを図ろうとしたり、相手に通じた喜びや理解できた喜びを味わったりすることができるのである。

つまり、英語の学習（特に低学年児童）においては、語彙とフレーズを手に入れる（定着）ことで、それを使ってコミュニケーションを図ろうという意欲（関心）がわき、使ってみる（体験）中で、通じたり理解してもらえたりした喜びが自信へとつながるということが言える。学級での導入では全く使われなかった“*You're welcome*”という表現が、他学年（高学年）との交流（桃太郎の英語劇発表鑑賞）を通して頻繁に使われるようになったということがあった。目的意識を持って活動へ取り組むことで、お互いに「伝えたい」、「使いたい」という純真な思い（意欲）が相乗効果を起こした結果の表れと考える。

低学年の段階においては、基盤となる語彙とフレーズを繰り返しインプットしていく方法をいくつも考えて取り組んでいくことが、自信をもって英語を使ってコミュニケーションを図っていくことにつながっていくと考える。

### （3）実践3 ～反復練習に重点を置いた2つの授業実践～

#### 1. 実践の概要 【第6学年 児童38名】

##### （1）単元名

「What do you want to be?」（Hi, friends! 2 Lesson 8）

##### （2）単元の目標

○積極的に自分の将来の夢について伝える。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

○職業や、どうなりたいかという表現を聞いたり言ったりする。

【外国語への慣れ親しみ】

○英語と日本語での職業を表す語の知り、言葉の面白さに気付く。

○世界には様々な夢をもつ子どもがいることを知る。【言語や文化に関する気付き】

(3) 指導にあたって

1学期に実施したアンケートでは、「外国語の授業が好き」・「どちらかといえば好き」が73%を占めており、82%の児童が外国語の授業を好きということが分かった。また、91%が「英語を使えるようになりたい」、96%が「英語が大切だと思う」または「どちらかといえばそう思う」と考えていた。外国語に対する興味があり、その必要性も感じていると思われる。ただし、ゲームや歌は楽しいが、そこから友だちとの会話などコミュニケーションの楽しさを味わうことへと繋がっていないということもわかった。さらに、誰かがやっているのは楽しいが、自分がやるとなると二の足を踏む児童も多い現状であった。

そこでまず、子ども達の好きなゲームの内容を精選して、意図的に学習に取り入れることとする。ゲームは、行うことで何をねらうのかを明確にする。また、似たようなゲームでも扱う単語や内容を変えることで子どもたちにも抵抗なく取り組めるように設定する。目的を理解していないと、ただの遊びになりがちな児童が多いことから、本時のめあてと絡めてその意図を説明してから行うようにする。

次に、毎時間の外国語活動の中で歌を聞いたり歌ったりさせることを取り入れることとする。子ども達は、外国語を口に出すことに抵抗があるので、チャンツとともに聞いたことのある曲や簡単にくり返せる曲を使用して親しませることを大切にする。よく聞くこと、分かるフレーズをまねして歌ってみることからスタートする。その中で、聞いたことのあるフレーズを聞き取ること、分かるところだけでも自信をもって声を出すことを目指す。

(4) 単元の指導計画（全4時間）

| 時 | 目標と主な活動                                                              | 評 価 |   |   |                                                      |
|---|----------------------------------------------------------------------|-----|---|---|------------------------------------------------------|
|   |                                                                      | コ   | 慣 | 気 | 評価基準                                                 |
| 1 | 英語と日本語での職業を表す語を知り、言葉のおもしろさに気付く。<br>○声だし<br>○チャンツ<br>○スリーヒントクイズ       |     |   | ○ | ・職業を表す語について違いや同じところに気付いている。                          |
| 2 | 様々な職業の言い方や、将来の夢について尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。<br>○声だし<br>○チャンツ<br>○タッチゲーム   |     | ○ |   | ・様々な職業を聞いたり言ったりしている。                                 |
| 3 | 話す相手を意識して、互いの夢について交流する。<br>○声だし<br>○ステレオゲーム<br>○友達の「夢宣言」を聞く。         | ○   |   |   | ・就きたい職業について、尋ねたり答えたりしている。                            |
| 4 | 世界には様々な夢をもつ子どもがいることを知る。自分の「夢宣言」を行う。<br>○声だし<br>○タッチゲーム<br>○「夢宣言」をする。 | ○   |   | ○ | ・世界には様々な夢をもつ子どもがいることに気付いている。<br>・相手を意識して自分の夢を紹介している。 |

(5) 本時の目標

様々な職業の言い方や、将来の夢について尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。

【外国語への慣れ親しみ】

(6) 本時の展開 (2/4)

| 児童の活動                                                                                                                                                                                           | 指導者の活動                                                                                                                                                         |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ はじめの挨拶をする。<br/>Hello. How are you?<br/>I'm fine. / I'm sleepy.<br/>I'm hungry.</li> <li>・ フォニックスのDVDでアルファベットを声に出して言う。</li> <li>・ 本時のめあてを知る。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全体に挨拶をし、個別に数名の児童と挨拶をする。</li> <li>・ 音声をよく聞き、まねをして声を出させる。</li> </ul>                                                    |
| <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">           将来の夢について尋ねたり答えたりしよう。         </div>                                                                       |                                                                                                                                                                |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ チャンツをする。</li> <li>・ タッチゲームをする。<br/>What do you want to be?<br/>I want to be a teacher.</li> <li>・ 振り返りをする。</li> <li>・ 終わりの挨拶をする。</li> </ul>            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ リズムにのって言えるようにする。</li> <li>・ 繰り返し尋ねる表現に慣れ親しむ。</li> <li>・ 職業の言い方に慣れ親しむ。</li> <li>・ 気付いたこと、出来るようになったことを発表させる。</li> </ul> |

2. アンケート結果

|                                | 6 月   | 1 2 月 |                                                                                            |
|--------------------------------|-------|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 英語の授業は好きですか<br>(好き・どちらかといえば好き) | 7 3 % | 6 7 % |  - 7  |
| 英語で友だちと会話すること                  | 5 2 % | 3 2 % |  - 20 |

3. 実践の概要 【第6学年 児童34名】

(1) 単元名

「Let's go to Italy.」(Hi, friends! 2 Lesson 5)

(2) 単元の目標

○自分の思いが伝わるように、おすすめの国について発表したり、友だちの発表を聞いたりする。 【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

○行きたい国について尋ねたり行ったりする表現に慣れ親しむ。

【外国語への慣れ親しみ】

○世界には多くの国や異なる文化があることに気づく。

【言語や文化に関する気付き】

(3) 指導にあたって

本学級の児童は、1学期に行ったアンケートでは、英語の授業が「好き」「どちらかといえば好き」と答えた児童が90%、英語が「必要」「どちらかといえば必要」という児童が84%を占めおり、大半の児童は外国語が必要だと感じ興味を持って取り組んでいることがうかがえた。しかし、英語の授業を「理解している」と答えた児童は28%、また、英語で友だちと会話することを「楽しい」と思っている児童も28%にとどまっており、外国語を活用することに自信がないと感じている児童が多くを占めていることも分かった。



指導するにあたっては、次の3点に留意して取り組む。

1つ目は「単語の習得」である。週一回の外国語の授業では積み重ねが不十分と考え、隙間時間を見つけては消しゴムゲームなどの簡単なゲームを繰り返し行う。使える単語（＝語彙）を増やすことが、自分の伝えたいことを表現するための素地を養うことにつながると考える。ただし、ただ発音するだけではなく活用につなげるために、意味の理解を促したり、会話をする活動とのつながりを理解させたりすることに気をつける。

2つ目は「クラスルームイングリッシュを取り入れる」ことである。普段の学校生活でのやり取りを外国語で行うことで、外国語でのコミュニケーションに対して抵抗をなくしたいと考えた。例えば、プリントを配る際に「How many?」やゲーム等で「Who is winner?」と尋ねることで、外国語でのコミュニケーション場面を増やすよう心がける。また、本単元では国を紹介するチャンツを取り入れ、リズムに乗って発音することで、スムーズに言おうとしたり、イントネーションに注意したりする児童が増えることをねらう。

3つ目は「友だちと会話する活動を取り入れる」ことである。コミュニケーション能力を育成するために、授業の最後には友だちと外国語で会話をする活動を取り入れる。外国語が通じたと感じられる機会を増やし、コミュニケーションの楽しさを感じさせたい。

#### (4) 単元計画

目標 自分が行きたい国を紹介する表現に慣れ親しむ。

| 時         | 目標                                                                                                                                  | 評価                                               |
|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|
| 1         | 国名のいい方を知る。<br>・フラッシュカード<br>・(かっこ)に国名を書こう<br>・どの国の世界遺産かを考えよう<br><b>【What country?】</b><br>・国旗クイズを作ろう                                 | 国の名前を聞いたり言ったりしている。                               |
| 2         | 行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。<br>・フラッシュカード<br>・消しゴムゲーム<br>・友だちに行きたい国をインタビューしよう <b>【What country do you want? I want to go to ~.】</b> | 行きたい国を友だちに尋ねたり、答えたりしている。                         |
| 3         | 自分が行きたい国を紹介する表現に慣れ親しむ。<br>・行きたい国について調べる<br>・リズムに乗せて紹介の仕方を練習する                                                                       | 国を紹介する表現を言ったり、英語を使って尋ねたりしている。                    |
| 4<br>(本時) | 旅行会社の社員になって国を紹介したり、友だちの発表を聞いたりする。<br>・フラッシュカード<br>・おすすめの国を紹介しよう                                                                     | 自分の思いが伝わるように工夫しておすすめの国について発表したり、友だちの発表を聞いたりしている。 |

## (5) 本時の展開 (4/4)

| 児童の活動                                                                                                                                         | 指導者の活動                                                                                                                                                                                            | 準備物                                       |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| <p>あいさつをする<br/>フラッシュカード【国名】<br/>【I want to go to ～.】</p> <p>Chant “Let's go to Italy.”<br/>「おすすめの国を紹介しよう。」を聞いて、答える。<br/>おすすめする国の紹介の仕方を知る。</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・絵カードを黒板に貼りながら、国名を思い出させる。</li> <li>・【I want to go to ～.】を使って国の名前を言わせる。</li> <li>・リズムにのって発音するよう促す。</li> <li>・音声を聞いて、答えさせる。</li> <li>・紹介の仕方を練習する。</li> </ul> | カード                                       |
| <p>旅行会社の社員になって、おすすめする国の紹介の仕方を考える。</p> <p>おすすめの国について発表する。<br/>今日の授業の振り返りをする。</p>                                                               | <ul style="list-style-type: none"> <li>・絵カードを元に紹介の仕方を考えさせる。</li> <li>・リズムに乗って紹介できるよう練習させる。</li> </ul>                                                                                             | <p>それぞれの国の世界遺産や有名な物についての絵カード<br/>絵カード</p> |

#### 4. アンケート結果

|                                | 6 月   | 1 2 月 |                                                                                            |
|--------------------------------|-------|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 英語の授業は好きですか<br>(好き・どちらかといえば好き) | 9 1 % | 8 2 % | <br>- 9 |
| 英語で友だちと会話すること                  | 2 8 % | 3 2 % | <br>+ 4 |

## 5. 分析

(3) 1 の実践では、自信を持って英語を発話させるためにチャンツや聞いたことのある曲および簡単な発音に特化したフォニックスの DVD を使用することで、今までわからなかった言葉が聞こえるようになり、喜びにつながる児童の姿が見られた。

ただ、ねらいを明確にしながら楽しいゲームを通して会話につなげることを目指した実践であったが、ゲーム自体が練習の色合いが強くなり、授業が楽しくないと感じるようになったと考えられる。一見楽しいと思われるゲームであるが、ゲームを中心として単語やセンテンスに慣れ親しませることは難しいということがわかる。

また、(3)2の実践でも、日常会話にクラスルームイングリッシュを取り入れたり、単語の習得にゲームを活用したりすることで、「英語で友だちと会話すること」がプラス4%上昇する形で表れたと考える。コミュニケーションが楽しいと思える場面設定を行ってきたわけであるが、「英語の授業は好きか」という項目ではマイナス9%という結果になっている。英語の単語や発音に興味を持つ児童も見られはしたが、英語を話すことに重心を置いた授業になってしまい、学んだ語彙や表現を活用して自分の目的を達成できる喜びにつなげる授業につながらなかったのではないかと考えられる。授業をつくる上で、語彙や表現等の技能を習得するための学習にするのではなく、目的意識を持って主体的に課題を解決していこうとする学習計画を設定していくことが大切である。

そのためには、ALTや他の教職員、地域の力等を活用しながら、子どもが日頃から外国語活動に触れることができる環境を充実させる必要がある。

(4) 実践4 ～意欲を育てる取り組みの授業実践～

1. 実践の概要【第5学年 児童33名】

(1) 単元名

「クイズ大会をしよう What's this?」(Hi, friends! 1 Lesson 7)

(2) 単元の目標

○ある物について積極的にそれが何かと尋ねたり、答えたりしようとする。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

○ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。

【外国語への慣れ親しみ】

○日本語と英語の類似点や相違点から、言葉の面白さに気付く。

【言語や文化に関する気付き】

(3) 指導にあたって

本単元では、「クイズ大会をしよう」という単元ゴールを設定し、友だちとのコミュニケーション活動を次の4つを柱として毎時間の学習活動へ組み込みたい。

- ① Classroom English の活用
- ② 単元ごとにゴールになる活動の明確化
- ③ ゲームや歌など活動に“目的”を持つ
- ④ 会話文に必要な表現の活用

カードゲームや物当てクイズ、シルエットクイズ、スリーヒントクイズを通して、

“What's this? / It's a ~. It's an ~.” の表現や多くの英語の単語に慣れ親しませていく。定着させるためにも「クイズ大会をするために、必要な表現は何か？」を意識させながら、自分自身の習熟の度合いもふりかえさせる。実際にクイズを作る段階では、クイズの内容をグループで話し合わせながら、出題者として必要な英語表現や解答者に向けての“ほめる”、“ヒントを出す”英語表現などを付け加えていくことも考えさせる。慣れ親しんだ英語表現をどの場面で、どのように用いるのかを考えさせることで、自分の思いをのせてコミュニケーションを楽しむことができるようにしたい。

(4) 単元の指導計画（全4時間）

| 時 | 目標と主な学習活動                                                                                        | 評価    |   |                                                         |
|---|--------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|---|---------------------------------------------------------|
|   |                                                                                                  | 評価の観点 |   | 評価規準                                                    |
|   |                                                                                                  | コ     | 慣 | 【観点】〔方法〕                                                |
| 1 | 様々な物の言い方から、言葉のおもしろさに気付くとともに、身の回りの語に慣れ親しむ。<br>○絵カードなどを見て、何を表しているか答える。<br>○ポインティングゲーム<br>○チャンツを歌う。 |       |   | ○<br>日本語と英語の類似点や相違点から、言葉の面白さに気付いている。【気】<br>〔観察、ふり返りシート〕 |
| 2 | ある物が何かを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。<br>○チャンツを歌う。<br>○ラッキーカードゲーム<br>○シルエットクイズ、漢字クイズなど                     |       | ○ | ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しんでいる。<br>【慣】〔観察〕               |
| 3 | ある物が何かを尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。<br>○チャンツを歌う。○ラッキーカードゲーム<br>○クイズ作り                                    |       | ○ | ある物が何かと尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しんでいる。<br>【慣】〔観察〕               |

|           |                                                                |   |  |  |                                             |
|-----------|----------------------------------------------------------------|---|--|--|---------------------------------------------|
| 4<br>(本時) | 積極的にある物が何かを尋ねたり, 答えたりしようとする。<br>○チャンツを歌う。○ラッキーカードゲーム<br>○クイズ大会 | ○ |  |  | ある物について積極的にそれが何かと尋ねたり, 答えたりしようとしている。【コ】〔観察〕 |
|-----------|----------------------------------------------------------------|---|--|--|---------------------------------------------|

(5) 本時の目標

ある物について積極的にそれが何かと尋ねたり, 答えたりしようとしている。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

(6) 準備物

大型テレビ, パソコン, デジタル教材, フラッシュカード, ワイヤレスマウス,  
ワークシート, ふり返しシート, 各グループのゲーム道具

(7) 本時の展開

|           | 児童の活動                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | 教師の支援, 指導上の留意点 ●評価〔方法〕                                                                                                                                                                |
|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 導入<br>15分 | 1. あいさつをする。<br>・ Hello.<br>・ How are you?<br>2. 単語の練習をする。<br>・ フラッシュカードを見て, 発音する。<br>3. チャンツをする【Let's Chant】P30<br>4. ラッキーカードゲームをする。<br>・ ペアにカードを見せて, 質問する。<br>相手が答える。交互に行う。                                                                                                                                                                                                                        | ・ 教師とあいさつをする。<br>・ 児童同士であいさつをする。<br>・ アイコンタクト, スマイル(表情), ジェスチャーを意識させるようにする。<br>・ 発音の違いに注意させる。<br>・ 尋ね方, 答え方の英語表現をリズムを使って復習する。<br>・ What's this?/It's a ~. (It's an ~.) の英語表現をペアで練習する。 |
| 展開<br>25分 | 5. 本時のめあてを確認する。<br><div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin: 10px auto; width: fit-content;">What's this? クイズ大会をしよう。</div> 6. クイズ大会をする。<br>・ デモンストレーションを見る。<br>・ 6グループ, 6種類のクイズで行う。<br>・ 前半組, 後半組に分かれる。<br>(約10分間ずつ)<br>A&B: Hello.<br>A: What's this? (クイズを示す)<br>B: It's a ~./It's an ~.<br>A: Good./Close. Here you are.<br>B: Thank you.<br>A&B: Good bye. | ・ 本時のめあてを提示する。<br>・ What's this? /It's a ~. It's an ~. の英語表現を積極的に使うようにさせる。<br>・ あいさつ表現, ほめる表現などを使えるようにする。<br>・ ワークシートを用意する。<br>●ある物について積極的にそれが何かと尋ねたり, 答えたりしようとしている。<br>〔観察〕          |
| まとめ<br>5分 | 7. ふり返し<br>・ ふり返しシートに記入する。<br>8. あいさつをする。<br>・ That's all for today. Good bye.                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | ・ ふり返しをワークシートに書かせる。<br>・ 時間があれば, 発表させ, 次につながるような声かけをする。<br>・ 児童のがんばり, 良かった点を伝える。                                                                                                      |

## 2. アンケート結果

|                                | 6 月   | 1 2 月 |                                                                                            |
|--------------------------------|-------|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 英語の授業は好きですか<br>(好き・どちらかといえば好き) | 8 1 % | 9 4 % | +13<br> |
| 英語で友だちと会話すること                  | 5 2 % | 8 8 % | +36<br> |

## 3. 分析

以上の実践では、「英語の授業が好き」についてはプラス 13 %、「友だちと会話することが好き」においてはプラス 36 %の結果が見られた。

単元ごとにコミュニケーション活動を明確なゴールとして設定しており、そのゴールに向けて様々な取り組みを行っている。授業の中では、あいさつ活動やペアでのカードゲーム・クイズ活動等を取り入れることで、英語を聞いたり、話したりする必然性を児童が持って活動している。また、日常の会話で使用する言葉やクラスルームイングリッシュ、ALTとの連携・活用を行い、確実な英語力の積み上げとなっている。それが児童の自信につながっていると考えられる。週 1 回の外国語活動を計画的に行う中で児童同士が話す場面を多く設定し、「アイコンタクト・スマイル・ジェスチャー」の合言葉を意識させながら会話できる環境づくりがなされていることも児童の意識の向上につながっていると考える。

## 4 研究のまとめ

以上のように、今年度は研究テーマ「コミュニケーションの楽しさをあじわうことができる授業のあり方を探る」ために、各小学校でクラスの実態に応じた授業実践を通して検証を行った。

小学校の外国語活動を見ると、『Hi, friends!』を進めていくだけの形で終わったり、ゲームや歌を行って終わったり、ALTに任せっきりの授業になりがちという流れも見られる。その結果、前に述べたような「ゲームだけが頭に残っている」、「何をやっているのかわからない」といった授業になってしまっているのではないかと考えられる。

そこで今回、コミュニケーションの楽しさをあじわうことができる授業を考える上で、研究部員が共通して行っていることに、「英語を話せる環境づくり」と「授業の必然性」が挙げられる。特に相手とコミュニケーションを行う場合においては、「何をしないといけないのか」や「なぜこの活動をしなければならないのか」という目的意識が大切になる。その方法を研究部員が、実践を通して検証してきた。

低学年では、子どもたちは「やりたい！」という思いとは裏腹に「話せない＝つらい」という気持ちを秘めていることを踏まえたうえで、最初はできなくても語彙や表現を繰り返し発音（＝言い慣れ）させることで、自信へとつなげていった。その自信が活動を通してじわじわと蓄積されていき、コミュニケーションへとつながっていくものとする。また、周りの環境設定も大切な要素である。担任が子どもの実態を考慮して学習計画からはずしていた“You are welcome”という表現について、学級だけでは全く使われなかった言葉が、他学年（高学年）との交流を通して頻繁に使われるようになった。お互いが活動自体への目的意識を持って取り組むことで、「伝えたい」、「使いたい」という純真な思い（意

欲)が相乗効果を起こした結果と考えられる。

以上の事を各学校に戻して考えた時、事例2のような環境が整っている学校ばかりではないことはいまでもない。特に現行の外国語活動では高学年での取り組みになっており、年齢的な特性を考えて、授業者の子どもたちの自信がないことに向けての取り組み方には大きな課題があると考えられる。

その課題解消へのヒントとなる取り組みが、高学年での実践に示されていると考えている。

効果がある実践の中では、言い慣れる・聞き慣れる方法として、普段の日常で使用する語彙・表現に触れる機会を増やすとともに消しゴムゲーム等の単純なコミュニケーションをとるゲームを頻繁に取り入れることで子どもの関心や意欲の向上を行っていた。また、身近な歌やフォニックスの資料を活用しながら、日常会話の中に簡単な英語を意識的に使用することで、英語に慣れる機会を多く持つように心がけていた。その結果、ALTの言葉が少しずつ聞き取れるようになったり、意欲へとつながる部分も見られた。また、あいさつや返事といった日常会話の中で使用する言葉やどの単元でも使える言葉(one more time等)を、教師から意識的に授業以外の場面でも使うような取り組みを行っている。そうすることで、子どもたちが英語を使うことに対して躊躇せず気軽に声をかけあう環境がつけられているということである。それが、友だち同士でもはずかしがらずにコミュニケーションを図ろうとする態度育成の素地づくりにつながっているといえる。

さらに、そのような環境を整えることと並行して、教材を活用しながらゴールを見据えた学習計画を提示したり、子どもに必要なことを考えさせたりすることで、子ども自身が目的意識を持って学習に臨むことができるように取り組ませている。そして、その目的に向かう過程において、ゲームやクイズ(聞き取りの練習)、歌やチャンツ(発音の練習)等をあくまでも手段として活用している。そうすることが、目的やねらいの達成につながっていくと考える。

今後、外国語活動の教科化に向け動き出している中、教師が抱く苦手意識をいかに払拭するのか、そのために何をおさえればよいのかをカリキュラムの作成等を通して明確にしながら、学校全体として環境を整備することが重要となる。ただ歌を歌う、ゲームをすることのくり返しで終わる外国語活動ではなく、児童が目的意識を持ち、意欲的に英語を話す場面が多く見られるような外国語活動を目指して、これからも研究を進めていきたい

## 5 おわりに

本年度は、①コミュニケーション力を培う外国語活動について、②教科化に向けたアクティブ・ラーニング型外国語活動の授業づくり、③小中の接続を見通したカリキュラムについての3点を課題として研究テーマを設定してきた。その中で、教科化を見据えて始めた今年度は①を中心に進めた。2年目は②・③に向けて進めていきたい。

ただ、①の活動を通して、子どもたちの「友だちと英語で話したい」、「もっと英語を知りたい」といった様子の変化が積極的にうかがわれるようになってきたのも事実である。今回の実践を通して、より必然性が感じられる題材設定を提供することで、さらに主体的に「話したい」気持ちから、そのために使いたい言葉を調べたり、友だちと協働的な活動を行ったりするように学習形態を広げていける可能性が含まれていると感じた。つまり、

外国語活動での効果的なアクティブ・ラーニング型の授業づくりを行うことへの道筋が見えてきたといってもよいのではないだろうか。

また、小中の接続を見通したカリキュラムについても、今回小中の研究部員でメンバーを構成し交流することで、お互いの校種間の学習内容やつながりを理解できていない現状があることを確認することができた。小学校でどのような語彙や表現、活動を行ってきたのか、中学校ではどのような学習につながっていくのかということを、それぞれが認識し、お互いの課題を把握する必要があることも実感した。その上でなめらかな接続が行われることをめざして、接続を見通したカリキュラム作成の意義も話し合い、考えることが出来たといえる。

来年度に向けて、さらにアクティブ・ラーニング型の授業を意識した学校内での授業の充実と、小中の接続を見通したカリキュラムの作成のための準備を進めていきたい。

#### <参考文献>

「小学校学習指導要領解説外国語活動編」 文部科学省 2008

「英語教育改善のための調査研究授業に関するアンケート調査」 結果について  
文部科学省 2010

「Hi, friends!①」「Hi, friends!②」 文部科学省 2012

「指導と評価」 日本教育評価研究会 2014

「小学校外国語活動のツボ」 直山 木綿子 教育出版 2014





## 活用力を育む授業構想に関する研究

－ メディア・リテラシーに焦点をあてて －

指導主事 井 上 雅 登  
研究員 打 越 香 代（園田南小）  
" 瀧 本 晋 作（園田北小）  
" 浅 野 尚 子（武庫庄小）  
" 逢 坂 賢 一（塚口中）

### 【内容の要約】

学習指導に有効となる評価指標の視点を重要視しながら、「写真を読む」「広告を読む」「ポスターを読む」などのメディア・リテラシーに焦点をあて、活用力を育む授業構想について研究を進めた。国語科の学習指導において、写真や絵などを題材として用い、学習者に文章を書かせることを試みた。具体的には、写真や絵などの非連続型テキストを介在させることによって学習者の内言を豊かにし、外言として表出することで表現活動につながるよう進めていく。そして、前年度に引き続き、評価指標を用い、教師の指導計画や指導内容を明確にすることで、学習者に対する手立てを講じることができ、その結果、なかなか文章が書けない、書くことに苦手意識をもっている学習者の書くことへの関心につながるとともに、成果物となるテキスト部分を評価していくことで表現が豊かになっていることが明らかになった。また、今回の研究において、実践者である教師がメディア・リテラシーを意識して取り組んだ結果、主体性・協働性につながるアクティブ・ラーニングの一端をなすものとなった。

キーワード： キーワード：メディア活用，評価指標，活用力，  
アクティブ・ラーニング，メディア・リテラシー

|     |              |    |
|-----|--------------|----|
| 1   | はじめに         | 77 |
| 2   | 研究の内容        | 77 |
| 3   | 実践事例および考察    | 78 |
| (1) | 実践事例および考察その1 | 78 |
| (2) | 実践事例および考察その2 | 81 |
| (3) | 実践事例および考察その3 | 84 |
| (4) | 実践事例および考察その4 | 88 |
| 4   | 研究のまとめ       | 91 |
| 5   | 終わりに         | 92 |



## 1 はじめに

『教育科学国語教育』（平成27年9月号）において、後藤顕一氏は、資質・能力育成に向けた授業づくりについて、「子供の課題意識とは無関係に、教師側から一方的に知識を与えたり、活用する場面や機会がないままに知識だけを覚え込ませたりする授業を超えて、実生活に生きてはたらく確かな国語の能力になるような取組をすることが求められる」とした上で、「文章に書かれている語句や素材等について読める（基礎力）、文章に即して文章の根底の問題を思考することができる（思考力）、文章に即して思考したものを基に根拠を明確にした上で自分のことばで表現できる（実践力）」が必要としている。<sup>\*1</sup>

そこで活用力向上部会では、昨年度に引き続き、これらの基礎力、思考力、実践力をとらえ活用力を向上させるための研究を進めた。ただし、今回の研究においては、その題材は文章ではなく、メディアである。学習者は文字テキストである文章を媒体として読むのではなく、非連続型テキストであるメディアを読むことになる。

## 2 研究の内容

### (1) 研究のテーマ

昨年度、一年目にあたる研究は、子どもの活用力を向上させるために、単元のデザインと評価指標に着目した授業実践を行い、子どもの成果物を分析し、実践内容を考察した。その結果、評価指標により教師の指導計画や指導内容が明確になり、子どもの思考と表現の一体化を図りやすくなることが確認された。

そして、二年目の本研究では、学習指導に有効となる評価指標の視点を重要視しながら、「写真を読む」「広告を読む」「ポスターを読む」などのメディア・リテラシーに焦点をあて、活用力を育む授業構想について研究を進めた。メディア・リテラシーとは、批判的（クリティカル）にメディアによって伝達されている内容を理解したり、メディアを活用して表現したりする能力である。批判的（クリティカル）といっても、対象物を常に批判の目で見るということではなく、「それは本当なのか？」「なぜ、そうなのか？」という「心構え」をもつことである。世間に数多くの情報があふれている中で、自分が必要な情報を取捨選択・吟味するための心構えが不可欠となる。

このことに関連して、本部会の専任講師である兵庫教育大学大学院准教授の羽田 潤氏は、「我が国の国語科教育に欠けているのは、教材を客観視する視点に子どもをおく学習方法のあり方ではないだろうか」とした上で、「客観的な視座がなければ、情報を主体的・批判的に見つめることも難しい。子どもをとりまく情報は、親や社会の監視の目が行き届かない状況にある。しかし、情報を遮断する方法を手繰るのではなく、情報にいかに向き合うのかを考えることの方が得策であり、そのためには、言語外メディアの読みを国語科に導入することで、情報の読み方を学ばせることが効果的である」と述べている。<sup>\*2</sup>

「国語科教育においてメディアを活用して表現する能力を高める。」実際には、国語科学習指導において、写真や絵を題材として用い、視る視点を与え、それらを学習者に見せることで、「この動物はどうして同じ方向を見ているのだろうか？」「上と下とが逆さまに建っている家があるが本当なのか？」というクリティカルな心構えを持ちながら、「書く」という学習活動に主体的に取り組み、文章として完成させる。メディア・リテラシーの

概念としてクリティカルな心構えを意識的にもち、対象物と対峙できるようになることが今回の研究のテーマである。

## (2) 研究テーマの設定理由

羽田氏は、言語活動における写真の活用について、次のように述べている。

「写真を活用した言語活動を豊かにするには、写真のメディア特性の理解とともに、写真の読解方法を学習者が会得しておくことが重要である。レイアウト、色、ポーズ、表情といった表現上の読解観点だけでなく、どのような距離、角度、位置から撮られたかを推測する力も読解には役に立つ。(引用者中略) 与えられた制限の中で、例えばどのような写真であれば学習者の意識を揺さぶることが出来るのか、言葉との組み合わせで印象が変わる写真とはどういうものなのかをより吟味し、一般化し、教材としての写真には、どのような要素が必要なのかを全ての教師が理解しておく必要があるだろう。」<sup>\*2</sup>

ここであえて、メディアを活用するということについて、例えば、「内言」を豊かにし、ことばが出やすいような写真などの言語外メディアを学習者に提示してみると、それまで、ことばが表出されなかった学習者が、写真をもとに想像を広げ、そこから言葉を連想し、書き出していくことができる状況になると想定される。

本研究の授業実践の中では、「書く」ことに苦手意識をもっている、また「書く」ことが難しいと感じている学習者に対しても、ことばを表出させ、記述量が増えていくような手立てを講じている。実践者としては、「アクティブ・ラーニング」ということばを意識して、授業実践を進めてはいないが、授業内容そのものを振り返った時に、十分にアクティブ・ラーニングの様式をたどるものであった。

## (3) 研究の方法

1. 成果物を評価指標に照らして分析し、実践内容を考察する。
2. 授業実践から見出した成果や改善点をもとに授業改善への手立てを探る。

## (4) 評価について

学習者の学習活動を考えていく上で、学習活動の入り口であるインプットの部分にメディア・リテラシーに関する題材を持ってきた後に、アウトプットの部分で、例えばリーフレットなどの成果物を作ることにする。ただし、成果物をうまく作るということに主眼をおくのではなく、題材を与える前段階と与えた後の段階とを比較して、学習者の表現がどれだけ豊かになったかという点において、特にテキスト部分を評価していく。

実際には、学習者の実態に応じた題材を用意し、写真や絵を見せることで、学習者自らの考えなどをどれだけ書けるのかという学習活動の流れになっている。介在した媒体となる写真や絵が、内言としての学習者のことばを引き出したことになる。

## 3 実践事例および考察

本研究において着目した単元のデザインと評価指標を中心に実践事例をあげ、考察する。

### (1) 実践事例および考察その1 (園田南小学校 第6学年 国語)

本実践については、単元デザインに重点をおいて実践事例をあげ、考察する。

1. 単元名

「園田南名画展を開こう！ ～お気に入りの名画の解説文を読み合おう～」

(教材名 『鳥獣戯画』を読む) / 「この絵、私はこう見る」)

## 2. 単元目標

- (1) 絵画に興味を持ち、自分なりに絵から読み取ったことを伝えることができる。
- (2) 事実と感想、意見などを区別するとともに、読み取ったことを整理して書くことができる。
- (3) 表現を工夫して解説文を書くことができる。

## 3. 単元のデザイン (『鳥獣戯画』を読む全12時間(書き出す活動3回)+写真4回)

- (1) 写真①【多くの人物が列車にしがみついている】を見て、分かったことや感じたことなどを書く。
- (2) 写真②【兵士の横に子どもが立っている】を見て、分かったことや感じたことなどを書く。(書いた後、意見交流)
- (3) 写真③【ラグビーの試合 選手がタックルしている】を見て、分かったことや感じたことなどを書く。(書いた後、意見交流)
- (4) 『鳥獣戯画』を読む この絵、私はこう見る。

| 次 | 時                | 主な学習活動                                                                                                                                                            | 指導上の留意点                                                                                                             | 評価                                         |
|---|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------|
| 1 | 1                | 学習課題を知り、学習計画をたてる。                                                                                                                                                 |                                                                                                                     |                                            |
|   |                  | <ul style="list-style-type: none"><li>・鳥獣戯画を見て、分かったことや感じたことなどを書き出す。</li><li>写真④【鳥獣戯画】</li><li>・『鳥獣戯画』を読むを読み、筆者の見方や感じ方と比較する。</li><li>・学習計画をたて、学習の見通しを持つ。</li></ul> | <ul style="list-style-type: none"><li>・絵について自分が読み取ったことや感じたことを交流させ、筆者の感じ方との違いに気付かせる。</li><li>・学習の見通しを持たせる。</li></ul> | 【関】絵を見て分かったことや感じたこと<br>を書こうとしている。<br>(ノート) |
|   |                  | 学習課題：お気に入りの名画の解説文を書こう！                                                                                                                                            |                                                                                                                     |                                            |
| 2 | 2<br>3<br>4<br>5 | 教科書文を読み、解説文の書き方を学ぶ。                                                                                                                                               |                                                                                                                     |                                            |
|   |                  | <ul style="list-style-type: none"><li>・解説文の特徴を知る。</li></ul>                                                                                                       | <ul style="list-style-type: none"><li>・物語文と解説文とを比べ読みさせる。</li></ul>                                                  | 【読】筆者の意図と表現の工夫との関連について考えている。<br>(ノート)      |
|   |                  | <ul style="list-style-type: none"><li>・筆者の書き方の工夫を知る。</li></ul>                                                                                                    | <ul style="list-style-type: none"><li>・教科書文と教科書を手直しした文とを比べ読みさせる。</li><li>・絵に出てくる生き物の何をどのように注目したか考えさせる。</li></ul>    |                                            |
|   |                  | <ul style="list-style-type: none"><li>・筆者の評価が表れている表現を見つける。</li></ul>                                                                                              | <ul style="list-style-type: none"><li>・事実と意見とを区別させる。</li></ul>                                                      | 【書】絵から読み取っ                                 |
|   |                  | <ul style="list-style-type: none"><li>・鳥獣戯画の教科書に</li></ul>                                                                                                        | <ul style="list-style-type: none"><li>・絵について自分が読み取った</li></ul>                                                      |                                            |

|   |    |                                                            |                                                                    |                            |
|---|----|------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|----------------------------|
|   |    | 載っていない部分の絵を見て分かったことや感じたことなどを書き出す。<br>写真⑤【鳥獣戯画】<br>・解説文を書く。 | ことや感じたことを交流させ、見方を広げる。<br><br>・400字程度の解説文例を示す。<br>・推敲の観点をもとに、助言させる。 | たことを整理している。(ノート)           |
|   | 6  |                                                            |                                                                    |                            |
|   | 7  | ・班で文章表現について助言しあい、書き直す。                                     |                                                                    |                            |
|   |    | お気に入りの名画を選び、解説文書く。                                         |                                                                    |                            |
|   | 8  | ・お気に入りの絵を決め、分かったことや感じたことなどを書き出す。写真⑥【風神雷神などの名画】             | ・同じ絵を選んだ児童同士で交流させる。                                                | 【書】絵から読み取ったことを整理している。(ノート) |
| 3 | 9  | ・解説文を下書きする。                                                | ・推敲の観点をもとに、助言させる。                                                  | 【書】表現を工夫して解説文を書いている。(原稿)   |
|   | 10 | ・班で文章表現について助言しあい、書き直す。                                     |                                                                    |                            |
|   | 11 | ・解説文を完成させる。                                                |                                                                    |                            |
|   | 12 | ・学年で交流する<br>・学習を振り返る。                                      | ・園田南名画展を開く<br>・単元の目標に沿って振り返らせる。                                    |                            |

- (5) 写真⑦【ラグビーの試合 ラグビーボールを持って走る選手】を見て、分かったことや感じたことなどを書く。

#### 4. 成果物《解説文》の評価指標

##### (1) 写真

| レベル0           | レベル1     | レベル2            | レベル3           |
|----------------|----------|-----------------|----------------|
| 書くことを何も見つけていない | 単語で書いている | 主語と述語のある文で書いている | 詳しく20字以上で書いている |

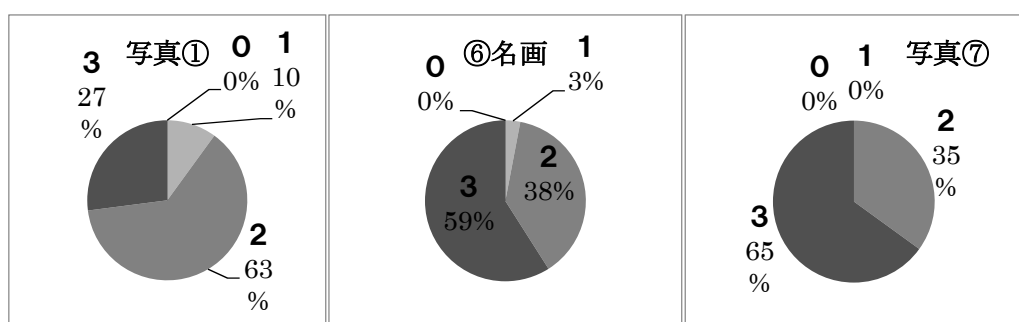
##### (2) 名画

|      | レベル0                    | レベル1                 | レベル2               | レベル3 |
|------|-------------------------|----------------------|--------------------|------|
| 評価指標 | (1) 絵から読み取ったことを全く書いていない | (1) 絵から読み取ったことを書いている |                    |      |
|      |                         | (2) 評価語彙を使って説明していない  | (2) 評価語彙を使って説明している |      |

|      |                                                       |  |                         |                        |
|------|-------------------------------------------------------|--|-------------------------|------------------------|
|      |                                                       |  | (3)筆者の表現技法<br>を取り入れていない | (3)筆者の表現技法<br>を取り入れている |
| 指導時間 | (1)第1次 1時, 第2次 5時, 第3次 8時<br>(2)第2次 4時<br>(3)第2次 2・3時 |  |                         |                        |

## 5. 分析・まとめ

| 学習者が写真や絵から読み取ったことを表現した内容における観点数を平均した数字 |     |     |       |       |     |     |
|----------------------------------------|-----|-----|-------|-------|-----|-----|
| ①写真                                    | ②写真 | ③写真 | ④鳥獣戯画 | ⑤鳥獣戯画 | ⑥名画 | ⑦写真 |
| 5                                      | 5   | 7   | 7.3   | 8.2   | 9   | 9.3 |



名画の解説文を書くためには、まずは絵から様々なことを読み取る必要がある。そこで、鳥獣戯画の学習に入る前に、写真①を見て読み取ったことを書き出す活動を行った。すると、上の表やグラフから、観点数が少なく、文章で表現できる児童が少なかったことが分かる。これは、観点が分からず、写真のどの部分に目を向け、どう書き出したらよいか分からない児童が多かったからだと考える。そこで、写真②では、書き出した後に、意見を交流させた。すると、細部にまで目を向け、より具体的に表現する児童が増え、写真③では観点数が増えた。そして、鳥獣戯画では、初めて絵を見て読み取ったことを書き出す活動を行い、ここでも友達と自分の意見を交流することで、読み取る幅が広がり、筆者と比べることで表現方法も工夫できるようになってきた。写真や鳥獣戯画、名画を読み取る活動を通して、観点が増え、より具体的に表現できるようになったことが、写真⑦の活動の結果から分かる。文章を書くことが苦手な児童でも、観点や書き方がはっきりしたことで、名画の解説文を書くときには、ほぼ1人で取り組むことができていた。教科書教材で観点や書き方を学ぶことも必要だが、児童同士で意見を交流する機会も必要だと考える。

### (2) 実践事例および考察その2 (武庫庄小学校 第4学年 国語)

本実践については、単元デザインに重点をおいて実践事例をあげ、考察する。

#### 1. 単元名

「クラブ活動リーフレットを作ろう」  
(教材名「アップとルーズで伝える」)

#### 2. 単元目標

- ・相手や目的に応じて、書く上で必要な事柄を集めること

- ・書きたいことの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと

### 3. 単元のデザイン

本実践は、4年3組（男子18名、女子16名、計34名）の児童を対象に行った。本学級には書く活動への苦手意識を持つ児童が多く、一人ではなかなか取り組むことのできない児童もいる。このような児童に尋ねると「何を書けばよいのかわからない」といい、書く材料を思いつけず手が止まってしまっていたり、文章としては長くても、内容を見ると同じ話題を繰り返していたりする。そこで、国語以外の教科でも書く活動を多く取り入れ、その都度、書くべき事やら文章の量などを具体的に指示することで、取り組みやすくすることを心がけている。そして「書くことが思いつかない」という児童に対し、まずは書くことができる内容を増やし、その中から重要なものを選んで書く力をつけさせることを目標として年間をとおして取り組む。具体的には、まず、写真などのメディア素材を題材に、そこから気づくことや思うことをなるべく多く書き出していく活動を1学期から2学期にかけて行う。次に、その中から記述に必要なものを選んで書く活動に、2学期末から3学期にかけて取り組んでいく。

「アップとルーズで伝える」は、テレビ番組制作者である筆者が「アップ」と「ルーズ」という撮影手法の違いを踏まえつつ「受け手」の知りたいこと、「送り手」の伝えたいことに合わせて映像素材を取捨選択していることを説明する文章である。「段落どうしの関係をとらえ、説明のしかたを考えよう」と単元目標にある通り、児童はこの単元を通じて、段落どうしを対比させたり、要所でまとめの段落をはさんだりする文章構成の工夫について考え、また、アップやルーズという専門用語の解説や、文章に対応した写真などが、読者の理解を助けるために文章中に意図的に配置されていることにも気づく。また「送り手」である自分の伝えたいことばかりを考えるのではなく、「受け手」の存在を意識することにより、続く「リーフレットを作ろう」での書く活動を深めていくことができるだろう。

「リーフレットを作ろう」では、本校では4年生ではクラブ活動がないため校内の活動には限定せず、自分が今がんばっていることを紹介するリーフレットを作る。この活動では第一に自分の伝えたいことを明確にして文章の構想を立てて書くこと、第二に、各自で写真を用意して書くことになる。児童は一学期の「新聞を作ろう」の学習などから、図表や写真を説明に使うことの良さを学んでいる。また、国語以外の教科でも校内のタブレットやデジタルカメラを用いて、自分たちで目的に応じた題材や構図の写真を撮影し、学習に使うことを経験してきている。本教材では「アップとルーズで伝える」で学んだことを活かし、図や写真に含まれている情報を吟味して、同じ題材の写真や映像であってもより効果的なものを使うようにする。あらかじめ文章の構想や撮影の目的を立て、写真の撮影は冬休み中に行う。三学期にリーフレットを作成し、友達と読み合って交流する。

#### (1) プレテスト

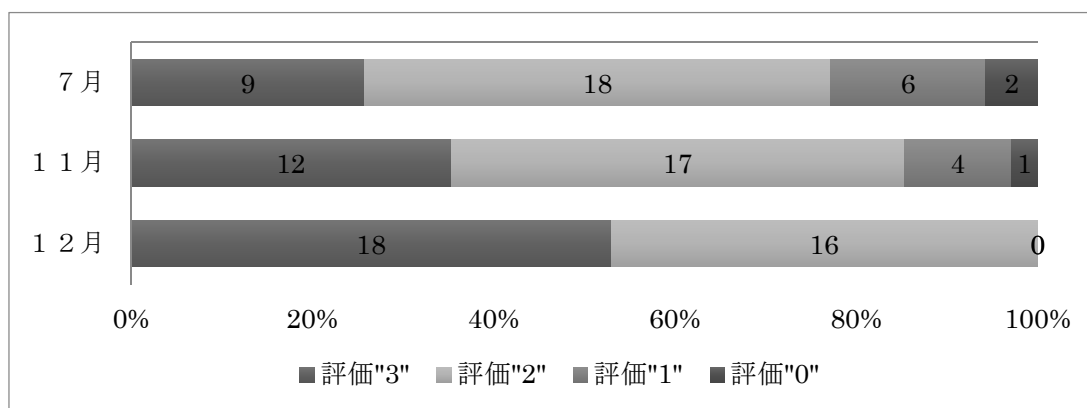
「リーフレットを作ろう」の単元の前後に、教師が用意した写真を提示し、その写真について読み取れることをなるべく多く書き出すという活動を3回に渡って行った。この活動を「プレテスト」とした。写真を提示することで、どれだけ児童のことばを引き出せるかを鑑み、提示する時期も、1回目は1学期（7月）、2回目は単元の学習



に入る前（11月）、3回目は学習の終わり（12月）とした。いずれも5分～10分の活動で、評価は3回とも同一の基準で行い、写真の中で児童が着目し記述した要素（観点）の数で行った。その結果、3回目までには何も書けないという児童はほぼいなくなり、多くの児童が1枚の写真をいくつかの観点で記述できるようになった。また、記述の総量も増えた。

| 評価    | レベル0 | レベル1 | レベル2 | レベル3 |
|-------|------|------|------|------|
| 記述の観点 | 書けない | 1～2個 | 3～5個 | 6個以上 |

【グラフ① プレテストの評価】



(2) 学習展開例（「アップとルーズで伝える」7／8時間）

| 学習活動                                                                                       | 指導上の留意点・注意点                                                   | 評価・評価の方法                                                                                                 |
|--------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ①教師が用意したリーフレットの構想メモを例にして、本時のめあてを確認する。                                                      | ・リーフレットを作成すること、冬休みに写真を用意することを伝え、どんな写真が良い写真かを考えさせる。            |                                                                                                          |
| 先生の「伝えたいこと」に合わせて、リーフレットに使う写真をすいせんしよう。                                                      |                                                               |                                                                                                          |
| ②4枚の写真がそれぞれ伝えていることをワークシートに書き出す。<br>③リーフレットに使う写真を2枚選び、理由をつけてすいせん文を書く。<br>④意見を交流する。<br>⑤次時予告 | ・4枚の写真を掲示する。<br>写真は2枚ずつ2組、アップとルーズとする。<br>(2)で書き出したことを根拠にして書く。 | ・写真の伝えている情報を読み取って、書き出すことができる。【書】→評価指標(1)<br>・写真の伝えている情報を根拠にして書くことができる。【書】→評価指標(2)<br>・根拠を持って話すことができる。【話】 |

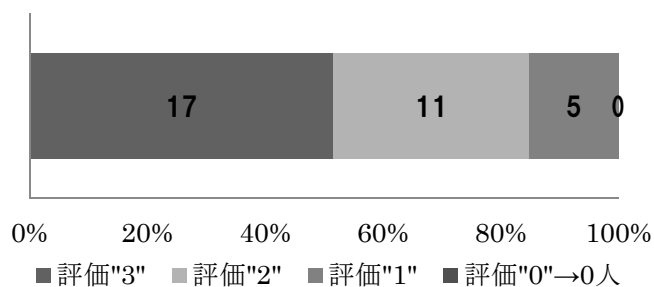
#### 4. 実践の考察

|    | レベル0                         | レベル1                           | レベル2                              | レベル3                      |
|----|------------------------------|--------------------------------|-----------------------------------|---------------------------|
| 評価 | (1) 写真を見てわかったことがほとんど書かれていない。 | (1) 2～3枚の写真について、わかることを記述している。  | (1) 4枚の写真全てについて、写真からわかることを記述している。 |                           |
| 指標 | (2) 写真からわかることを根拠に推薦文を書けていない。 | (2) 根拠を持って書いているが、推薦文と根拠にずれがある。 | (2) 1～2個の根拠を持って推薦文を書いている。         | (2) 3つ以上の根拠を持って推薦文を書いている。 |
| 標  | (3) 文法に誤りがあり、意味がわからない。       | (3) 意味はわかるが、文法上の誤りがある。         | (3) 正しい文章で書くことができる。               |                           |

#### 5. 今後の課題

評価はワークシートをもとに行った。何も書けないという児童はおらず、多くの児童が根拠として適切なことがらを使って、自分の考えを書くことができた。

##### 【グラフ② 評価】



本実践の最終的な評価は三学期に行うリーフレットの評価を踏まえて行うことになるが、書くことが苦手な児童にとっても、写真という素材はおもしろく、書く活動の練習として取り入れやすいものであった。また、まず取り組みやすい「書く材料を探す」というステップを踏むことで、後半の活動にも自力で取り組むことができるようになった。書く活動への抵抗感がかなり改善されてきたので、引き続き、書く材料をもとにした文章構成を中心に実践を進めていきたい。

#### (3) 実践事例および考察その3 (園田北小学校 第6学年 国語)

本実践では、評価指標に基づき、成果物への評価に重点をおいて実践事例をあげ、考察する。

##### 1. 単元名

「高畑さんのものの見方や感じ方を学んで、自分の3D名画の鑑賞文を書こう」  
(教材名「教材名『鳥獣戯画』を読む」／「この絵、私はこう見る」)

##### 2. 単元目標

- ・絵と文章との関係から筆者の考え方をとらえ、自分の考えを明確にしながら読むことができる。(読(1)ウ)
- ・絵から感じたことの中から書くことを決め、全体を見通して事柄を整理することが

できる。(書(1)ウ)

・表現の効果を確かめたり工夫したりして書くことができる。(書(1)オ, 伝国(1)イ(オ))

### 3. 単元のデザイン

本学級の児童は、「書くこと」に関して苦手意識をもっている子が多い。特に教師から書き方を指定されない自由記述の場合は、何を書けばいいのか分からず、鉛筆を持ったまま動きが止まっている子がよく見られた。そこで、2学期からは朝の会などの1分間スピーチで、くま手図やボーン図などのシンキングツールを使用して、発表原稿を書く活動を取り入れるようにした。この活動では、子どもたちは頭の中にある考えをワークシート上の手順に沿って表出させることができるため、苦手意識をもたずに取り組むことができていた。また、国語科の指導としては、1学期の「学級討論会をしよう」で一つの意見を肯定側と否定側の両面から考える活動を行った。2学期の「意見を聞き合って考えを深め、意見文を書こう」では、自分の考えを肯定・否定の両面から捉え、意見文を書く活動を行った。この際、付箋に自分の書きたいことを記述し、構成表のワークシートに並べて貼って、文章全体の構成を考える活動を行った。

本単元で使用する教材『『鳥獣戯画』を読む』は、アニメーション映画監督の高畑勲さんが小学生向けに書いた『鳥獣戯画』の解説文である。プロフェッショナルの絵(絵巻物)の見方や感じ方、そして文章表現の工夫を学ぶことのできる教材だといえる。これに続く「この絵、私はこう見る」は、絵画の鑑賞文を書くために必要な観点の見つけ方、文章の書き方などを整理した教材である。これら2つの教材は、読む活動から書く活動へと子どもたちの関心を保ったまま結び付けやすい配置になっており、効果的な言語活動を意図することに適している。また、芸術作品に触れ、鑑賞文を書くという活動は、図画工作や音楽といった他教科でも必要となる言語力を育むことにつながる。

指導にあたっては、絵画などを「見る」ための観点を増やすために、事前にいろいろな写真や絵画を「見る」練習を行ってきた。具体的には、朝の学習タイムなどで、子どもたちに大型ディスプレイで5分間同じ写真を見せて、「気がついたこと」をくま手図に書き出すという活動を、本単元に入るまでに4回行ってきた。ほとんどの子どもが回を重ねるごとに、写真や絵を「見る」観点が増え、一つずつの観点についての記述量が増えてきた。

本単元の第一次では、「見る」練習で行ってきた方法で『鳥獣戯画』の一場面を見て、自分たちがくま手図に書き出したことと高畑さんの書いた文章を見比べる活動から始める。そこから、「高畑さんのものの見方や感じ方を学んで、自分の3D名画の鑑賞文を書こう」という学習課題を設定し、学習計画を立てる。第二次では、『『鳥獣戯画』を読む』を読んで、高畑さんのものの見方や感じたこと、文章表現のくふうなどを読み取り、自分たちの見方や感じ方と比べながら、「自分ならどう読むのか」を考えさせる。そして、図工展で各自が模写の題材とした名画を改めて鑑賞し、自分たちの鑑賞文を書く活動を行う。最後の第三次では、自分たちの書いた鑑賞文をPCを使いスライドにし、友だちと読み合って交流する。

指導計画（全 12 時間）

| 次   | 時                                                                    | 学習活動                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          | 指導上の留意点                                                                                                                                                                                                | 評価規準と評価方法                                                                                                                                                  |
|-----|----------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第一次 | 1                                                                    | ①鳥獣戯画の絵を見て、気がついたことや感じたことを「くま手図」に書き出す。【くま手図①】<br>②同じ絵を見た高畑さんの文章を読み、自分の見方や感じ方との違いを比較する。<br>③学習計画「高畑さんのものの見方や感じ方を学んで、自分の3D名画の鑑賞文を書こう」を設定し、学習計画を立てる。【学習計画表】                                                                                                                                                                                                                                       | ・『鳥獣戯画』を読むから、子どもたちが見た絵の説明をしている部分を抽出して比較させる。<br>・高畑さんの作品を紹介し、興味を高める。                                                                                                                                    | 【関】絵を見て気がついたことや感じたことを書こうとしている。<br>【くま手図①の分析】                                                                                                               |
|     | 1<br>～<br>3<br><br>4<br><br>5<br>～<br>6<br><br>7<br>～<br>9<br><br>10 | ④『鳥獣戯画』を読むを読み、筆者のものの見方や感じ方をとらえる。<br>⑤筆者のものの見方や感じ方と比べながら、自分の考えをまとめる。<br>⑥高畑さんの見方や感じ方を整理して、自分たちで絵を見る時の観点を確認する。<br>⑦「この絵、私はこう見る」の P.148にある絵を見て、気がついたことや感じたことを「くま手図」に書き出す。【くま手図②】<br>⑧教師が作った鑑賞文を参考にし、鑑賞文の構成を考える。【原稿用紙】<br>⑨自分たちで鑑賞文を書き、友だちの鑑賞文を読み合う。<br>⑩自分の3D名画について、気がついたことや感じたことを「くま手図」に書き出す。【くま手図③】<br>⑪構成を考えながら、鑑賞文を下書きしPCで打ち込む。【下書き用原稿用紙】<br>⑫書いた鑑賞文を推敲し合い、オリジナルの絵と鑑賞文をまとめたスライドを作る。【発表用スライド】 | ・自分たちの鑑賞文に活用する手法を考えながら、読み取るように意識させる。<br>・教材から読み取る内容を「見方」「感じ方」「表現技法」の3つに大別し、鑑賞文を書く際のポイントとする。<br><br>・300字程度の鑑賞文例を示す。<br>・まずは全員同じ絵（P.148）の鑑賞文を書く練習をする。<br><br>・PCで打ち込む前に推敲させる。<br>・チェックシートで推敲の観点を明確にさせる。 | 【読】筆者の絵の見方や感じ方を的確に捉え、自分ならどう見るのか考えている。<br>【発言やノート観察】<br><br>【書】絵から読み取ったことを整理している。<br>【くま手図の分析】<br>【書】表現を工夫して鑑賞文を書いている。<br>【言】表現技法を正しく使っている。<br>【発表用スライドの分析】 |
| 第三次 | 1                                                                    | ⑬友だちの作った発表用スライドをPCで読み合い、工夫している点や意見や感想を交流する。【評価シート】<br>⑭学習してきたことをふりかえり、絵や写真を見る時の観点や、文章を書くためのくふうについて自分の言葉でまとめる。                                                                                                                                                                                                                                                                                 | ・タブレットPC上で読み合うために、無線LAN環境を構築しておく。                                                                                                                                                                      | 【書】鑑賞文を読み合い、表現の工夫について学んだことを整理している。<br>【評価シートの分析】                                                                                                           |

5. 成果物《鑑賞文》の評価指標

|      | レベル0                       | レベル1                                 | レベル2                                   | レベル3                                   |
|------|----------------------------|--------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------|
| 評価指標 | (1) 絵を見てわかったことが、全く書かれていない。 | (1) 絵について書いているが、どの部分に着目しているのかが分からない。 | (1) 絵の中で注目した部分について、1～2個の観点を示しながら書いている。 | (1) 絵の中で注目した部分について、3個以上の観点を示しながら書いている。 |

|            |                                   |                                   |                                     |                                     |
|------------|-----------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------|-------------------------------------|
|            | (2) 作品から感じたことを，説明できていない。          | (2) 作品について書いているが，評価語彙を使って説明していない。 | (2) 作品から感じたことを，1～2個の評価語彙を使って説明している。 | (2) 作品から感じたことを，3個以上の評価語彙を使って説明している。 |
|            | (3) 誤った文法で，文章の意味が理解できない。          | (3) 高畑さんの表現技法を取り入れることができていない。     | (3) 高畑さんの表現技法を1つだけ取り入れて，文章を構成している。  | (3) 高畑さんの表現技法を2つ以上取り入れて，文章を構成している。  |
|            |                                   | (4) 文章の内容は理解できるが，文法上の間違いがいくつかある。  | (4) 文法上の間違いがなく，文章の内容もしっかりと理解できる。    |                                     |
| 時 指<br>間 導 | (1)～(3)第二次 1～8 時<br>(4)第二次 9～10 時 |                                   |                                     |                                     |

## 6. 実践の考察

(1) 成果物《鑑賞文》から

前項の評価指標の4つの観点ごとに到達度を評価すると以下のようになった。

( ) は人数

| 観点 \ レベル  | レベル 0    | レベル 1    | レベル 2      | レベル 3      |
|-----------|----------|----------|------------|------------|
| ①絵を「見る」観点 | 0% (0)   | 0% (0)   | 19.0% (4)  | 81.0% (17) |
| ②評価語彙     | 0% (0)   | 4.8% (1) | 33.3% (7)  | 61.9% (13) |
| ③表現技法     | 0% (0)   | 0% (0)   | 23.8% (5)  | 76.2% (16) |
| ④文法・表記事項  | 9.5% (2) |          | 90.5% (19) |            |

①は絵のどういうところに着目できるかを評価したもので、8割を超える子どもが3つ以上の観点を含んで文章を書けていた。ただ、②で見た絵を評価する語彙については、①よりも書けている子どもが少なかった。絵を「どう見るか（見方）」より「どう感じるか（感じ方）」の指導が十分でなかったことが推測される。

③の表現技法は、体言止めや比喩、問いかけ、呼びかけといった技法に関する評価で、結果的に全員1つは使えていたものの、2つ以上使うという意識付けが甘かった。

④の表記等に関する部分では、今回は手書きしたものを PC で打ち直し、その後さらに友だち同士で推敲するという活動を取り入れたため、9 割を超える子どもが及第点のレベルに達していた。

## (2) モジュール学習（事前・事後指導）について

[illegible][illegible]

本単元に入る前から「見る」観点を増やすために、大型モニターに映された写真や絵を見て気が付いたことや感じたことを「くま手図」に書かせるモジュール学習を行ってきた。本単元の中および、事後に同じ学習活動を行った回数は以下の通り。

| 7 月末<br>パイロット調査 | 9/17<br>モジュール① | 9/28<br>モジュール② | 10/21<br>モジュール③ | 10/27<br>本単元① | 11/5<br>本単元②    | 11/10<br>本単元③ | 11/28<br>モジュール④ |
|-----------------|----------------|----------------|-----------------|---------------|-----------------|---------------|-----------------|
| 【写真】<br>中国のプール  | 【写真】<br>大雨の街   | 【写真】<br>逆さの家   | 【写真】<br>少年と兵士   | 【絵】<br>鳥獣戯画   | 【絵】<br>猿のいる熱帯の森 | 【絵】<br>各自の作品  | 【写真】<br>大雨の街    |

「くま手図」に書かせる際には「写真や絵を見て、気が付いたことをできるだけたくさん書きましょう」という指示に加えて、以下のようなループリックを示して、教師が評価したものを毎回子どもたちに返すようにした。

#### ☆書き方ループリック

- S：書きたいことをくわしく、20 字以上で書いている。
- ◎：書きたいことを主語と述語のある文にして書いている。
- ：書くことは見つけているが、単語で書いている。
- △：書くことを、何も見つけられない。

モジュール学習を始めた直後(9/17)と単元開始時(10/27)、および単元開始後(11/28)の3つのクラス平均(21 名)を比較してみると以下のようになった。

|                | S   | ◎   | ○   | 観点総数 |
|----------------|-----|-----|-----|------|
| モジュール① (9/17)  | 1.7 | 4.1 | 0.1 | 6    |
| 本単元① (10/27)   | 4.1 | 3.8 | 0.1 | 8    |
| モジュール④ (10/27) | 4   | 3.8 | 0.1 | 7.9  |

※モジュール①と④では同じ写真を使用している。

モジュール開始直後に比べると、本単元に入るころには5 分間で子どもたちが写真や絵を見て気が付いたことを書く観点が増えていることがわかる。(観点総数：6→8) また、その際に20 字以上の文でくわしく書ける子も増えていることがわかった。(S 評価：1.7→4.1) もちろん、これは写真や絵の含む情報量や書きやすさなどにも左右される。しかし、同じ写真を使用しているモジュール①と④の違いを見ると、観点数が増えている(観点総数：6→7.9)だけでなく、一つ一つの観点について詳しく書ける力(S 評価：1.7→4)が育っているといえよう。

#### (3) 今後の課題

今回はモジュール学習で「見る」観点を増やす活動を行ったことで、写真や絵を見て、自分の考えを書くという単元のゴールが達成しやすくなったように感じる。一方で成果物である鑑賞文の評価指標からは、「どう見るか(見方)」だけでなく「どう感じるか(感じ方)」に関する指導をどうすべきなのかという課題が見えてきた。今後は写真や絵などを見て、自分の感じ方をきちんと言語化し、他者と交流するなどして、より高度で批判的なメディア・リテラシーの育成に繋がる指導方法を考えていきたい。

#### (4) 実践事例および考察その4 (塚口中学校 第3 学年 国語)

本実践では、複数の写真やロゴマークを比較させることや、ポスターを観察し特徴をとらえ、その特徴について書き出させることをとおして、生徒の学習意欲を高め、

書くことへの関心につなげている。

1. 単元名

「書く [論証・説得]」

(教材名「観察・分析して論じよう」批評文) 新しい国語 3年 東京書籍

2. 単元目標

- (1) 批評の対象について、観察・分析したり、比較したりして、自分なりの判断を下すことができる。
- (2) 対象物に対して観点を決めて、観察・分析を行なうことの重要性を認識することができる。

3. 単元のデザイン (全3回 1回目 50分 2,3回目各 25分)

|   | 学習者の活動                                                                                                                                                             | 指導者の働きかけと留意点                                                                                                                                                                                                       | 評 価                                                                                                                                                                                   |
|---|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | ①学習目標を確認する。<br>②二枚の写真を見比べさせる。(阿蘇の風景)<br>③2つのロゴマークを見比べる。(どちらが優れているか)<br>↑観点の提示<br>④プリントを用いて、それぞれのロゴマークの特徴を書き出す。<br>⑤座席を班の形に変えさせ、お互いに教えあう。<br>⑥班ごとにどちらが優れているかの発表をする。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・従来の学習とは違うことを説明する。</li> <li>・プロジェクターで二つのロゴマークを提示する。</li> <li>・思いついたことをすぐに口にせず、我慢するように注意する。</li> <li>・どのような表現効果があるのかを考えさせる。</li> <li>・他の人から気付かされたものについては赤ペンで記入する。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・的確に対象物を見てとることができる。</li> <li>・落ち着いてじっくりと対象物を観察することができる。</li> <li>・活発に自分の意見を言い、また、しっかりと他者の意見を聞くことができる。</li> <li>・根拠に基づいて、判断することができる。</li> </ul> |
| 2 | ⑦「マイボトル」とは何か理解する。<br>⑧「マイボトル」の利用を勧める「ポスターA」と「ポスターB」を観察する。<br>⑨観点により見方が変わることを確認する。                                                                                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ペットボトルの原料は石油で、年間約50万トン消費していることを伝える。</li> <li>・観点 資源保護の必要性を伝えているか。</li> <li>・観点 マイボトルを気軽に使ってみようという気持ちにさせるか。</li> </ul>                                                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ポスターを観察し、気づいた特徴を書き出すことができる。</li> <li>・気づいた特徴から、その効果について分析することができる。</li> </ul>                                                                 |
| 3 | ⑩ここまでの学習事項の確認を行う。<br>⑪「チョコレート」についての知識を得る。                                                                                                                          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・観点について確認する。</li> <li>・見方(主観→客観)の確認をする。</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p>                                                                                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・観点の重要性について理解することができる。</li> <li>・客観的に対象を観察することができる。</li> </ul>                                                                                 |

|  |                              |                                                                                                             |                          |
|--|------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|
|  | ⑫チョコレートのポスターについて「観察および分析」を行う | <ul style="list-style-type: none"> <li>・どうして自分が良いと思ったのかということを考えさせる。</li> <li>・映像と文字の組み合わせに注意を促す。</li> </ul> | ・特徴を捉え、効果について分析することができる。 |
|--|------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------|

#### 4. 成果物《批評文》の評価指標

観点 1 回目 2つのロゴマークを見比べ、どちらが優れているかを伝えることができる。

2 回目 資源保護の必要性を伝えている。

マイボトルを気軽に使ってみようという気持ちにさせることができる。

3 回目 観点の重要性を理解し、観点を意識しながらチョコレートのポスターを観察し、特徴をとらえることができる。

|                        | レベル0                           | レベル1                                 | レベル2                                         | レベル3                                       |
|------------------------|--------------------------------|--------------------------------------|----------------------------------------------|--------------------------------------------|
| 評価指標                   | ①落ち着いて観察ができず、全く特徴を書き出すことができない。 | ①特徴は捉えているが、どちらが優れているかという判断に生かされていない。 | ①どちらか一方のロゴマークの特徴を捉えたうえで、どちらが優れているか決めることができる。 | ①それぞれのロゴマークの特徴を捉えたうえで、どちらが優れているか決めることができる。 |
|                        | ②特徴を書き出すことができない。               | ②特徴を書き出すことはできる。                      | ②特徴を捉え分析することができる。                            | ②特徴をしっかりと捉え分析を行い、その効果まで言及することができる。         |
|                        | ③観点が理解できず、特徴も書き出すことができない。      | ③観点は意識できないが、特徴は書き出すことができる。           | ③特徴を書き出し、判断に生かすことができる。                       | ③観点を意識したうえでポスターを観察し、特徴を捉え判断することができる。       |
| 指導時間 ①…1回目 ②…2回目 ③…3回目 |                                |                                      |                                              |                                            |

#### 5. 実践の考察

##### (1) 成果物の分析

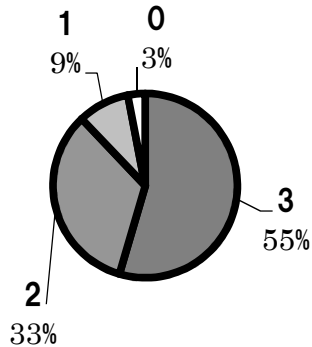
まず、1回目の授業においては今までの読み物教材と違うということもあり、「レベル0」の生徒はおらず、「レベル1」が5名であり、残りの28名の生徒は、ロゴマークの特徴を捉えることができていた。

そして2回目の授業では、画と文の組み合わせからなるポスターを分析するという課題の中、画と文の関係性をうまく捉えることができず、「レベル0」になってしまった生徒が8名出た。

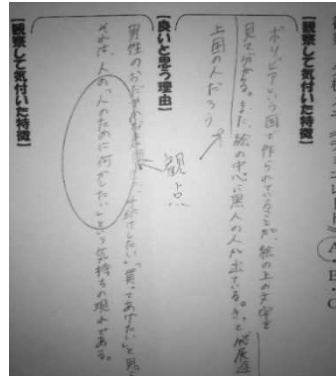
これらのことを踏まえ行った3回目の授業では、観点についての説明や主観から客観への転換、画と文字との関係性などを確認してから、授業に臨んだ。その結果、「レ



レベル0」が1名、「レベル1」が3名、「レベル2」が11名、「レベル3」が18名になった。



＜第3回＞



＜第3回「レベル3」成果物＞



## (2) 本単元の実践の成果と課題

### ア 成果

- ・「映像に着目する→映像と文字の関係→観点を意識して対象物を観察する」というように、段階を踏んで授業を行ったため第1回では理解の厳しかった生徒も「レベル」を引き上げることができた。
- ・指導者にとってもメディア活用の授業は初の試みであったため、新鮮な気持ちで授業を行うことができた。それが学習者にも伝わり、良い意味での相乗効果が得られた。
- ・授業ごとに明確な目標を提示できたことや、写真を見せる際に、「どちらの写真のほうが、大自然をアピールできるか。」「どちらのロゴマークを採用するか。」などの比較の観点を示したことが生徒の学習意欲を高めることにつながった。

### イ 課題

- ・今回の授業実践は中学3年生での実践である。メディア活用の単元としては、まとまった分量の単元構想をしていく上で、もう少し授業時間を確保したいところであるが、中学3年生では時間の確保が難しかったため、2年生での実施が望ましいと考える。
- ・従来の学習との接続ができるような指標を組むことができれば、今後の学習にも生かされるため、国語の授業を構築していく際に、メディア・リテラシーの要素をどう組み込むかが今後の課題であると感じた。

## 4 研究のまとめ

本研究では学習者の活用力を向上させるために、メディアを活用することや、単元のデザインと評価指標に着目した授業実践を行うとともに、学習者の成果物を分析し、実践内容を考察した。その成果と課題は次のとおりである。

### (1) 成果

メディア・リテラシーに焦点をあて、学習者に言語外メディアである写真を提示し、写真1枚よりも複数枚見せた方が効果的であるのかどうか、あるいは、内容の多少の違いがある写真を見せるとどうかを授業実践することで、結果的に写真の読み取る幅が広がり、細部にまで目を向け、観点が増え、具体的に表現でき、これまで以上に記述量の多くな

った学習者が増えた。今後においても文字言語だけでなく多様なテキストを、発達段階に応じて様々な視点で読み取る力をつけることが大切である。

## (2) 課題

今回の研究をとおして、国語科授業において、決してこま切れのものではなく、ある程度まとまったメディア単元として、文字言語だけではなく、学習者の言語環境を形作っているさまざまな情報に向き合わせるために、言語外メディアを導入する必要性を感じている。文字テキストである文字言語を読むことでは得られない、非連続型テキストであるメディアを学習者に出合わせることで、学習者の内言を表出させることが可能となることが理解できた。ただし、現在は、メディアが示すありのままの様子のみを表現できる学習者が存在する。そこで学習者がメディアを見た内容を表現する段階から、メディアを見て学習者が感じたことを言語化できる段階まで引き上げるために指導をどうするべきかを考えていかななくてはならない。

## 5 おわりに

今回の研究では、実生活に生きてはたらく確かな国語の能力を育むことを考慮に入れ、活用力を向上させることに焦点をあてている。すなわち、学習者が生活の場に根ざした国語の力を身につけられるように、メディアを題材とし、学習活動を進めたものである。

その結果、メディアを介在させたことにより、例えば写真から見てとれる状況をそのまま記述することも含めて、学習者に内在する考えを表出することができた。

メディアを活用するだけではなく、学習者どうしの交流を取り入れた実践では、学習者一人ひとりが主体的に、能動的に活動に関わり、自らの考えを広げ深めることができている。まさに国語科におけるアクティブ・ラーニングである。

ただし、活用力の向上に焦点をあてたというものの、今回はそのスタートラインに立ったところであり、その第一段階として、題材としてメディアを与えることで学習者の表現が豊かになると想定して研究を進めていった。そのため情報活用の点において、情報の収集から情報を再構成して相手に伝達するという段階に至るのはこれからの課題となる。今後は、学習者が自身のことばを表出するだけではなく、自らの課題解決に向けて必要な情報を選択し、吟味し、再構成に至るまでの過程を経て、情報活用力を高められるようにと考える。

本研究における評価指標は、教師の指導計画や内容が明確になり、指導過程においても、学習者に対してどのような支援をしていくのがよいのかの指針となるはずである。

さらには言語外メディアを介在させることによって、最小限、写真や絵に示されている様子などを断片的ではあるがありのままを表記することができた学習者もあり、結果的に学習者の記述量が増えてきたことも事実である。

ところで、新学習指導要領においては、「アクティブ・ラーニング」がキーワードとなっている。水戸部修治氏は、国語科におけるアクティブ・ラーニングについて、「今後の変化の激しい社会を生きる子供たちにとって必要な言葉の力を育むためにこそ、課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学び、その成果を発信する。」と定義づけている。

本研究は、メディア・リテラシーを意識して取り組んだ結果、主体性・協働性につながるアクティブ・ラーニングの一端をなすものであった。

今後、授業実践を積み重ね、活用力を育む授業研究をさらに深めていきたいと考える。

【参考資料及び文献】

- \* 1 21世紀型能力から見る国語授業とは－これから求められる資質・能力を踏まえた  
国語授業にむけての期待－ 後藤 顕一 教育科学国語教育 明治図書 2015年9月
- \* 2 21世紀型能力から見る国語授業とは－未来を生きる子供たちのための授業改革を  
－水戸部修治 教育科学国語教育 明治図書 2015年9月
- \* 3 イギリス国語科メディア教科書における写真読解単元の考察－単元「Photo-You」  
(The Media Book, EMC, 2001)を中心に－ 羽田 潤  
広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第60号 2011年



## 「主体的・協働的な学習」の充実を踏まえた授業創りを探る

－ 「授業診断」を活用した「授業改善」を図る －

指 導 員 相 方 伸 二

研 究 員 中 尾 武 史 （難波の梅小）

〃 丸 橋 弘 和 （金 楽 寺 小）

〃 小 野 裕 未 （立 花 西 小）

〃 亀 岡 優 子 （武 庫 南 小）

〃 犬 持 卓 也 （ 園 和 小 ）

### 【内容の要約】

本研究部会では、算数科における「授業改善」を図り、「主体的・協働的な学習」を構築していく上で、以下のような実践に取り組み、その効果を検証していく。

○目標とする「授業像」「子ども像」を明確にする。

- ・本物の体験を増やすことで、自分の指導の問題点を自覚する。
- ・算数科における今ある問題解決「型」学習の問題点を見直す。

○教師自身が「主体的・協働的な学び」の場面を数多く体験することを通して、

- ・教材を研究する力、指導技術等を実践的な授業力を身につけていく。
- ・「授業を観る力」、「子どもを観る力」を鍛え、「授業を創る力」に直結させる。

○「研究授業」、「授業診断」の場を年間2回以上設定する。

キーワード： 主体的・協働的な学習、学習意欲の向上、授業改善、授業診断

|     |                              |     |
|-----|------------------------------|-----|
| 1   | はじめに                         | 95  |
| 2   | 研究の概要                        | 95  |
| 3   | 研究部員による実践報告および考察             | 97  |
| (1) | 実践1【4年生】導入の工夫と子どもの変容         | 97  |
| (2) | 実践2【5年生】一人一人が説明する機会を増やす授業の工夫 | 100 |
| (3) | 実践3【4年生】表現する力を高める指導の工夫       | 104 |
| (4) | 実践4【6年生】「表現したい」が生まれる授業づくりへ   | 107 |
| (5) | 実践5【5年生】導入の工夫で子どもが創る算数授業づくり  | 109 |
| 4   | 専任講師による研究の総括 「算数授業」と「練習の虫」   | 113 |
| 5   | おわりに                         | 114 |



## 1 はじめに

「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」では、一人一人の可能性をより一層伸ばし、新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を確実に子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的な学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があると述べられている。また、学びの成果として「どのような力が身に付いたか」に関する学習評価の在り方についても改善を図る必要があることについて言及されている。

一年次となる本年度は、このような学習指導要領改訂への背景や根拠そして動向を確実に捉えながら、新しい時代に必要となる資質・能力を育む観点から算数科における学習・指導方法等の「授業改善」に焦点をあてて研究を進めることとした。

## 2 研究の内容

### （1）研究のテーマ

「主体的・協働的な学習」の充実を踏まえた授業創りを探る  
－「授業診断」を活用した「授業改善」を図る－

### （2）研究の内容

#### 「主体的・協働的な学習」と「学習意欲」

「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」では、「思考力・判断力・表現力等は、学習の中で、思考・判断・表現が発揮される主体的・協働的な問題発見・解決の場面を経験することによって磨かれていく。」「こうした学びを推進するエンジンとなるのは、子供の学びに向かう力であり、これを引き出すためには、実社会や実生活に関連した課題などを通じて動機付けを行い、子供たちの学びへの興味と努力し続ける意志を喚起する必要がある。」と述べられている。『深い学び』、『対話的な学び』、『主体的な学び』の過程が実現できているかどうかや「子どもたちの学習意欲等の『学びに向かう力』を引き出せているかどうか」が強く求められている。

また、全国学力・学習状況調査の学校質問紙における「児童は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」との質問項目に対して肯定的に回答している方が平均正答率の高い状況であったことが報告されている。つまり、「対話的な学びの充実」と「学力の定着」には、関係性があることが伺える。

尼崎市においては、児童質問紙における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」との質問項目に対して、肯定的に回答している児童は、全国平均より下回る結果となっている。（表1）

| （表1） | 尼崎市   | 全国    | 尼崎市－全国 |
|------|-------|-------|--------|
| H27  | 58.0% | 66.9% | -8.9   |
| H26  | 57.2% | 65.9% | -8.7   |

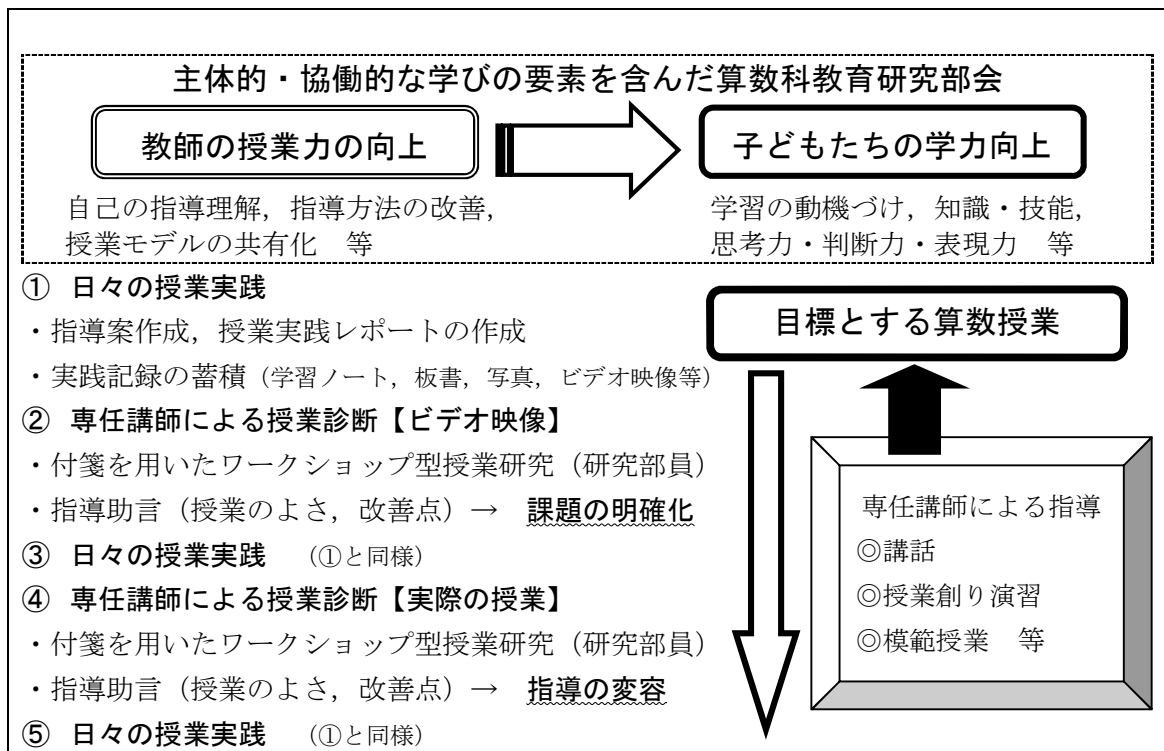
体力向上には、「運動量の確保」が必須であると同様に、学力向上には、「思考量や表現量の確保」が必要であると考え。子どもたちが思考する場面、表現する場面、そして算数がたのしいと感じる場面を数多く体験させていくことが求められる。

このことから、「主体的・協働的な学習」をより一層充実させていくとともに、子どもたちの学習意欲を引き出していくことが重要であると考え。

#### 「授業改善」と「授業診断」

いつの時代も変わることなく、教師の「授業の質の向上」が問われている。授業が効果的に改善されない理由として、教師が自身の授業の問題点を自覚していない、つまり、現状の授業に満足してしまうことにより、停滞を生み出している状況が考えられる。「授業改善」のためには、教師自身が「子どもたちとよりよい授業を創りあげる」という情熱や使命感を根底とし、現状を打破すべく、「不断」の努力を続けることができるかが勝負である。

特に、研究実践期間の序盤と終盤に「研究授業」と「授業診断」の場を設定しており、教師自身が学びを継続できる実践的なサイクルによる効果は大きいと考える。序盤での授業診断を通して、専任講師からの具体的な指導助言を最大限に活用して、日々の授業実践に直結させていく。その授業実践の積み重ねの成果を表現する場として、終盤に2回目の「研究授業」と「授業診断」を設定している。



また、研究部員がそれぞれの実践や「研究授業」、「授業診断」を共有し合うことにより、研究授業のよかった点や改善すべき点等の指導助言は、他の研究部員が客観的に自分の指導を見つめ直す機会ともなる。そのなかで、「授業を観る目」、「子どもを観る目」も鍛え磨かれ、「授業改善」に直結していく。

#### 問題解決「型」授業の現状を問い直し、子どもが創り、たのしむ算数科の授業への転換

専任講師である尾崎先生は、「教師にとって授業を進める上で大切なことは何であろうか？それは、価値ある子どもの声や姿・考え方は何かを瞬時に見抜く目をもつことである。さらには、それらの価値ある声や姿などを授業の舞台に載せ、クラス全体で共有・発展させていくことである。このような授業過程を繰り返していくことで、思



考力や表現力が一人一人の子どもに着実に育っていくのである。」と語られている。

本研究部会では、「話すだけの授業からの脱却」、「『たい』を引き出す授業」、「『ズレ』が生まれる仕掛けを授業でつくる」等、教師主導の授業展開ではなく、「子どもが創り、たのしむ算数科の授業」に向けて、実践的な研究に取り組む。

その取り組みのなかで、問題解決「型」授業の現状を見つめ直し、「問いの共有化」、「新たな問いの発生」、「一般化に向かう類題解決」、「再現活動による数学的な考え方の定着」といった学びの過程を大切にしたい授業への転換を図る。

以上に述べてきたことを踏まえ、本研究部会では、算数科における「授業改善」を図り、「主体的・協働的な学習」を構築していく上で、次のような実践に取り組み、その効果を検証していく。

- 目標とする「授業像」「子ども像」を明確にする。(模範授業の参観 等)
  - ・本物の体験を増やすことで、自分の指導の問題点を自覚する。
  - ・算数科における今ある問題解決「型」学習の問題点を見直す。
- 教師自身が「主体的・協働的な学び」の場면을数多く体験することを通して、
  - ・教材を研究する力、指導技術等を実践的な授業力を身につけていく。
  - ・「授業を観る力」、「子どもを観る力」を鍛え、「授業を創る力」に直結させる。
- 「研究授業」、「授業診断」の場を年間2回以上設定する。

### 3 研究部員による実践報告および考察

研究部員一人一人が年間を通じた研究実践の積み重ねを振り返り、今一度、自分自身の授業の現在地を捉えるため、今後、改善が必要な点、伸ばすべき点等を加味しながら「自己診断」を行うことが大切である。このような意図から、蓄積してきた学習指導案や授業実践レポート等を安易にそのまま掲載するのではなく、まだまだ道半ばではあるが、それぞれの「主張点」を提案し、「子どもの変容が肌で感じられた場面」、「有効であった取り組み（導入、指導技術、学習方法等）」といった具体的な授業場面を中心に構成している。

#### (1) 実践1【4年生】 導入の工夫と子どもの変容

「授業は導入で8割決まる」この言葉をもとに授業を改善した。  
「教師の発問に子どもたちはどう反応し、どう理解を深めるのか。」について研究することで、「よい授業とはどのようなものか」について考察する。

##### 1. 実践の内容

###### (1) 子どもの発言を引き出し、つなぐ授業（模範授業の参観）

専任講師である尾崎正彦先生の模範授業【6月27日（土）関西大学初等部4年生】

13個の四角形から「あたり」の四角形を探すというゲームを通して、「あたり」には辺の平行関係があることに気づかせる授業であった。

子どもたちはどの形が「あたり」であるか興味津々である。この導入のところすでに子どもたちが授業にのめりこむような雰囲気があった。その雰囲気がよい授業をつくっていき、子どもたちの理解も深まっていくのだと感じた。

授業では、まず長方形や正方形が「あたり」とわかり、「あたり」の条件が出始める。そのときに、平行四辺形はどうかというところで、全体でまた意見が分かれる。授業中、ほとんど子どもが発言し、進行していくことが画期的であった。「交わるってどう

ということ？」子どもたちから出てきた疑問を先生が寄り添うように発問する。また、子どもたちが説明をしながら少しずつ考えが深まっていく。「交わらなくて何がわかるん？」「交わらないからあたり」つまり平行の説明を自然にしている様子であった。

(2) 子どもが主体的に学ぶ授業の難しさ（自分の学級で授業実践）

「あたりくじを見つけよう」

13個の四角形から「あたり」の四角形を探すというゲームから授業を開始した。子どもたちは意欲的に「あたり」がどんな形なのか意見をだしていく。ただし、子どもだけで発言をつなげていくような授業の形をこれまで行っていないため、基本的には教師が発問を繰り返しながら子どもが答えていくという形になった。

まず、正方形、長方形はあたり。ほかにはどれが「あたり」になるのかというところで、子どもたちの反応が乏しくなってきたのを見て、私が「はずれはどれかな？」と今までとは反対の発問を投げかけた。するとまた反応がよくなったのだが、肝心の平行になっているのが「あたり」というところの議論があいまいになってしまった。やはり子どもの意識をそのまま展開していくことが大切であり、途中で教師が切りかえてしまったことが効果的ではなかったと反省している。子どもが意欲的に授業に取り組めるようにしかけを考えることがとても有効的だと改めて実感した。

考えを深める発言を見極め、取り上げることができるかどうか

→ 授業をすすめようと考えすぎると、子どもの発言がひろえない

(3) 単元ごとの工夫と児童の変容

「大きい数」

教科書は使わず、いくつかの市町村の人口からどこの人口なのか、どれぐらいいるのかななどを予想させながら1億の位までを考えさせた。

尼崎市 464562人

神戸市 1511351人

日本 126818000人 などを紹介。

子どもたちは、2学期初めての算数の授業でもあり、とても意欲的に発言していた。特に、低学力の児童も発表することができた。それからの授業は、教科書を主に使わずにすすめたが、これまで算数を苦手にしてきた児童が「これはできる」という気持ちを持ち続けて取り組めたことで、単元の終わりまでその意欲が続いた。『導入が8割』という言葉の意味を実感する授業であった。

「わり算の筆算」

わり算の筆算は、1学期に1桁でわるやり方を指導しているので、今までの計算をふり返ったところからスタートをすることで子どもたちの意欲を引き出そうと考えた。まず、たし算、ひき算、かけ算、それぞれの筆算とやっていく中で「できる」という気持ちをもつ。さらにわり算、1桁でわるわり算の筆算と4年生の内容へ近づけていく。一つ一つ進めていく中で、自分たちがやってきた計算を思い出している様子であった。いよいよ新しい内容である「 $60 \div 20$ 」に入ると、「できる！」とすぐに反応し、とても意欲的に計算に取り組むことができた。第二次からも前時にできたことから入り、新しいことへ取り組むという流れを続けていった。このことでわり算の筆算を一つ一つ身につけていくことができた。

### 「計算のきまり」

教科書の導入が買い物をする場面だったので、買い物を普段の生活の買い物に変化させ、なるべく生活のイメージから問題に取り組めるようにした。やはりいつもよりも意欲的に発言したり、手を挙げたりする姿が見られた。( )を使った計算だったので抵抗もなく授業がすすんでいく。しかし、単元の終盤に分配法則などの難しい要素が出てくるところでつまづいてしまった。いろいろなきまりがあってもどれを使うのかというところが不十分であったため、教科書だけではなく、補充問題も重ねて経験させるべきであったかと思う。

### 「小数のしくみ」

1 目盛りがいくらになるのかということを意識させることで正確に小数をとらえることができると考えていたので、1L の図(0.1L ずつに目盛りがある)を用意して、子どもたちが説明できるようにした。まず、1L の10分の1を考え、図でたしかめ説明をする。次に同じ図を使って、0.1L の10分の1を考えた。「簡単!」と意欲的に手が挙がる。2学期の終盤に近づくにつれ、算数の授業での発表が全体的に増えてきているのがうれしかった。子どもたちが「わかった」、「できた」という喜びを感じられることを大切にしたいと改めて感じた。この単元は全体的に成績もよく、理解ができていたように感じた。導入部分で「できそう」と感じさせることができ、小数の考え方につなげることができたように思う。

### 「がい数」 (研究授業)

右のカードのように、5つの数を5秒間見せる。

この数を合計することを伝え、5秒では正確に計算できないので、大体いくらかと考えるとどうかと投げかける。子どもたちはノートに大体の計算をする。机間指導のなかで、取り上げる考えを探し黒板に書かせる。それを見ながら、どんな計算をしたのかみんなで考える。そうする中で、四捨五入のような考え方を数直線で確認した。その考えを使って、他の数でも挑戦していく。この時間では、どの位を四捨五入するのか、切り捨て、切り上げをするのかということがまだはっきりと確認ができなかったので、次の時間への課題としてつなげることにした。

|         |         |
|---------|---------|
| 2 6 8 0 | 2 0 6 9 |
| 2 4 0 2 |         |
| 3 1 3 1 | 1 0 8 5 |

子どもたちは大体の数で計算をすれば簡単になるという感覚はつかむことができたように思う。しかし、私がまず「大体で計算すればどうか」と投げかけていること。「それは子どもたちから引き出したい考えである」と尾崎先生から指導を頂いた。前回の授業の反省であった「子どもの考えをつなげていくような授業」がまだまだできていないということである。やはり「子どもから引き出したい大切なことは何なのか」ということをきちんと把握し、しかけを考えていくことが難しく、今後の課題であると感じた。

「問い」を解決するために必要なキーワードは、子どもから引き出していくこと

## 2. 実践を振り返って

### 【成 果】

導入の工夫により、子どもの意欲、意識を変容させることができるということがわかった。また、それは単元の導入だけに限らず、子どもがその教材にもついイメージや

疑問などを拾いながら授業をしていくことで、子どもたちの確かな学力を育てることができると感じた。同じ教材でも「どのように提示するか」、「どのように展開するか」によって結果がちがうので、子どもの様子を見ながら指導していくことの大切さを学ぶことができた。

また、自分自身の授業に対する考え方が変容してきたことも大きな成果と感じている。子どもたちは常に正直な反応をし、物事をそのまま受け止めながら理解したり、疑問に思ったりしている。教師の予想とはちがう反応をした場合、今まではどうやって修正していこうかと考えていた。しかし、そのような子どもたちの反応を生み出したのは、教師の発問や教材提示等が原因であると見直すようになった。さらに、その予想外の反応をそのまま受け止めていくことで、新たな問いや発見が生まれるのではないかと考えられるようになった。このような問いや発見を全体で共有し合いながら授業を展開していくことが、よりよい授業につながっていくという感覚を身につけることができた。この感覚は算数に限らず、学級経営、子どもとの接し方、その他の教科、すべてに活きるものだと感じている。

#### 【課題】

- ・まだまだ学力と結びついていると確信をもてるまでには至っていない。
  - ・導入部分以外の授業において、教科書に委ねたありきたりな展開となってしまった。
- その結果、子どもたちの意欲が持続していない部分があった。

#### 【改善策】

- ・自分の考えを書かせることや発言させることで学力の定着を図っていく。そのために普段からペアで発言させること、書かせて説明させること等、継続的に取り組んでいく必要がある。
- ・導入部分だけでなく、第二次からも子どもたちの意欲がつながるようなしかけをつくっていくことで、より意欲的な授業展開としていく。

### (2) 実践2【5年生】一人一人が説明する機会を増やす授業の工夫

子どもたちの表現力を高めるためには、一人一人が説明する機会を増やす必要があると考えられる。しかし、ただ単に説明する機会を増やすのではなく、まずは子どもたちの「説明したい」「表現したい」という気持ちを高める授業の展開を工夫することが大切である。そのことを意識しながら、本実践では、説明する機会を増やす工夫として、ペア説明や友達が考えた式の意味をみんなで読み解くといった活動を積極的に取り入れてきた。また、学習した内容を説明する文章を書く学習作文を通して、子どもたちの表現力を高められるように取り組んだ。

#### 1. 実践の内容

昨年度、4年生「長方形と正方形の面積」の単元で、複合図形の面積を工夫して求める授業を行った。自力解決後、それぞれの考えを発表する場面では、一人の児童が考え方を説明し、他の児童がその説明を聞くという授業展開であった。また、説明が終わると発表者がみんなに「どうですか？」と尋ね、聞いていた子たちは「同じです。」「いいです。」と一斉に答えた。解決方法の発表会のような授業であった。しかし、このような解決方法の発表会になってしまっただけでは、発表する児童の説明力は育つかもれないが、聞いている児童の説明力は育っていない。

そこで、本年度は、子どもたち一人一人が自己表現する機会を増やし、表現力を育てていくために、次のような取り組みを積極的に行っていくこととした。

(1) 子どもたちの「説明したい」「表現したい」を引き出す

子どもたちの思考力や表現力を高めるためには、一人一人が自己表現する機会を増やすことが大切だと考えられる。しかし、ただ単に説明する機会を増やして、「じゃあ、自分の考えを友達に説明してみよう」と投げ掛けても、子どもたちの説明意欲は高まらない。まずは、「説明したい」「表現したい」と思えるような場면을授業の中に作り出す必要があると考える。

例えば、5年生の小数のわり算の単元で、あまりの大きさを考える授業を行ったときのことである。筆算の仕方を学んだ後の学習であり、ここでは「2.5mのリボンを、1人に0.7mずつ配ります。何人に配れますか。また、何mあまりですか。」という文章問題に取り組んだ。子どもたちは、「 $2.5 \div 0.7$ 」と立式し、筆算を用いて「3あまり4」という答えを導き出した。ここで、「じゃあ、答えは『3人に配れて4m あまる』だね?」と投げ掛けて次へ進もうとすると、「違います!」「おかしい!」と言って何人かの子が手を挙げてきた。その答えではおかしいから説明したいという気持ちが高まったのだ。そこで、「何がおかしいのか、隣同士で説明してみよう」と言うと、子どもたちは「もとの2.5mより大きくなるからおかしいよ…」「これは、1が4つ分ってことじゃなくて、0.1が4つ分…」などと説明を始めた。【図1】

|                                                        |                                                                                  |
|--------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| $2.5 \div 0.7 = 3 \text{あまり} 4$<br>答え 3人に配れて、4mあまる     | $\begin{array}{r} 3 \\ 0.7 \overline{)2.5} \\ \underline{21} \\ 4 \end{array}$   |
| ↓                                                      |                                                                                  |
| $2.5 \div 0.7 = 3 \text{あまり} 0.4$<br>答え 3人に配れて、0.4mあまる | $\begin{array}{r} 3 \\ 0.7 \overline{)2.5} \\ \underline{21} \\ 0.4 \end{array}$ |

【図1】小数のわり算であまりの大きさを考える場面

また、きまりや法則を見つける授業ではめあての提示の仕方に気をつけている。もし、最初に「〇〇のきまりを見つけよう」とめあてを提示してしまうと、きまりがあることが最初から分かってしまう。そうすると、子どもたちの中のきまりを見つける楽しさが薄れてしまう。逆に、2つの数量を見比べたり、表や数直線を見たりして、自分たちで発見したきまりならば、子どもたちの中に「言いたい」「説明したい」という気持ちが生まれてくるはずである。実際の授業では、「あれ?」「これってもしかして…」「気付いたことがあります!」などと言って、積極的にきまりや法則を見つけようとする子どもたちの姿が見られるようになってきた。

このように、まずは子どもたちの「説明したい」「表現したい」という気持ちを引き出すような授業展開の工夫をすることが大切であると考える。

子どもたちの「説明したい」「表現したい」という気持ちを引き出すような授業の展開を工夫する

(2) 説明の機会を増やし相互評価する

一人一人の説明する機会を増やすために、隣同士で説明する活動（ペア説明）を積極的に取り入れるようにした。【写真1】

4人ぐらいのグループで話していると、全員が話し終わるまでに時間がかかってしまったり、話をあまり聞いていない子がでてきたりする。しかし、ペアで話し合う場合には、必ず話さなくてはならない状況を作り出すことができる。前述のように、子

どもたちの「説明したい」気持ちが高まった場面だけでなく、解き方や考え方が分からず困っている子がいる場合や授業の中で価値のある内容が出た場合にもペア説明を用いて再現させるようにした。

また、そのようなペア説明を行った際には、子どもたちに「隣の人の説明で、上手だった人はいる？」と聞き、説明の仕方が上手だった子に代表で説明させるようにしている。そして、どんなところが分かりやすかったのか、そのポイントをみんなで考える。

このように、ペア説明を積極的に取り入れていくことで、抵抗なくスムーズにペア説明や話し合いに入ることができるようになってきた。また、ペア説明を始めると自然とノートを真ん中に置き、図や式を指差しながら説明する姿も多く見られるようになってきた。

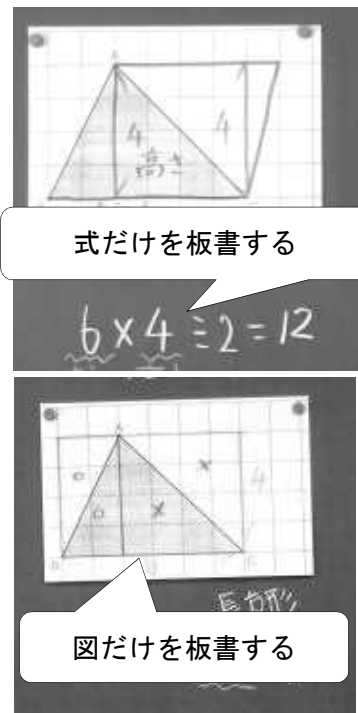


【写真1】

- ①ペア説明を通して、一人一人が説明する機会を増やす
  - ②分からない子に教える場合や、価値ある内容を再現させたい場合など、目的に応じてペア活動を取り入れる

(3) 友達の考えた式の意味をみんなで読み解く

昨年度の反省を活かし、それぞれの考えを交流する場面では、説明する側と聞く側が固定されないよう気をつけながら授業を行っていった。例えば、5年生の三角形の面積の求め方を考える授業を行ったときのことである。自力解決後、子どもたちのそれぞれの考えを交流していく場面では、初めに式あるいは図のみを板書した。そして、「Aさんは、『 $6 \times 4 \div 2$ 』という式を考えました。Aさんの式の意味は分かる？」と投げ掛けた。一人の子どもがすべて説明するのではなく、式だけを説明させるのである。そうすることで、他の子はAさんの式の意味を読み解き、その意味を考えようとする。実際に、子どもたちはAさんの式を読み取り、「まず、同じ三角形をもう一つ増やして平行四辺形を作ります…」などと発表していった。また、板書された図を見て、「Bさんはこんな図をかいて三角形の面積を求めているよ。どうやって求めたのかな。」と発問し、みんなでBさんの求め方を読み解いていく方法も実施した。【写真2】



【写真2】

また、ここでは、説明を聞いていた子から「どうして2でわるのかが分からない…」との声が上がった。他にも数名分かっていない子がいる様子だったので、「どうして2でわるの？」と投げ掛け、全体で話し合ったりペアで説明させたりして理解を深めていくようにした。

このような取り組みを通して、子どもたちは友達の説明をよく聞くようになってき

たと感じる。発表する際に、「Aさんが言ったように…」「Bさんと式は同じだけど、考え方は違って…」などと、友達のを引用しながら発表することが増えてきた。また、みんなの方を向いて説明したり、図や式を指差しながら説明したりするなど、より相手意識をもって説明できる子も増えてきた。

- ①一人の子にすべて説明させず、みんなで式や図の意味を読み解く
- ②「どうして?」「なぜ?」の補助発問で理解を深める

#### (4) 説明する力を文章でも鍛える (学習作文)

授業の終末や単元の終末などに、学習したことを説明する学習作文を書かせた。

ここでは、「授業を受けていない人にも分かるように書きなさい」と指示を出し、文章だけではなく、式や図なども使って分かりやすい説明文を書かせる。その際、一文一文をできるだけ短く書いているか、文章と図、式がちゃんとつながっているかという点にも注意しながら書かせるようにしている。一文が長すぎると、何がポイントなのか分からなくなったり、話しながら説明するときも一文が長くなったりすることがあるからである。上手に書けているものは授業や学級通信で取り上げるなどして、みんなに広めるようにしている。【図2】

今日、私たちが解いた問題は、ある平行四辺形の面積を求めようという問題である。その中で、私が最も早く思いついた考えを説明しよう。

(1) 平行四辺形

(1)の形の面積を求めるには、形を長方形に変換はいい。(2) 図のように、とちうかを区切り

(3)のように移動すれば、長方形になる。だから式は  $4 \times 6 = 24$  で24cmになる。

但し(4)のように移動する考えもある。これを式は  $4 \times 6 = 24$  である。

一のように平行四辺形は、角形に区切り、長方形にすれば求めることができる。

なぜ、三角形の面積を求める式は、底辺×高さ÷2になるのでしょうか。

まず、三角形を増やします。増やした平行四辺形にばって、平行四辺形の面積の求め方は知っているのだから、計算すると、 $6 \times 4 = 24$ になります。でも増やした分は、うさな、いといはない。増やして、うさな作戦です。だから  $24 \div 2$  をして答えは2になりました。2つの式を合わせると、 $6 \times 4 \div 2 = 12$ つまり、底辺×高さ÷2です。

このように、三角形の面積を求める式は底辺×高さ÷2になります。

一文一文をできるだけ短く書くようにする

文章と図、式などを使って分かりやすく説明する

なぜその公式になるのかを説明していく

接続語を上手に使って、順序立てながら説明していく

【図2】平行四辺形の面積（左）と三角形の面積（右）の求め方をまとめた学習作文

友達の考えた式や図を読み解く活動や学習作文を書いていくことで、問題の解き方や式の意味を言葉や式・図・表で説明する記述式のテストにも慣れてきた。しかし、実際に前で説明する場面では、一文が長くなってしまいう子もいる。話しながら説明する力と合わせて、文章で説明する力を今後も高めていく必要がある。

①学習したことを分かりやすく説明するように学習作文を書かせる

- ・できるだけ一文を短くする
- ・文章と図、式などがちゃんとつながるようにする

②考え方を読み解くような記述式の問題を単元末に実施する

## 2. 実践を振り返って

本年度は、子どもたちの表現力を高めるために、一人一人が説明する機会を増やすことを意識しながら授業を行ってきた。昨年度の自分の授業を振り返ることから始め、ペア説明や友達の式を読み取る活動を取り入れるなど、自分の授業改善にも積極的に取り組んできた。そうすることで、友達の説明をよく聞くようになったり、ペア説明や話し合いにもスムーズに入ることができるようになったり、子どもたちにも少しずつ変化が表れてきた。授業を創る教師の意識が変わることで、子どもたちも変わっていくのだということを改めて実感した。

一方で、本年度の実践を通して、新たな課題も見つかった。授業中の子どもの価値ある発言を取り上げて、もっと価値づけていく必要があると感じた。また、問題解決型の授業において、1つの問題を解くだけで授業が終わってしまうことがあった。自力解決後、それぞれの考え方を発表し、練り上げる場面に時間を使いすぎていることが原因である。「こんな問題の場合はこう」「これならどうか」と多様な問題（類題）を解くことを通して、学習内容の定着と思考力を高めるような授業展開を工夫して行く必要がある。これらは今後の課題とし、改善していきたい。

## (3) 実践3【4年生】表現する力を高める指導の工夫

子どもたちが自分のもっている知識・技能を活用し、自分の考えを豊かに表現し、「算数って楽しい」と感じ、「算数が好き」と思う子どもたちを育てたいと思いながら日々の授業に取り組んでいる。そして「やってみたい」「できそうだ」という意欲を引き出すことで、主体的な学習ができるのではないかと考える。

### 1. 実践の内容

これまでの学習では、子どもたちは操作活動には喜んで取り組むが、その活動から導き出せることや考えることを、表現したり説明したりする活動になると一部の子どもたちだけが発言し、他の子どもたちは聞き役になっていた。そこでクラス全体が「やってみたい」「できそうだ」という意欲を引き出すためには、①課題の提示の仕方の工夫、②ペア学習の設定の仕方を見直すことにした。

このような取り組みの積み重ねによって主体的な連続した学びや表現する力も自然と身に付いていくと考えた。

#### (1) 課題の提示の仕方の工夫

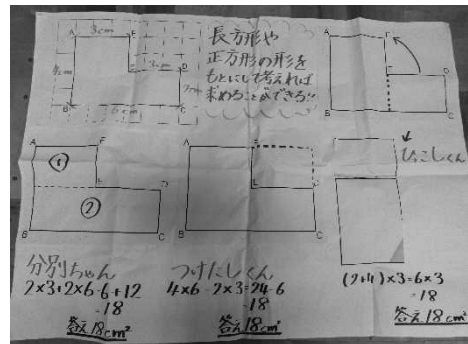
長方形と正方形の形をもとにして考えればL字形の面積を求めることができることを知った子どもたちに「他の図形でもみんなが見つけた3つの方法で求めることがで



きるかな？」と投げかけてみた。そうすると子どもたちは、「試してみたい」と言う。子どもたち自ら考え、方法に名前を付けたことによって興味・関心を持つことができた。また、苦手な子どもたちにとってもどの方法でできるか選択できるので自信を持って取り組んでいた。

十字形の面積を求める問題を提示するときも、図形の長さをあえて出さずに問題を提示すると子どもたちから、「このままだと解けません。」「〇〇の辺の長さを教えてください。」と自然に出てきた。

このように、子どもたちから興味・関心を引き出すには、問題提示に一工夫したり、前の学習を活用したりすることで「やってみたい」「できそうだ」という気持ちが生まれ、子どもたちが主体的に問題と向き合っていくと考える。そして、教師の日々の教材研究が重要である。



前時の授業のまとめ（3つの方法）

「やってみたい」「できそうだ」という意欲を引き出すために問題提示を一工夫！！

## (2) ペア学習の設定の仕方の工夫

ペア学習を取り入れ、自分の意見や考えを友だちに伝える機会を積極的に設けてきた。友達に自分の考えを伝えるということで、自分の考えに自信をもつことができるようになってきた。自分の考えをもつことを苦手とする子どもたちにとっては、友達の考えを聞くことにより、自分の考えをもつきっかけとなって自分の考えを少しずつ書いたり、友達に自分の考えを伝えたりすることができるようになってきた。しかし、ただ伝え合うだけで理解できていない子どもたちや説明の一文が長い子どもたちも多い。そこで、まずクラス全員で一つの考えを聞き、その考えを友達に伝える方法を取り入れた。



ペア学習

例えばAさんの考えをクラス全員で聞く。その後に、「Aさんの考えを自分の言葉でペアに説明しましょう。」と指示する。そうすることによって、友達の考えをしっかりと聞く姿勢が生まれ、考えながら話を聞く子どもたちも増えてきた。その中で、理解できない子どもたちが「わからない。」「もう一度説明してください。」と言うと、Aさん以外の子どもたちが自分の言葉で友達に理解してもらおうと説明する。子どもたちは理解してもらいたいと思い説明するので「ここまでいいですか？」や「この数字は〇〇の方法で出てきました。」など自然と一文を短くしたり、図を指しながら説明したり様々な工夫をするようになってきた。

しかし、どこでペア学習を設定するのか子どもたちのどのつぶやきを拾っていくのか判断するのが今後の課題である。

重点としたい場面でペア学習を取り入れる

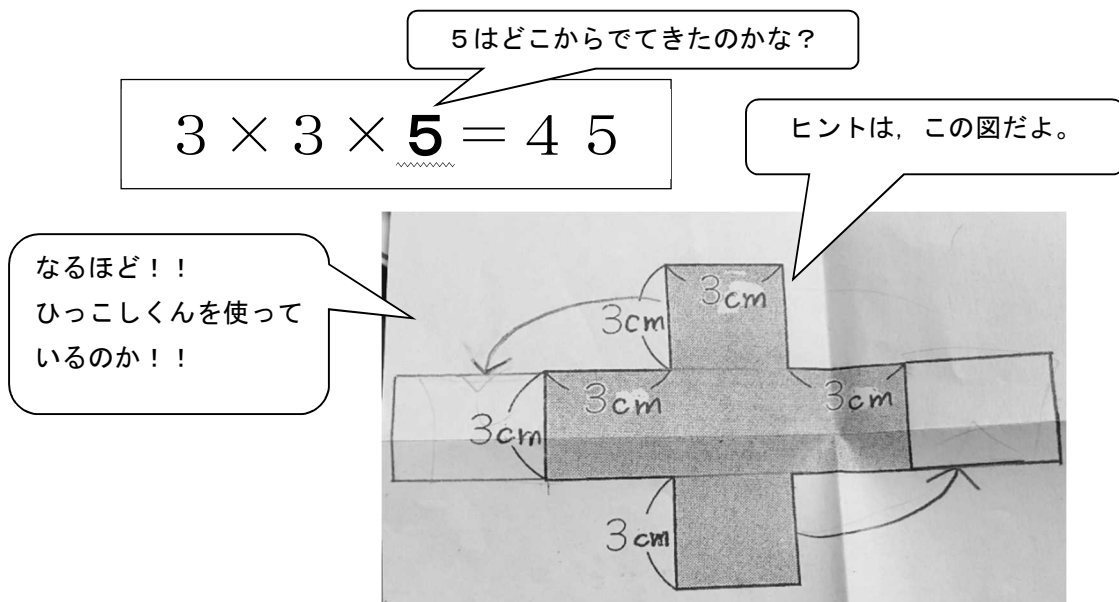
### (3) 友達の式・図を推理！！

自力解決をした後に友達とノートを交換し、友達のノートに書かれた式や図等から友達の考えを読み取り、友達の考えを説明する。ここで、「友達の考えを推理してみましょう。」と投げ掛けると子どもたちは興味を持って取り組んでいた。

「図形の面積」を例に説明する。 $3 \times 3 \times 5 = 45$ と書かれた式を見て、友達はどうの方法で解いたのか自分たちで考えた方法に当てはめて考えていく。「この5はどこから出てきたの？」と自分が疑問に思ったことを友達に聞くと聞かれた友達は、ヒントの図を見せるなど、子どもたち同士で学び合い、理解を深めていくようになった。

友達にわかりやすく書こうという意識からノートのまとめ方や授業の振り返りの書き方も工夫されるようになってきた。しかし、まだ身に付いていない子どもたちもいるので、日々の授業の積み重ねが大切だと考える。

①相手意識をもたせる ②日々の授業の積み重ねを共有する



### 2. 実践を振り返って

算数活動は学級経営にいきる！！

『Aさんはこう考えているよ』『Bくんは、どこで勘違いしたのだろう』といった問いかけから、考える時間をとると他の子どもの思考が引き出すことができ、友達の気持ちを考えることができるようになってきた。子どもが考えるのに時間がかかったとしても、教師はその時間を「待つ」ことが重要だと考える。

また、授業の振り返りを書くときに、休んでいる友達が振り返りを読んだら、どんなことを学習したのかがわかる振り返りを書くようにすると、ナンバリングをしたり、図を使ったりしてノートの取り方も自然と意識し書くようになった。こうした取り組みは、算数の授業だけでなく日々の生活にも変化が見られた。友達が困っているときに、「どうしたの？」「一緒に考えよう！」「こうしたらいいよ。」など助け合ったり、クラスで何か問題が起きたとき、子どもたち自身が解決するために話し合ったりなど、相手のことを考えて行動する子どもたちが増えてきた。子どもの考えを積み上げていく学習が、子ども同士の信頼関係を築いていく土台になっている。

## 【ノート書き方の工夫】

図を書く

色を分ける

番号をつける

### (4) 実践4【6年生】「表現したい」が生まれる授業づくりへ

黒板の前に立ち、自分の問題解決方法を発表する児童はいつも固定されている。それ以外の児童は、発表を聞くだけになってしまう。そんな授業を続けていると一部の児童にだけ表現力が身につく、偏りがでてくる。どの児童にも、表現力を身につけさせるために、全員が発表し、自分の考えを友達に伝えることができる機会を多くもてる授業を展開した。

#### 1. 実践の内容

##### (1) グループトークではなく、ペアトーク

以前は、理解している児童に引っ張ってもらうために、4～6人のグループトークを取り入れていた。しかし、このやり方だと理解している児童だけが活躍し、聞き役となっている児童の表現力が身につかない。もしくは、全員が話し役をしているとかなりの時間がかかってしまう。

ペアトークに変え、二人組にすることでどちらも話し役をしなくてはいけな場面を設定するようにした。二人組に変えたことで、話し役は、相手の反応を見ながら説明することができるようになった。

①相談人数は多くしない。

②相談人数を二人にして、必ず話し役を担当させる。

##### (2) ノートをもとにして、自分の考えを伝える。

問題を解決するときに、式・図・表・言葉などを使い、自分なりの考えから答えを導き出している。机間指導の時に、児童の考えの中からよいものがあった場合、声かけや赤ペンでの○つけなどで評価するようにするようになった。(価値付け)

答えが出たら、「終わった。」と待っている状態の児童が多かった。理解している児童ほど、待っている時間が長くなる。その間に、早くできた児童には、まだ分からない友達に教えてあげるつもりで、説明を書くように指示をしている。

言葉で説明をすることが難しい児童もいるので、ノートを使いながら友達に説明することを多く取り入れるようにした。

ペアトークで、お互いの考えを比較することで、答え合わせのような確認の時間をとることにした。いきなり全体で発表することが難しい児童も、友達に聞いてもらうことで、発表の練習となり、少しずつ発言することができるようになってきた。

①ノートに書いた自分の式・図・表を使って、友達に説明をする。

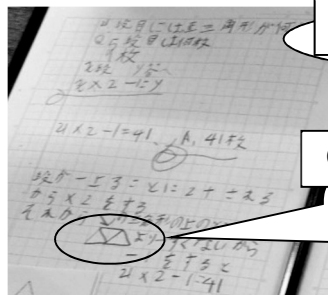
②全体での話し合いの前に、ペアトークを取り入れる。



表を使って調べる



文章にして整理する



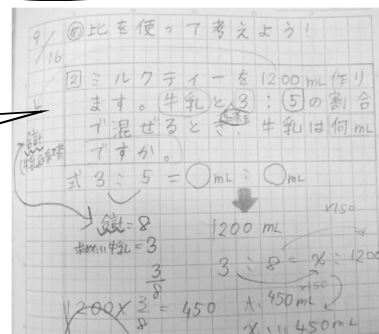
C1 「どうして1ひくの？」

C2 「上向きの三角形の数より下向き三角形の数が1少ないからだよ。」

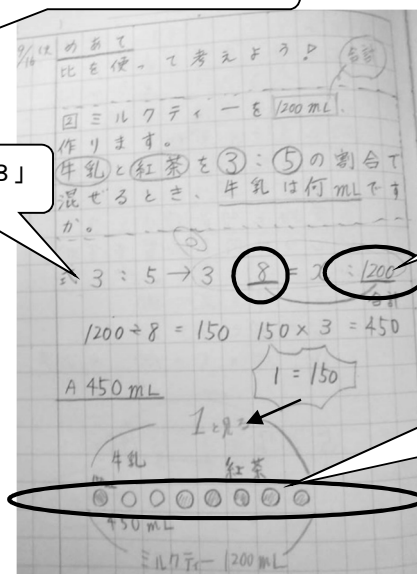
問題文から必要だと思った情報に印をつけたり、メモをとったりする。

T 「8は何を表していますか？」

C1 「 $3 + 5 = 8$ 」



C2 「牛乳と紅茶の割合の合計」



「ここに○が8こあるよ。○は150だから…」

### (3) 算数新聞

授業の振り返りを感想ではなく、算数新聞を書いてまとめることをした。黒板やノートなどを見ながら、授業で学習したことを思い出しながら新聞を作り上げることができた。

まだ学習していない友達、下級生などが読んで分かるような新聞を作るように、事前に児童に伝えていた。読み手を意識することで、ポイントとなる大事なところだけではなく、忘れていそうな既習事項やアドバイスなどを書いていた。

児童達は、掲示された算数新聞を見て、「なるほど。」や「わかりやすい。」など評価している声が聞かれた。友達の新聞のよいところを認め、真似をする姿が見られるようになった。

①授業の内容を新聞にまとめさせる。(授業の再現)

②相手への意識をもたせる。

### 2. 実践を振り返って

ノートで自分の考えをまとめたり、ペアトークで発表する機会を増やしたりすることで、話すという表現力が身についてきたように思う。自信がつくことで、自分から発言することが増えてきた。これからも自信をもたせるために、価値付けの機会を多くもたせるようにしたい。

児童が興味をもった内容を課題にしたとき、夢中になって自分の考えをまとめている。児童が知りたい、伝えたいというような流れになるように、児童のつぶやきを大切にし、授業を展開していきたい。

### (5) 実践5【5年生】導入の工夫で子どもが創る算数授業づくり

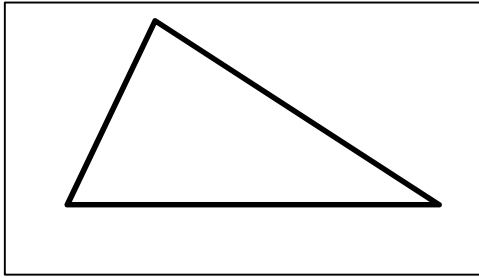
アクティブ・ラーニングを進めていくために、「考えたい」、「解決したい」、「話したい」のような「～たい」という気持ちを子どもがもって学習することが重要である。そこで授業の導入部分を見直し、子どもが主体的に活動する授業を目指したいと考えた。導入部での発問・課題提示の場面において、子どもが続きを考えたいような課題にしたり、やってみたくなるような課題との出会わせ方を工夫したりすることで、主体的な学習につなげていきたい。

### 1. 実践の内容

#### (1) 情報を小出しにして課題を提示する（合同な図形）

この時間の学習は、教科書では長さや角度が表示されているものが課題として提示されている。しかし、今回の授業の課題提示では左の図のように図形の辺の長さや角

度の情報は伏せておくこととした。こうすることで、子どもたちは合同な図形を描くために必要な情報は何かということに自然と目を向けられると考えた。この長三角形



を子どもたちに見せ、「この形と全く同じ形を描けるかな？」と問いかけると、予想した通りに「できない」「長さが分からないとできない」という反応であった。中には「先生、長さを教えて」という声も聞こえた。

そこで子どもたちに「知りたいところの長さや角度を教えるよ。」と投げかけると、どこが分かればいいのかと考え始めた。指名をしてどこを知りたいかを聞き、その場所の長さや角度を全体に伝える。

その都度、「じゃあこれで描けるかな？」と問いかけると、初めは「まだできない」という反応であったが、その他の情報が増えると「できる」という反応が返ってきたので、そこから作図を始めさせた。出来上がったものをペアで見合わせたり、何人かの友だちと確認し合わせたりすることで、確かに描けたということを確認させた。

次の時間からは、「今日は長さしか教えないよ」や「長さは一つだけしか教えないよ」という条件もつけて課題を提示した。

子どもが「三つの辺の長さ」や「一辺とその両端の角」「二辺とその間の角」以外の情報を指定して描くこともあったが、その場合、やはり図形に違いが出てきてしまう。子どもたちは、この情報ではできないということに気づき、別の方法を考え直す姿が見られた。

このように、長さや角度の情報を伏せておくことで、子どもたちにはどこの情報があれば合同な三角形を描くことができるのかという思考が生まれた。

しかし、学習したことを類題で一般化することが十分でなかったため、この方法でいつでもできるのだという実感を持たすというところまで至らなかった。解決後に、類題を解くことで、学習したことの有効性を感じさせる場面が必要だと考えた。

また、手がかりの無い状態での問いかけであったため、必要な情報というものが理解できないままに始まってしまったことも課題であった。「必要な情報を考える」という思考に不慣れな場合は、段階的な課題提示が必要ではないかと考える。

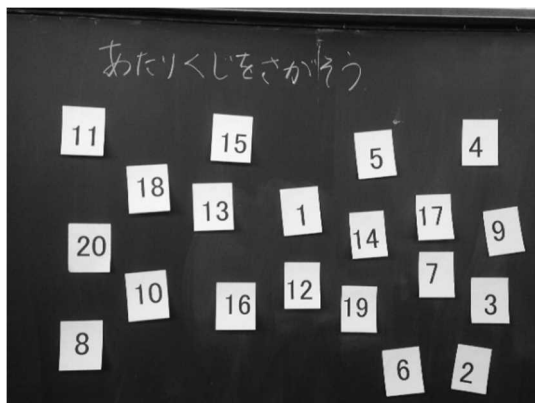
情報を小出しにすることで、必要な情報が何かを考えさせる。

→ 段階的に課題提示をし、考える手順を指導する。

## (2) あたりくじとはずれくじ (偶数と奇数)

本時は、偶数と奇数について初めて学習する場面である。数字の仲間分けをする中で、その性質の違いに気づかせたいと考え、あたりくじの方法で分類するようにした。そのカードがあたりかははずれかを予想しながらゲーム形式で進めた。今回は偶数があたりで奇数がはずれとした。子どもたちには、なぜあたりかははずれかを考えさせ、言葉にすることで偶数、奇数の性質に迫らせたいと考えた。

ゲーム形式であったため、子どもたちは非常に積極的に授業に参加していた。「やってみよう」という気持ちを十分にもたせて授業を始めることができた。



黒板に1から20までのカードをランダムで貼っておく。カードのうらにはあたりかはずれを書いておく。

どれがあたりかを予想させ、児童一人が前であたりと思うものを選ばせた。児童は「20」を選び、その理由は「一番大きな数だから」ということであつた。「みんなもそう思う？」と全体に問いかけて、他の意見を出させた。理由を板書に残していくこ

とで、だんだんと偶数と奇数の性質が見えてくる仕掛けとするためである。

何人かに理由を話させたあと、答え合わせをすると、「やったー」と、喜びの反応が多かった。中には「まだある!」と答える子どももいた。「じゃあ、ほかのあたりはどれかな」と問いを続けていく。

進めるうちに、あたりの特徴が見えてきだす。気づいた子どもが「全部2で割りきれ」や「 $2 \cdot 4 \cdot 6$ みたいに一つ飛ばしだ」とあたりの特徴を話し出したので残りのカードがその通りかどうかを確認していった。

このあたりくじの方法では、初めは何が正解か分からなかったものが、少しずつ見えてくるというおもしろさがあり、ほとんどの児童がゲーム感覚で参加しやすい良さがある。また、理由を考える、説明する活動が多く、論理的な思考や算数についての語彙を獲得しやすい活動であると感じた。

ただし、今回は初めに理由を考えさせ過ぎたため、手がかりがないまま理由を考えることになってしまった。序盤では、あたりはずれをテンポ良く確認して、そのあとに理由を深めていく流れがよいと感じた。

また、今回の偶数と奇数では、簡単すぎるという指摘をいただいた。実際、何人かの児童はいくつかのあたりはずれを見ただけであたりを見抜いてしまっている。

もう一点、あたりの基準は、偶数、つまり2で割り切れる数があたりであつたが、「 $2 \cdot 4 \cdot 6 \dots$ 」があたりと認識している児童も見られた。

簡単すぎることと、あたりの基準の課題を解決するために、カードの中に小数や分数などを含ませることでより、ねらいに焦点化できると考える。

予想や感覚との「ズレ」が生まれる仕掛けをつくり、子どもに「問い」をもたせる。

### (3) 必要な情報を自分で調べる問題提示 (台形の面積)

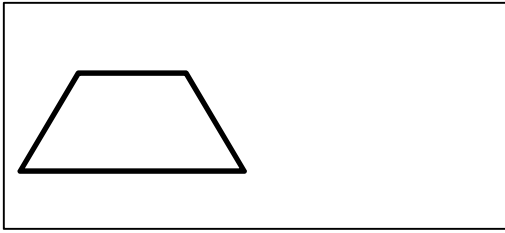
本時では、前時の台形の面積の求積を受けて、台形の面積の公式化へとつなげる場面である。

既習内容から台形の面積の公式にスムーズにつなげることと、式の意味を理解しながら公式化をしたいと考え、課題提示を工夫した。実践(1)のように、子どもへ見せる図には長さや角度を記入せずに提示した。

前時では、マス目入りの台形を使って学習し、マス目に沿って切ったり、移動させたりすることで、台形の面積を求めた。そこから公式へとつなげるために、課題としてマス目のない台形の図形を子どもたちに提示した。

子どもたちは、最初とまどっていたが、前時の学習から、変形することで求められ

たことに触れると、長さを測って面積を求めることができた。



このときに、子どもたちにはどこを測るかを意識させる必要がある。どこの長さを知ることができれば、面積を求められるのかということについて考えることで、「(上底+下底)×高さ÷2」の意味につながると考えたから

である。平行四辺形への倍積変形、もしくはその他の等積変形であっても、結局は上底・下底・高さの長さを調べなければ、正しい面積は求められない。

求めた場所や式を交流させながら、台形の面積を求めるためには上底・下底・高さを調べる必要があることを見つけられるように仕掛けた。

台形の面積の公式化は子どもにとって難しい学習と思われるため、話し合いでは友だちの考えに、疑問や付け加えをして活発に話し合いをする必要があると。そのため、教材提示装置や、黒板にはある程度子どもが自由に使える環境として用意し、式・図を合わせて説明するように指導する。

実際の授業では、自然と長さを測り、面積を求める姿が見られ、式に表すことまでスムーズに流れた。公式に向かうところでは、画面に図を映して色分けをして示すなど、工夫した説明をする児童も多かった。長さなどの表記が無いことで、既習内容をふり返ったり、辺や高さに着目して解決したりすることが必要になるという点で、この提示は効果的であった。

しかし、児童の中にはどこを調べるかを意識せずに、面積の求め方だけを説明してしまったり、説明することが聞き手に伝わらなかったりと、公式に向かう手前で時間がかかりすぎてしまった。

話し合いの中での教師の出所や、拾い上げる子どもの考えを見極めることが、ねらいに沿った学習を深めるために不可欠であると感じた。

子どもたちの思考の過程をどう把握し、「問い」の共有化を図っていくかが重要である。

## 2. 実践を振り返って

導入での課題提示や発問の工夫をすることで、まず児童の学習への意欲が高まることがとても感じられた。教科書では、課題が全て見えている状態であるものを、小出しにすることや伏せておくことで、児童の学習への取り組み方が変わってきた。「考えたい」「やってみたい」という声はがよく聞こえるようになったと感じている。導入部での子どもの動き出し方で、その時間の後の流れが大きく変わってくるということも実感できた。また、児童の視点をどう動かすのかということも、導入の持ち方次第であった。教師の意図に合わせて、導入に工夫を入れることで、児童の視点や考え方が大きく変わったように思う。しかし、課題の工夫をしたことで、事後の指導との結びつきが弱まった場面もあった。その一時間だけの活動になってしまわないように、単元計画を立て、つながりのある単元にすることが大切である。

話し合いの持ち方では、導入のあと、子どもたちが考え始めたときに、教師がどのようにつぶやきや疑問を拾っていくかで、学習内容の深まりが決まってしまうと感じた。分からないことや疑問を拾い上げ、全員で共有して解決することが今後の課題である。



#### 4 専任講師による研究の総括「算数授業」と「練習の虫」

関西大学初等部 尾崎 正彦

関西大学高等部アイススケート部に所属する宮原知子選手は、2015 年フィギュアスケート全日本選手権で優勝した。彼女は「練習の虫」と呼ばれている。コーチに注意されたこと、大会や練習でうまくできなかったことは、自分が納得できるまでとことん練習する。その練習量は、おそらく日本人選手の中でトップである。その練習量が、今期の彼女の安定した滑りや成績になって現れているのは間違いないであろう。

さて、今年度は尼崎市立教育総合センター算数科教育研究部会の先生方の算数授業向上のために、演習や指導案作り、そして実際の授業研究を重ねてきた。先生方の研究授業を参観して感じたことは、「よく勉強しているなあ」ということである。また、同年代の教師と比較しても、授業のうまさは秀でている。

そのように感じた第1の理由は、「課題提示」のうまさにある。研究授業の多くで見られる教科書通りの課題や課題の見せ方は、そこにはない。「算数授業は導入で8割決まる」の格言を意識した工夫がどの授業でも見られた。工夫した課題文を提示したり、課題を少しずつ提示したり、すぐに隠したりと様々なアイディアが凝らされていた。授業を参観しながら「うまいなあ！」と、何度も心の中で叫んだことがある。

次に感心したのは、子どもの問いや思いの共有のさせ方のうまさである。「〇〇さんの気持ちは分かるかな?」「〇〇さんが言ったこと、もう一度言えるかな?」などと投げ掛け、問いや思いの共有化を図っていた。これは、子どもたちの理解度をしっかりと確認しながら授業を進めることにもつながる。算数では、元気に発言する子どもたちの声に引っ張られて、表面的には授業が活発に進んでいるように見えることがある。しかし、声をあげない子どもたちが、ほとんど何も理解していない実態がそこにはあることが多い。その意味でも、先のような手立てで、クラス全体の理解度をきちんと確認しながら授業を展開していく先生方の力はすばらしい。

一方、共通する課題は「価値ある子どもの声や態度を逃している」ことである。「あれ」「絶対に…」「なんで」など、授業のねらいに迫る価値ある呟きや態度がどの授業でも生まれていた。このような呟きが上がること自体が、質の高い授業の証明でもあるが…。さて、それらの価値ある呟きや態度が、授業で取り上げられることはほとんどなかった。「今の声を取り上げないなんて、もったいないなあ」と思ったことが何度もあった。数分も経過すれば、その呟きを表現した子どもでさえそのことを忘れてしまっている。授業を深化させたり発展させたりする絶好のチャンス子どもが与えてくれたのに、教師がそのチャンスを逃したのである。

価値ある子どもの声や態度をキャッチし共有化していくスキルを身に付けることが、研究部の先生方の最大の課題である。この課題克服には、「毎日の算数授業の教材研究を充実させる」「授業場面で子どもの声や態度に常に目線を配る」「授業後に自分の授業を客観的に振り返り課題を洗い出す」などが必要である。算数授業のスキルを向上させるためには、フィギュアスケートのような地道な練習が必要である。楽しい算数授業を構築するための近道はない。「練習の虫」と呼ばれるほどの教材研究や授業の延長線上に、子どもの声で創り上げられる安定した算数授業が構築できる。

## 5 おわりに

「ブライトンの奇跡」とよばれたワールドカップ日本代表の大逆転劇により、「頭脳が9割」とも評されるラグビーが大きな脚光を浴びている。そのラグビーにおいて、「アンストラクチャー」という言葉が存在する。「アンストラクチャー」とは、「型のない状態」、「混沌とした状態」、「崩れた局面」等々と解釈されている。監督の采配等により、あらかじめ決められているフォーメーションやチームの約束事のみでは、選手たちが容易に解決できない局面のことである。この正念場ともいえるべき「想定外」な局面を制するためには、選手たちが自ら問題点を発見し、解決するために最善の決断を下せるかどうか、そしてその決断を共有し合うことができるかどうかを鍵を握っている。

日々の授業においても、授業の様相、子どもの様相は、刻一刻と変化していく。そのなかで、「アンストラクチャー」ともいえるべき「想定外」な場面に直面することも多々あるだろう。授業展開に「型」があると、ある程度「想定内」に進めることが可能であり、教師にとっては「便利」、「安心」の材料となる。しかし、そこには、依然、教師主導の授業が存在しており、子どもたちが「主体的・協働的」に学ぶ姿に迫ることはできない。「型」にあてはめていくような容易さに走ってしまえば、本当の意味で「授業力」を鍛え磨くことはできない。

本研究部員は、尾崎先生の示す「価値ある子どもの声や姿・考え方などを授業の舞台に載せ、クラス全体で共有・発展させていくような授業過程」を目標とする算数の授業として設定し、「授業改善」を図るため、個々の研究部員が自ら課題をもって自立的、主体的に行う研究実践を積み重ねてきた。

「授業研究」、「授業診断」そして「日々の授業実践」を通して、「価値ある子どものつぶやき」を逃しているという事実と直面すると同時に、いかに「価値ある子どものつぶやき」を察知する力を磨いていくことが大切であることを痛感することができた。このような臨機応変な対応が問われるような局面を教師が自ら挑み、たのしむことができるか、その場数を踏んだ分だけ「察知力」、「判断力」、「授業力」が研ぎ澄まされていくと考えている。

これからも課題を克服するべく、引き続き、「授業改善」に向けての努力を積み重ねていきたい。

次年度は、研究部員が所属校を中心として、研究実践を普及し、教師の「意識改革」、「授業改善」を推進するリーダーとしての「啓発性」を高めていきたい。そのことにより、校内や市内においても日常的に教師同士が「学び合う場」が生まれ、活性化されていくことが望まれる。

さらに、全国学力状況調査のB問題における課題としてあげられる「思考力・表現力」を鍛えるためには、「授業改善」とともに、「テストの変革」も不可欠となる。そこで、単元末に記述式テスト等を導入し、「授業」と「テスト」の双方向的な実践を積み重ねることと「学力向上」について検証・考察していきたいと考える。

【 参考・引用文献 】

『算数学力日本一への挑戦－問題解決型授業離脱の校内研修改革ヒント－』

著 者 尾崎 正彦 (明治図書出版株式会社 2014/10)

『算数研究で授業が学校が変わる－授業改革から学校改革へ－』

編著者 田中 博史 著 者 新潟市立浜浦小学校

(株式会社東洋館出版社 2010/12/26)

『思考力・表現力を評価する算数テスト集－B問題に強くなる－』

編著者 尾崎 正彦 (株式会社東洋館出版社 2013/12/25)

『子どもの学力差に向き合う算数授業のつくり方』

企画・編集 全国算数授業研究会 (株式会社東洋館出版社 2015/8/8)

『算数授業づくりの“あたりまえ”を問い直す』

企画・編集 全国算数授業研究会 (株式会社東洋館出版社 2014/8/7)

『筑波発 問題解決の算数授業－変わる自分をたのしむ算数授業づくりへの転換－』

編著者 筑波大学附属小学校算数教育研究部 (株式会社東洋館出版社 2015/6/12)



## すべての子どもが「楽しく・わかる・できる」を目指して 工夫する授業のデザイン

### ー すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業プラン ー

指導主事 田 中 かおり

研 究 員 上 田 晶 子 ( 長 洲 幼 ) 森 戸 寛 子 ( 尼 崎 北 小 )

〃 下 原 貴 恵 ( 大 島 幼 ) 渡 邊 由 香 ( 立 花 小 )

〃 山 本 由 紀 ( 立 花 幼 ) 福 田 美 香 ( 園 田 南 小 )

〃 小 杉 宏 美 ( 清 和 小 ) 田 邊 奈 緒 美 ( 中 央 中 )

東 田 直 久 ( 浜 小 ) 山 大 玲 ( 尼 崎 双 星 高 )

#### 【内容の要約】

幼稚園・小学校・中学校・高等学校それぞれのステージにおいて、教室でともに学ぶ子どもたちの中には、特別な支援を必要としている園児・児童・生徒がいる。学習面や行動面で何らかの困難を示す子どもを含む、すべての子どもにわかりやすいよう配慮した授業や指導方法の工夫を考えていくことは、すべての園児・児童・生徒にとってわかりやすい授業につながる。

本研究では、特別支援教育の視点を導入した授業実践を通して、「どのような手立てをすればすべての子どもにとって『わかる』授業になるのか」「どうすればすべての子どもが『できる』授業になるのか」などの指導の工夫と共に、「子どもの多様性を踏まえた学級づくり」について、「ユニバーサルデザイン化」をめざし、尼崎の子どもの姿を通して研究・実証することとする。

キーワード：子ども理解 特別支援教育の視点 わかる授業 視覚化 焦点化  
パターン化 共有化 ボディイメージ 多様性を踏まえた学級づくり  
ユニバーサルデザイン化

|                                        |     |
|----------------------------------------|-----|
| 1 はじめに                                 | 117 |
| 2 研究の内容                                | 117 |
| 3 実践事例                                 |     |
| (1) 実践事例 その1 幼稚園                       | 118 |
| (2) 実践事例 その2 小学校1年生                    | 119 |
| (3) 実践事例 その3 小学校5年生 ー事象に着目した取組ー        | 124 |
| (4) 実践事例 その4 中学生 ーICTを活用した授業比較による取り組みー | 127 |
| 4 研究のまとめ                               | 129 |
| 5 おわりに                                 | 130 |



## 1 はじめに

平成24年に文部科学省から出された「通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」によると、「学習面又は行動面で著しい困難を示す」と担任教師が回答した児童生徒の割合は約6.5%であるとしている。そして、その児童生徒の内、「個別の支援計画の作成や個別の配慮・支援等、いずれの支援もなされていない」割合は約38.6%であり、適切な指導や必要な支援が十分に行われてはいないと考えられる。また、その考察においては、「早期からの対応と取り組み」が求められ、「その児童生徒を取り出して支援するだけではなく、それらの児童生徒も含めた学級全体に対する指導をどのように行うのかを考えていく必要がある」としている。

現在尼崎市においては、特別な教育的支援を必要とする幼児・児童・生徒の多様な教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するために、全校園体制による特別支援教育充実の取組を促進している。

教師がすべての子どもの実態を把握・理解し、特別な支援を必要とする児童生徒への指導の視点は、すべての児童生徒にとってわかりやすい授業につながる。

本研究部会では「子ども理解を深める」と共に、授業実践を通して「すべての子どもが『わかる・できる』ことをめざす指導方法の工夫」「園児・児童・生徒の多様性を踏まえた学級づくり」について研究を進めた。

## 2 研究の内容

### (1) 研究のテーマ

すべての子どもが「楽しく・わかる・できる」を目指して工夫する授業のデザイン  
ー すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業プラン ー

### (2) 研究テーマの設定理由

本研究部会は昨年度、1年目の取り組みとして授業のユニバーサルデザイン化の必要性をはじめ、子ども理解の視点やその考え方について学ぶことを中心に研究を進めてきた。

今年度は子どもの実態をふまえた園児・児童・生徒への手立てを考え、実践することを中心課題として「すべての子どもが『楽しく・わかる・できる』を目指して工夫する授業のデザイン」を研究テーマに設定し、「ーすべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業プランー」をサブテーマに研究を進めることとした。

そのためにも、本研究部員を幼稚園（3名）、小学校（5名）、中学校（1名）、高等学校（1名）の教員で構成し、幼稚園教育(就学前教育)から高等学校までの視点に立った教育研究を進めていく。

### (3) 研究の仮説

園児・児童・生徒の実態を把握して理解を深め、それをもとに、すべての子どもにとって「楽しく・わかる・できる」保育・授業づくりを研究することで、園児・児童・生徒の課題の改善につながる効果的な指導の方法が明らかになると考え実施した。

### (4) 実践の評価方法

研究協力学級において子どもの様子を観察した資料をもとに、研究部員で分析し実態を把握する。それらをもとに、特別支援教育の視点を導入した具体的な手立てを考え、

ユニバーサルデザイン化をめざした支援を実践し、児童の様子を観察・比較することによって、活動や取組の変化について明らかにするとともに、効果的な指導方法について評価する。

### 3 実践事例

#### (1) 実践事例 その1 幼稚園

クラス全体の園児にとって楽しく安心して過ごせるクラスづくりを目指すことを通して、支援が必要なAとクラス全体に援助し、ユニバーサルデザイン化をめざした保育の実践事例をあげ考察する。

##### 1. Aの実態

クラス活動では、目についたものに興味が移行し、立ち歩いたり思いついたことを話し始めたりするが、つくったりかいたりすることなど自分の興味があることに対しては取り組もうとする。6月時点においては、教師が「ここまでできたね」「あと～だけだね」と言葉掛けをすることで、見通しが分かり、安心して取り組むことができるようになっている。友達とかかわりたい気持ちはあるが、自分の思いが通らなかったりすると思いを態度で示したり、遊びを途中でやめたりしてしまう。教師がかかわることで、友達と一緒に活動する楽しさを感じつつある。

##### 2. 実践の概要

##### (1) 「グループでポスターを作ろう」5歳児

##### (2) ねらい ◇クラス全体のめあて ◆Aのめあて

◇思いを出し合いながら、グループのポスターを一緒につくことを楽しむ。

◆友達がするのを真似たり、話すのを聞いたりしながら、友達と同じ場でつくことを楽しむ。

##### (3) 展開

| 幼児の活動           | UDの視点        | △環境○教師の援助                                       | ●Aの援助                                           |
|-----------------|--------------|-------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 4人グループに分かれる。    | グループの作り方の工夫  |                                                 | ●1 安心して思いを言いやすい友だちと同じグループになれるように配慮する            |
| 教師の話を聞く。        | 座り方、場所、位置の工夫 | △同じグループの友達と顔を合わせて活動ができるよう、机に向かい合わせで座る。          | ●2 意識が教師の方に向きやすいように、座る場所を大勢の園児が視界に入らない前方の正面にする。 |
| 制作の流れを知る。       | 視覚的支援        | ○今から何をするのかが分かり、関心や期待をもてるよう、素材を見せる。              |                                                 |
| 「今からすること」の紙を見る。 | 見通しをもたせる。    | ○作り方の順番が分かるように、前に「今からすること」を掲示し、各グループにも1枚ずつ配布する。 |                                                 |
| パスとのかき取りに行く。    | 明確な指示        | ○指示を短い言葉で伝えることで、理解できるようにする。                     | ●3 顔の形をとらえてかきやすいよう小さい紙を準備する。                    |
| 小さい紙に自分の顔をかく。   | 教材の工夫        |                                                 |                                                 |



|                                           |       |                                                                                                            |                                                                                                                                                                     |
|-------------------------------------------|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4人グループでそれぞれの思いを出し合い、1枚の画用紙に自分のかいた顔や飾りを貼る。 | 教材の工夫 | <p>○それぞれの思いやよさに気付けるように、工夫しているところやがんばっているところを言葉にしていく。</p> <p>○思いを言えない幼児には、教師が間に入りみんなが思いを出せるようにきっかけをつくる。</p> | <p>●4 顔のパーツに気付くことができるように、友達や教師の顔を見せる。</p> <p>●5 自分の顔ができた達成感を味わえるように、できたことを一緒に喜ぶ。</p> <p>●6 友だちと一緒に完成した喜びを味わえるように、1枚の画用紙にグループみんなの顔を貼り、ポスターが出来上がっていく様子を言葉にして知らせる。</p> |
|-------------------------------------------|-------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

### 3. 実践の成果と課題

#### (1) 実践の成果

- ・グループの編成を工夫したことにより、Aは安心して取り組むことができ、友達の考えを受け入れることができた。●1
- ・Aの座る位置の工夫をしたことで、教師の指示を聞こうとする姿が見られた。また、Aが困っている時には、教師が側に行って声を掛けることができたので、最後まで同じ場で取り組むことができた。●2
- ・制作の導入において、視覚支援は見通しをもつために有効であることが分かった。
- ・Aと同じように困っている他の園児に対しても、いろいろな素材を準備したことで、自分なりに工夫してつくることができ、作った顔や飾りを1枚の画用紙に貼ることで、友達と同じように自分でできた、頑張ったということがはっきり分かり、うれしいという気持ちにつながった。
- ・Aに関しては、ポスター作りに興味をもって取り組み、自分の顔ができあがり教師に認められた喜びから自信につながった。また、同じグループの友達と1枚の紙に貼り合わせることで、みんなのできた喜びや達成感も味わうことができた。●5●6
- ・全員にとっても、最後に1枚の画用紙に貼り合わせることで、自分達で作ることができたという気持ちにつながった。

#### (2) 実践の課題

- ・グループでの話し合いの中で、それぞれの幼児が自分の考えを言ったり、友達の考えを聞いたりできるようにするためには、4人のグループの人数は多かった。今後は一人ひとりが自分の思いや考えを伝えられるように、場の設定やグループの人数の工夫が必要である。
- ・グループに一枚の画用紙を用意したことで、それぞれが自分の思いを出して友達と一緒に1枚の作品を完成する喜びを味わうことができたことから、その時期の幼児の実態に応じた教材の工夫が必要であると改めて実感した。

#### (2) 実践事例 その2 小学校1年生

学習面や行動面で何らかの困難を示す子どもを含む学級のすべての子どもが「わかる・できる」をめざし、ユニバーサル視点でデザインした指導の方法を、2つの実

践事例をあげ考察する。

## 1. 児童の実態と実践

学級全体の児童の様子を参観し、同時に児童の絵や観察記録などの作品を観察した。授業後の研究会で検討し、実践1として、ぼんやりしていてほとんど学習に参加できていなかったA、参加しようとしているが指示の理解が難しそうだったB、姿勢や手の動きが大変気になったCの、特に3名について観察することとした。

また、字が曲がったりまっすぐに書けないなど書くことが苦手な児童や、力加減が分からなかったり友だちとの距離感がつかみにくい児童がいるため、実践2として学級のすべての児童にボディイメージ（自分の体への気づき）や体幹をきたえる運動を継続して行った。

## 2. 実践1の概要

A・B・C3名の児童の様子を撮影した後、その記録から教師の指示・発問に対してどれだけ反応できているかを数え記録した。なぜ反応できなかったのか、どうすれば反応できるようになるのかなど、その手立てを考え実践することとした。

9月30日(水)3校時の国語において、事前にA・B・C3名の児童への支援とその手立てを考えた指導案を作成した。学習の流れ（音読→発表→ノートを書く）は、前回の撮影時と同じになるようにした。その手立てが児童にとって有効であるならば、教師の指示への児童の反応が前回よりよくなっているのではないかと仮説を立て、前回と同じ方法で授業中の児童の様子を撮影・記録し、教師の指示に対して適切に反応できているかどうかを調べた。また、教師の支援に対して児童がどのように反応しているか児童の様子を観察した。

(1) 単元名 かたかなをみつけよう

(2) 単元目標 片仮名の語を正しく読み、片仮名で書く言葉を見つけて、書くことができる。

## (3) 評価基準

|          |                                 |
|----------|---------------------------------|
| 関心・意欲・態度 | ・身の回りにある片仮名を進んで探そうとしている。        |
| 書く       | ・語としてまとまりを意識して、片仮名の語を書いている。     |
| 言語活動     | ・教科書に提示された片仮名を、正しく読んだり書いたりしている。 |

## (4) 本時の展開

| 学習活動                       | 指導上の留意点                            | UDの視点     | 個への手立て                                 |
|----------------------------|------------------------------------|-----------|----------------------------------------|
| 1. めあてを確認する。               | ・めあてを復唱し確認させる。                     | ・個別の指示    | ・傍で視線を合わせ、めあてを読むように促す。(A)              |
| 2. 音読をする。                  | ・教科書のページ数を板書し、開くページを見せ、視覚的に支援する。   | ・視覚的支援    | ・教科書を開けていない児童には個別に声をかける。(A・B)          |
|                            | ・音読姿勢の「合言葉」を言い、姿勢の確認をする。           | ・明確な指示の工夫 | ・姿勢を確認する。できていないときは、声をかけ音読姿勢をとるように促す(C) |
| 3. 教科書の詩から片仮名の言葉を見つけて発表する。 | ・教師に続いて音読させる。                      | ・個への配慮    |                                        |
|                            | ・片仮名の言葉が正しく読めない場合は支援する。<br>コップ・サラダ |           |                                        |
|                            | ・見つかった言葉をリズムにのせて音読する。              |           |                                        |

|                           |                                                                                                                                      |                                                                                              |                                                                                         |
|---------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 4. 片仮名の言葉をノートに書く。         | <ul style="list-style-type: none"> <li>正しい書き方を確認しながら視写させる。</li> <li>ノートと同じマス目の小黒板を用いて、正しく写せるように支援する。</li> </ul>                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>個別の指示</li> <li>ノートと板書形式の同一化</li> <li>個への配慮</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>活動についてこれていない場合は、そばへ行き声をかけて活動を促す。(A・B)</li> </ul> |
| 5. 知っている片仮名の言葉をノートに集めて書く。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>思い浮かばない児童には、教科書の絵を参考にしてよいことを伝える。</li> <li>挿絵を拡大して提示する。</li> <li>拗音、促音などは黒板にヒントを書く。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>視覚的支援</li> </ul>                                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>片仮名が分からない場合はカタカナ表を見せて個別に指導する。(A)</li> </ul>      |

(5) 支援が必要な児童への具体的な手立て

|   | 対象児の実態                                                                                                                        | 予想される困難さ                                                                                                   | 具体的な支援・手立て                                                                                                  |
|---|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| A | <ul style="list-style-type: none"> <li>ぼーっとしていることが多く、指示されたことを行動に移すことができない。</li> <li>行をとばしたり言葉が抜けたりして、板書を正しく視写できない。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>全体での指示を聞き漏らし、教科書を開くことができない。</li> <li>板書を正しく視写できない。</li> </ul>       | <ul style="list-style-type: none"> <li>意識がこちらに向いていることを確認してから指示をする。</li> <li>机間指導の際、正しく視写できるよう促す。</li> </ul> |
| B | <ul style="list-style-type: none"> <li>全体での指示が伝わりづらい。</li> <li>分からないときには周囲を見てから取りかかるため行動が遅く、時間内に書き終わらないことがある。</li> </ul>      | <ul style="list-style-type: none"> <li>指示の意味が理解できず、次にする活動が分からない。</li> <li>自分の活動に自信がもてず、行動に移せない。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>全体指示の後に、理解できていない場合は具体的な言葉で活動を促す。</li> </ul>                          |
| C | <ul style="list-style-type: none"> <li>学習中に、手遊びや物を口に入れたり、姿勢が崩れたりしやすい。</li> </ul>                                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>学習中に姿勢が崩れる。</li> <li>物を口に入れながら話を聞く。</li> </ul>                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>正しい姿勢で学習できるよう声かけをする。</li> </ul>                                      |

(6) 全体への指示による児童の改善

- ア 指示を短く端的な言葉で出し、一度に複数の指示を出さない。  
 そうすることで、児童が指示の内容を理解しやすくなり、スムーズに次の行動に移ることができる。
- イ 注意散漫になりがちな児童への注意喚起のために、手拍子をうちながら音読する。  
 音読に意識が向くとともに、全体の児童にとってもリズムよく音読することができる。多様な音読活動の工夫にもなり、学習に変化を持たせることができる。
- ウ 指示を出しながら、教科書のページ数を板書する。  
 情報が視覚化されるので、聞き逃した児童も自分で教科書を開けることができる。また全体の児童も確認することができる。
- エ よい姿勢を意識させるため、音読姿勢の「合言葉」によって姿勢を意識させる。  
 「合言葉」を使うことで、教師が注意をするような発言をしなくても、児童が自ら姿勢を意識する



<本時の板書>

ことができる。

オ ノートに正しく写せるように支援するためノートと同じマス目の小黒板を用いる。マスを空けるところや行の確認をすることができ、見やすいノートづくりに繋がる。

### 3. 実践1の児童の観察

教師の指示に対し、児童が適切な反応をした時は、下の表に○で示した。隣の人を見てから反応したり、教師に支援してもらったとき、全く指示を聞いていないとき等は、反応なしとして記入していない。

#### (1) 7月実施の授業

|    | 教師の指示                   | A | B | C |
|----|-------------------------|---|---|---|
| 1  | 何も持ちません                 |   |   | ○ |
| 2  | 全員で読みます                 |   |   | ○ |
| 3  | 全員で読みます（2回目）            | ○ | ○ | ○ |
| 4  | 教科書 78 ページを見ましょう        | ○ |   | ○ |
| 5  | 指で押さえながら聞いてください         |   |   | ○ |
| 6  | 先生が読んだ後、続けて読んでください      | ○ |   | ○ |
| 7  | 教科書を置いて前を向きましょう         |   |   | ○ |
| 8  | たまみさんが好きなものはなんでしょう      |   |   | ○ |
| 9  | どうして好きなんですか             |   |   | ○ |
| 10 | ぼくは、私は、○○が好きです、言えるでしょうか |   |   | ○ |
| 11 | 教科書を置いて 名前シールの上に        |   |   | ○ |
| 12 | ノートを開いて下敷きを入れます         |   |   | ○ |
| 13 | 姿勢、足机の下に入れてください         |   | ○ |   |
| 14 | 顔を上げましょう                |   |   | ○ |
| 15 | 日時からいきます、鉛筆用意           | ○ | ○ | ○ |
| 16 | この後は好きなことを書いてください       | ○ | ○ | ○ |

#### (2) 9月実施の授業

|    | 教師の指示                                               | A | B | C |
|----|-----------------------------------------------------|---|---|---|
| 1  | 黒板を見てください                                           | ○ | ○ | ○ |
| 2  | では読みます、せーの                                          | ○ |   | ○ |
| 3  | 教科書 112 ページを開けます                                    |   |   | ○ |
| 4  | 姿勢いいですか 足はぺったん せなかは「ぴん」おなかとせなかに「ぐうひとつ」（音読姿勢の「合い言葉」） |   |   | ○ |
| 5  | では読みます                                              |   | ○ | ○ |
| 6  | 先生の後に読んでください                                        | ○ | ○ | ○ |
| 7  | 教科書を置いてください                                         | ○ |   | ○ |
| 8  | （リズム打ちを始める）                                         |   |   | ○ |
| 9  | （リズムにのって）コップにサラダ～                                   | ○ | ○ | ○ |
| 10 | 出てきたカタカナを発表してください                                   | ○ | ○ | ○ |

|    |                   |   |   |   |
|----|-------------------|---|---|---|
| 11 | ちょっと読んでみます        |   |   | ○ |
| 12 | 前を向いてください         | ○ |   |   |
| 13 | せーの               | ○ | ○ | ○ |
| 14 | ノートを開いて下敷きを入れましょう | ○ |   | ○ |
| 15 | 鉛筆準備              | ○ | ○ | ○ |
| 16 | 形をよく見て書きましょう      |   | ○ | ○ |

#### 4. 実践1の考察

適切な反応を示した回数を右の表のようにまとめた。

| 児童    | A  | B | C  |
|-------|----|---|----|
| 7月の授業 | 5  | 4 | 15 |
| 9月の授業 | 10 | 8 | 15 |

<適切な反応を示した回数(16個中)>

A・Bともに、7月に比べて9月実施の授業の方が適切な反応が増えている。7月は、途中からほとんど指示通り動くことができず、手遊びをして、隣の人ばかり見ていた児童が、授業に参加し続ける姿勢を示すことができた。これは、7月に比べて、適切な支援を行うことができた結果と言えるだろう。特に、手拍子をしてリズムに合わせながら音読した時には、3人とも声を合わせて読むことができていた。体を動かすことにより、逸れがちだった意識を授業に戻すことができたからだと思われる。

また、Cについては反応の回数は変わらないが、「せーの」や「9月の4のようなりズミカルな言葉」を工夫したり、児童みんなで音読姿勢の合い言葉を言ったり、手拍子でリズムをとったりしたことにより、物を口に入れたり口元に手を持って行ったりする回数が減り、よい姿勢をとる時間が増えた。

#### 5. 実践1の成果と課題

##### (1) 実践の成果

視覚的な支援や明確な指示の工夫などのユニバーサルな配慮により、A・B・C3名の児童のような特性の違う子どもに響く、効果的な指導ができた。

##### (2) 実践の課題

児童にとってより効果的な指導を行うには、児童が何に困っているのか、どんなことにつまづいているのか、どんな力が足りないのかなど、一定の取り組みにおいて、児童に入りやすい言葉や知るに至った一人ひとりの実態把握が大事である。

#### 6. 実践2の概要 全体へ継続して行った指導

##### (1) 書くことー「書字」の指導の実践ー

書くことが苦手な児童や、字が曲がってしまったり、まっすぐに書けなかったりする要因の中には、鉛筆の持ち方が悪く鉛筆の先が見えないために姿勢が悪くなったり、姿勢がくずれているために筆圧が弱くなったりすることがある。また、力加減が分からなかったり、友だちとの距離感がつかみにくかったりする児童は、ボディイメージ（自分の体への気づき）が弱く、姿勢を維持できないことがある。そのような場合、正しい姿勢や鉛筆の持ち方を時折指導することはもちろん大切だが、根本となる体を鍛えることも大切である。そこで、スムーズに体を動かせるための運動遊びを日々の体育や授業の始まりなどに取り入れることにした。

ワニ歩き・くま歩き・クモ歩きなど全身を使った運動やかえる逆立ち・つばめなどの体を支える運動などを継続して行った。



## (2) 実践2の考察(「書字」の分析)

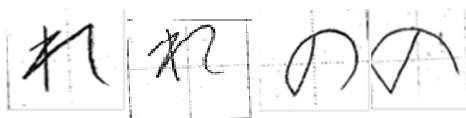
右は、Bが7月に書いたものである。文を正しく書き写すことができず、何度も書き直した後が見える。句読点も正しく打てず、力加減がうまくできないため角張った文字となっている。しかし12月に書いたものは、文を正しく書き写すことができており、字のバランスも随分よくなっている。

また、下のDも文字の書き方に成長が見られた。「れ」は、7月の時には折れが書きにくかったようだが、12月には折れが上手になり、字のバランスも大変よくなっている。「の」は線の終わりが回りきっていなかったのが、最後まで書ききることができるようになり、のびのびとしたはらいができるようになっている。



12月 7月

< Bのノート >



< Dのノート >

このように、書くことに関して全体的に向上が見られたのは、9月より継続して書き方の指導や運動を行った成果だと考えられる。

## (3) 実践事例 その3 小学校5年生 一事象に着目した取組一

### 1. 児童の実態

学級には時間や行動の切り替えが難しく、提出物が出せない児童がたくさんいる。自尊感情も低く自信のない児童が多いため、友達に対する優しさや思いやりの気持ちが育っておらず、よく発言する児童とそうでない児童の二極化がある。また、学力低位層の児童や自閉症スペクトラム・ADHD・愛着障害など、特別な支援を必要とする児童も在籍している。そのため学級全体の児童にとって「わかる・できる」授業と、安心して過ごせるクラスづくりを目指すことを通して、ユニバーサルデザインの視点で工夫をし、デザインした実践事例をあげ考察する。

### 2. 実践の概要

#### (1) 授業の視覚化の工夫

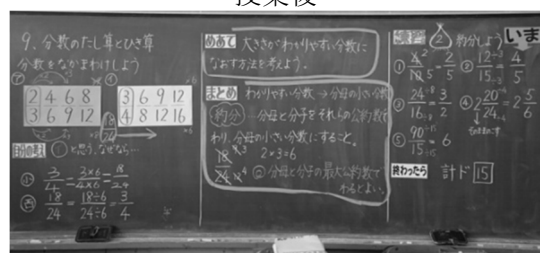
言葉の指示だけではなく授業では具体物を使う場面を取り入れた。めあてやまとめ、練習問題をパターン化して板書し、1時間の見通しを持たせた。また単元の学習計画

を子どもと一緒に考えて掲示し、何のために学習しているのかを見失わないように工夫した。

授業前



授業後



5年生 算数「図形の角」

四角形を並べてしきつめることで角度を確認することができる。

## (2) 継続した体づくりと「集中タイム」

「集中タイム」として、授業の導入1分間にさまざまな活動を取り入れた。

ア 体づくりの実践として、机で「ツバメ」(写真)をさせた。上腕、指先を鍛えることで運筆がスムーズになった。また、「片足で立つ活動」をすることにより、体幹を鍛え姿勢を良くすることにつながった。

イ 国語の時間の実践として、授業の初めに古典の暗唱などで大きな声を出し、すっきりした気分で授業に臨めるようにした。



## (3) 全員が参加できる授業づくりの工夫

ア 実物を見せたりクイズを取り入れたりするなど授業の導入を工夫して、興味・関心を高める。

イ 指示はなるべく作業前に出すようにする。どうしても作業中に注意や指示を出すときには全員の手を止めさせ、目が合ったのを確認してから話すようにする。

ウ 発問は全員が一回で理解できるようによく考える。

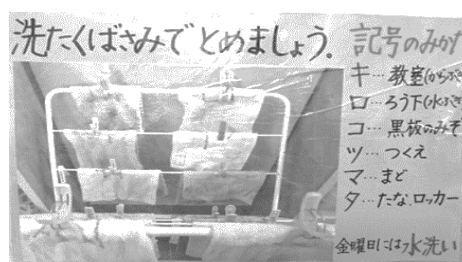
エ 友達同士で話し合ったり教え合ったりする場面を多く設定する。

オ 普段、友達から問題行動が多いと思われるような児童にも、見せ場が作れるような展開を考え、友達の良さや頑張りを認められる集団作りをする。

## (4) 教室の環境づくりの工夫

ア ロッカー、掃除道具が整った写真等の掲示をすることで整理整頓の方法を共通理解することができる。

イ その日の時間割や一日のスケジュールを朝の会で伝え、黒板の横にも掲示すること



で見通しを持ちやすくする。さらに一週間の予定や宿題、持ち物を前もって知らせる予定表も活用する。

ウ 宿題や連絡帳を入れるかごに「音読カード」「連絡帳」などのシールを貼り、チェックカードも併せて置くことにより自分の力で確実に宿題を提出できるようにする。

エ 教室の前面には学級目標など必要最小限の掲示物にして、黒板に集中できるようにする。

(5)「困っている子」を受け入れる学級経営

ア 休み時間にたくさん話をしたり、授業中にも机間指導をしながら一言声をかけたりして、一人ひとりの「見て見て」欲求をなるべく満たすようにする。

イ 一人ひとりとスキンシップを多くとるようにする。

ウ 当たり前なことでも、できていたらとにかく褒めるようにする。

エ ルール作りは、教師が決めるのではなく、全員で一つ一つを話し合い、スモールステップで納得して守れるようにする。

オ 「何のためにするのか」を常に意識させる。

カ おたがいのよいところを見つけ、「自分は大切に思われている、認められている」という自尊感情を育てる活動を行うようにする。

キ パニックになった児童がクールダウンできるスペースを確保し、落ち着いたら自席に戻れるようにする。戻ってきたときにあたたかい声かけができるよう、クラスの児童に話す。



3. 実践の成果と課題

個別の配慮や支援が必要な児童も含めた学級全体の児童にとって、多くの成果があった。

(1) 実践の成果

- ・パターン化することで授業に安心して参加できたり、提出物を忘れず出せるようになった。
- ・耳だけの情報だけでなく、視覚的な支援をすることで、スムーズに活動に取り掛かれるようになった。
- ・気持ち、行動の切り替えが早くなり、友達同士で声を掛け合い次の行動に移れるようになった。
- ・自分たちで話し合って物事を計画し、実行する力がついてきた。
- ・自信が持てるようになり、発表する児童が増えた。また周りの児童が友達の発言を聞き入れる雰囲気ができてきた。
- ・問題行動があった児童や特別な支援が必要な児童を、周りの児童があたたかく受け入れたり見守る様子が多く見られるようになった。

(2) 実践の課題

- ・学力低位層の児童に対する支援の手立てが十分に打てなかった。



- ・系統立てた継続的な取り組みが不可欠であるため、職員全体の共通理解が必要である。
- ・ユニバーサルデザインを意識した授業の準備（ICT、ワークシート、具体物）には時間を要するので、時間を捻出する工夫が必要である。

#### （４）実践事例 その４ 中学生 － ICTを活用した授業比較による取り組み－

今年度尼崎市家庭科研究会においてデジタル教科書を購入し、市内の家庭科教員たちで研究を進めている。授業のユニバーサルデザイン化を目指し、写真や文書では理解が難しい生徒のために、デジタル教科書の動画機能や作品製作のDVDを見せることによって授業がわかりやすくなっているか、アンケートで調査し考察する。

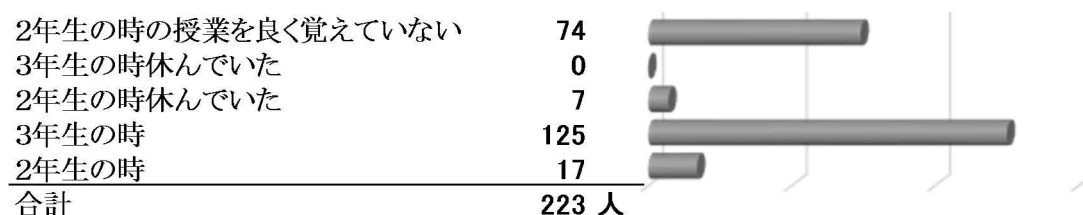
##### 1. 3年生での実践概要

2年生で学習した「衣服の手入れ」を、再度3年生でおこなうことを試み、どちらの授業が分かりやすかったかをアンケートで調査した。

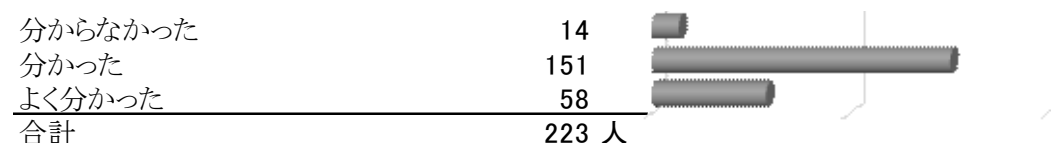
| 学 年  | 授 業 手 法                   |
|------|---------------------------|
| 2 学年 | 教科書・ノート中心に口頭や板書による授業を実施   |
| 3 学年 | 教科書・ノート + デジタル教科書による授業を実施 |

##### 【アンケートの項目と結果（3年生）】

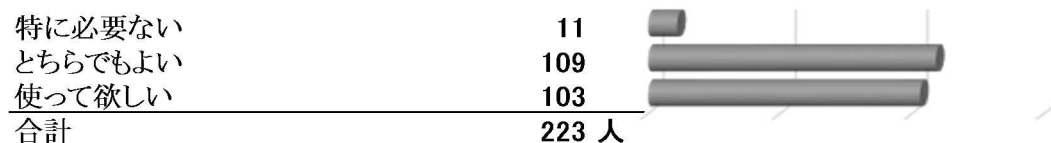
ア 2年生の時にも「衣服の手入れ」の授業をおこないました。3年生では動画を見て学習をしましたが、どちらが分かりやすかったですか？



イ 動画を見ることによって、洗濯の仕方はよく分かりましたか？



ウ 今後もこのようなデジタル教材を授業で使って欲しいですか？



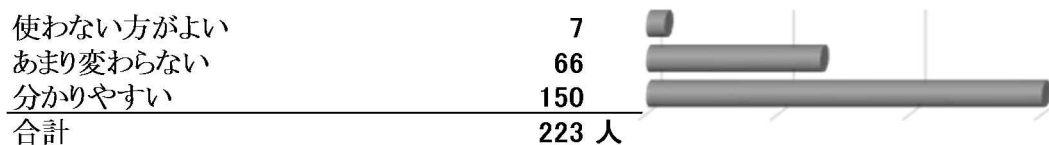
##### 2. 2年生での実践概要

2年生は「衣服の手入れ」と、被服製作において「スポーツパンツの作製」をしており、3年生と授業内容は異なっているが、動画を見せることによって授業が分かりやすくなっているかをアンケートで調査した。

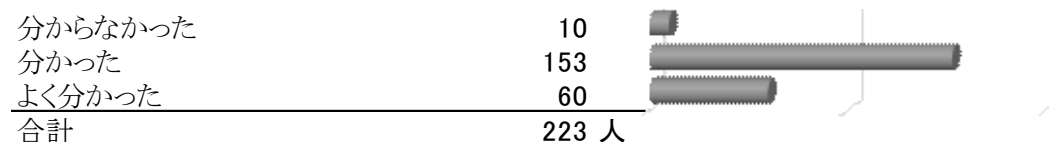
| 学 年  | 授 業 手 法              |
|------|----------------------|
| 2 学年 | 教科書・ノート + 動画による授業を実施 |

### 【アンケートの項目と結果(2年生)】

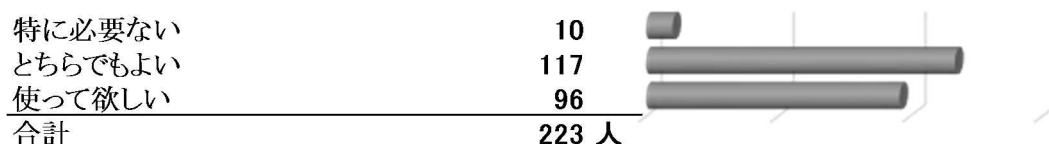
ア 昨年に比べ授業でよく動画を使っているが、どのように思いますか？



イ 動画を見ることによって、洗濯の仕方はよく分かりましたか？



ウ 今後もこのようなデジタル教材を授業で使って欲しいですか？



### 【スポーツパンツ完成作品の比較】

<動画を見せなかった年の多くの作品>



ゴムを通す幅が確保されて  
おらず、ねじれもある。

<動画を見せた今年の作品>



ゴムを通す幅が確保され、  
きれいに仕上がっている。

### 3. 実践の考察

- (1) 『イ 動画を見ることによって洗濯の仕方はよく分かりましたか？』では大半が「分かった」と回答していることから、デジタル機器の活用は有効であった。しかし、「わからなかった」と回答している生徒の中には学力低位層の生徒が多い。したがって、わかりやすく具体的な説明や、動画を見せる際の目的もはっきりさせておく必要がある。
- (2) 『ウ 今後もこのようなデジタル教材を使って欲しいですか？』という質問では、半数近くの生徒が使ってほしいと回答した。また、動画を見せることにより意欲的に取り組む生徒が増加した。
- (3) 『2. ア 昨年に比べ授業でよく動画を使っているが、どのように思いますか？』においては「使わない方がよい」と答えた生徒がおり、その理由として「パソコンがフリーズしたりして待っている時間がもったいない」と挙げた。デジタル教材を活用する側の技術や機材の調整の必要性を感じた。

### 4. 実践の成果と課題

#### (1) 実践の成果

今年の2年生は被服製作においてスポーツパンツを作製したが、製作過程について

デジタル教科書の動画機能を見せることによって、多くの成果があった。

ア 期日までに仕上がった生徒の数が増え、仕上がった作品の出来栄も良いものとなった。

イ パソコンで動画を再生することにより、分からない部分をくり返し確認でき理解を深めることで、最後まで取り組み続ける生徒の姿があった。

ウ 作業工程を理解できた生徒が増えることにより、生徒同士の教えあいや助け合いが増えた。特に男子が意欲的にミシンに取り組み、しかも完成させた割合が多いことから、男子の方が視覚化による反応が高いといえるであろう。



<仕上がった作品を着用する生徒>

#### (2) 実践の成果

「わかる授業」を行うために、デジタル教材をうまく活用することの必要性を実感するものの、その教材を思うように使用できない環境にある。今後のICTを活用した学習環境の充実が望まれる。

### 4 研究のまとめ

本研究部会では、すべての子どもが「楽しく・わかる・できる」を目指して授業のユニバーサルデザイン化に着目した授業実践や学級づくりを行い、実践内容を考察した。その成果と課題を次のようにまとめる。

#### (1) 成果

1. 座席やグループの工夫、先を見通せるような声かけ、視覚支援の工夫、ICT機器の活用、教室の環境づくりを行うことで、今から取り組むことが明確になり、取り組み続ける子どもの姿があった。
2. 学習活動の中に動きを取り入れる工夫をすることにより、意識が逸れることなく、また他の子どもと合わせた活動ができた。
3. 指先や上腕、また体幹を鍛え、ボディイメージを高めるトレーニングを継続して行うことで運筆がのびのびとスムーズになり、文字のバランスが良くなった。また、整った姿勢を維持できる時間が長くなった。
4. ICT機器の活用は、子どもの実態に合わせた活用ができ、学習活動の理解が深まった。そのことにより、意欲的に取り組む子どもが増加し、子ども同士の教えあいや助け合いにつながった。
5. 多様な子どもを受け入れるクラスづくりを行うことによって、あたたかく受け入れる様子や、友達同士で声を掛け合って活動したり、助け合う場面が見られるようになった。

#### (2) 課題

「すべてのステージで役立つ子ども理解と保育・授業プランの研究」をサブテーマに、授業のユニバーサルデザイン化に着目した授業実践や学級づくりを行ったが、学年が上がるにつれて、支援の必要な子どもの中でも特に学力低位層の子どもに対する支援が十分に打てなかった部分は否めない。園児・児童・生徒の取り組む意欲が高まり、また取り組み

続ける時間は確実に長くなったが、さらなる手立ての工夫の研究が求められる。

## 5 おわりに

授業のユニバーサルデザイン化研究部会では、本年度「幼稚園の取り組み」「小学1年の取り組み」「事象に着目した取り組み」「ICTを活用した授業比較による取り組み」の研究を行った。すべての子どもにわかりやすいよう配慮した授業や、指導方法の工夫を考えていくことで、様々な実践例を展開することが出来た。

「わかりやすい言葉や明確な指示の工夫」・「視覚的な支援」は、子どもの理解を助け「何をするのか」「何を考えるのか」が明確になることから、子どもたちの意欲を高めることにもつながっている。これらは、すべてのステージの子どもにとって効果的な指導法であった。また、ボディイメージ(自分の体への気づき)が弱い低年齢層にとって、体幹や上腕・指先を鍛えるトレーニングを継続して行うことは、運筆を向上させ整った姿勢を維持する力を育てることに効果的であった。

今後は、特別な支援を必要とする子どもだけでなく、学級すべての園児・児童・生徒の実態を把握・理解し、一人ひとりの具体的な支援・手立ての計画を立て、よりつながりを持った効果的な指導の方法について研究を深めていきたい。

### 【参考・引用文献】

・文部科学省「通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」・関西国際大学 兵庫県尼崎教育委員会「みんなの特別支援教育～授業のユニバーサルデザイン化をめざして～」・百瀬和夫 著「『笑育』のすすめⅠ～『ちょっと変な教師』が教育を救う～」さんだる文庫 平成・兵庫県教育委員会「授業のユニバーサルデザイン化モデル研究事業実践発表会指導案集」・兵庫県教育委員会「授業のユニバーサルデザイン化モデル研究事業実践発表会資料集」



平成２７年度 尼崎市立教育総合センター

専任講師

広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター

教 授 栗原 慎二

大阪教育大学大学院 准教授 寺嶋 浩介

関西大学外国語学部 教 授 今井 裕之

兵庫教育大学大学院 准教授 羽田 潤

関西大学初等部 教 諭 尾崎 正彦

大学との連携事業

関西国際大学 准教授 百瀬 和夫

〈紀要五十三号〉

研究報告書

平成二十八年三月

尼崎市立教育総合センター

〈紀要五十三号〉

研究報告書

平成二十八年三月

尼崎市立教育総合センター

〈紀要五十三号〉

研究報告書

平成二十八年三月

尼崎市立教育総合センター